

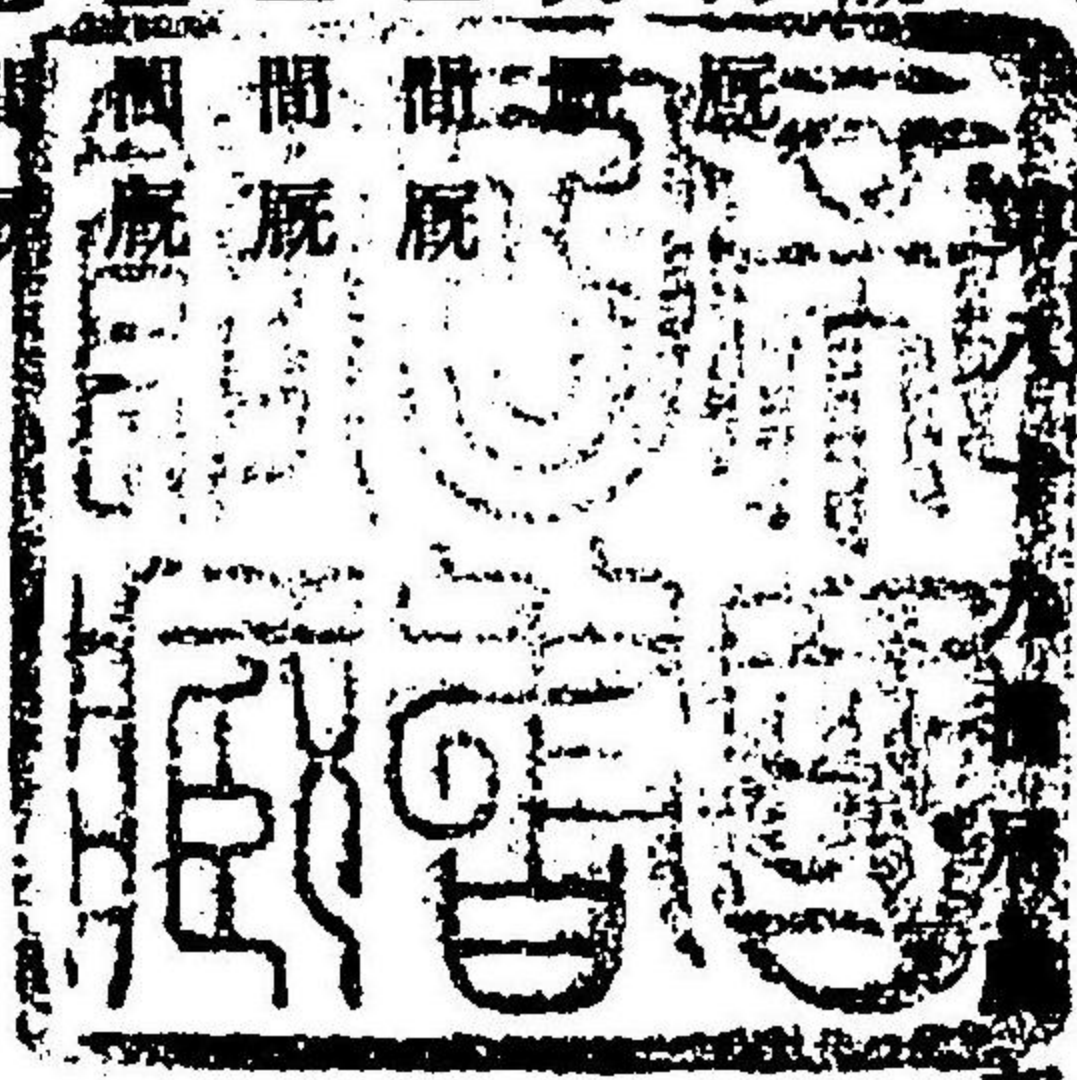
192  
55

故實  
叢書  
武家名目抄  
居處部  
卷十五



武家名目抄稿十五目次

内廐	一五九九
大廐	一六〇〇
二間廐	一六〇〇
三間廐	一六〇〇
五間廐	一六〇一
七間廐	一六〇一
十三間廐	一六〇一
十五間廐	一六〇一
一廐	一六〇一
鷹部屋	一六〇二
熊鷹部屋	一六〇二
第九十冊居處部十五	
床疊	一六〇二
紫縁ノ疊	一六〇二
小紋ノ疊	一六〇二
簾	一六〇三



部十四

武家名目抄稿十五目次

掛簾	一六〇三
天井	一六〇四
天井煙出	一六〇四
障子	一六〇四
アカリ障子	一六〇四
腰障子	一六〇五
妻戸	一六〇五
東妻戸	一六〇六
キリ戸	一六〇六
ワキ戸	一六〇六
葎	一六〇六
半葎	一六〇六
タカモカリ	一六〇七
タカモリ今元	一六〇七
目シルシノ杭今元	一六〇七
アシシロ	一六〇七
舞臺	一六〇七
定舞臺	一六〇七
樂屋	一六〇九
幕屋	一六〇九



芝居 今元

一六〇九

棧敷殿

一六〇九

棧敷

一六〇九

第九十一册居處部十六

政所

一六一二

政所廳屋

一六一三

公文所

一六一三

問注所

一六一三

問注屋

一六一四

關所屋

一六一四

評定所

一六一四

引付

一六一五

右筆部屋

一六一六

奉行所

一六一七

守護所

一六一八

地頭所

一六一八

代官所

一六一八

檢斷所

一六一九

沙汰場

一六一九

籠

一六一九

詰籠

一六一九

座敷籠

一六一九

土籠

一六一九

第九十二册居處部十七

庭

一六二〇

廣庭

一六二〇

大庭

一六二〇

小庭

一六二〇

壺

一六二一

石壺

一六二一

雨壺

一六二二

竹壺

一六二二

藤壺

一六二二

松庭

一六二二

鞠壺

一六二二

鞠庭

一六二二

懸

一六二三

四本懸

一六二四

白洲

一六二四

立砂

一六二五

置石

一六二五

第九十三册居處部十八

弓場

一六二六

的山

一六二六

棚

一六二七

的場的庭

一六二七

的場的庭

一六二八

遠的場

一六二八

數塚

一六二八

馬臺

一六二九

馬場殿

一六二九

流鏑馬屋

一六三〇

馬場

一六三〇

相廣馬場

一六三一

流鏑馬馬場

一六三一

犬迫物馬場

一六三一

犬馬場

一六三一

笠懸馬場

一六三二

外馬場

一六三三

內馬場

一六三三

壺馬場

一六三三

芝馬場

一六三三

馬場本

一六三三

馬場末 今元

一六三三

疏

一六三三

馬走

一六三三

扇形

一六三三

揚穴

一六三四

埴

一六三四

雄埴

一六三四

雌埴 今元

一六三四

埴上手 今元

一六三四

埴下手 今元

一六三四

埴門

一六三四

內傍示

一六三五

外傍示

一六三五

小繩

一六三五

外繩

一六三五

狩場

一六三五

狩倉

一六三六

狩山

一六三六

鷹場

第九十四册居處部十九

門	一六三六
惣門	一六三七
表門	一六三八
裏門	一六三八
大門	一六三八
小門	一六三八
四足門	一六三九
四足	一六四〇
棟門	一六四〇
唐門	一六四〇
藥醫門	一六四二
上土門	一六四二
平門	一六四三
冠木門	一六四三
土門	一六四四
不明門	一六四四
中門	一六四四
屏中門	一六四五

平地門

壁中門

鎗石門 今无

唐牆

築垣

築地

芝築地

釘貫

駒寄

第九十五册居處部二十

本所	一六四六
本所	一六四六
假屋	一六四六
本屋	一六四七
長屋	一六四七
小屋	一六四七
小屋	一六四七
小屋懸	一六四八
根小屋	一六四八
陣屋	一六四八
陣小屋	一六四八
直屋	一六四九
里城	一六五〇
小城	一六五〇
屋敷城	一六五〇
雜城	一六五〇
搦揚城	一六五一
搦揚	一六五一
力キ城	一六五一
城中	一六五二
城内 今无	一六五二
城下	一六五二
要害	一六五二
節所	一六五二
壘	一六五二
塞	一六五二
城取	一六五二
繩張	一六五二
繩打	一六五二
居城	一六五三
宿城	一六五三

番屋  
番所  
在番所  
寄屋番所  
遠見番所  
弓番所  
箒屋  
役所

第九十六册居處部廿一上

城	一六五四
城郭	一六五五
城壁	一六五五
稻城	一六五五
名城	一六五五
名城	一六五五
古城	一六五五
新城	一六五五
山城	一六五六
山城	一六五六
平城	一六五六

第九十七册居處部廿一下

里城	一六五七
小城	一六五七
屋敷城	一六五七
雜城	一六五七
搦揚城	一六五七
搦揚	一六五七
力キ城	一六五七
城中	一六五七
城内 今无	一六五七
城下	一六五七
要害	一六五七
節所	一六五七
壘	一六五七
塞	一六五七
城取	一六五七
繩張	一六五七
繩打	一六五七
居城	一六五八
宿城	一六五八

第九十八册居處部廿二

本城	一六七四
根城	一六七五
繫城	一六七六
押根城	一六七六
繫根城	一六七六
持城	一六七六
番城	一六七六
番持	一六七六
番手持	一六七七
番手持	一六七七
詰城	一六七七
外城	一六七八
端城	一六七八
足城	一六七九
出城	一六七九
取出城	一六七九
取手	一六七九
出張城	一六八一
出張	一六八一
向城	一六八一

付城	一六八二
明城	一六八三
捨城	一六八三
裸城	一六八三
第九十九册居處部廿三	
丸	一六八四
本丸	一六八四
詰丸	一六八五
二丸	一六八五
三丸	一六八五
甲丸	一六八六
乙丸	一六八六
中丸	一六八六
東丸	一六八七
西丸	一六八七
外丸	一六八七
出丸	一六八七
大手出丸	一六八八
大手出	一六八八
弱手丸	一六八八

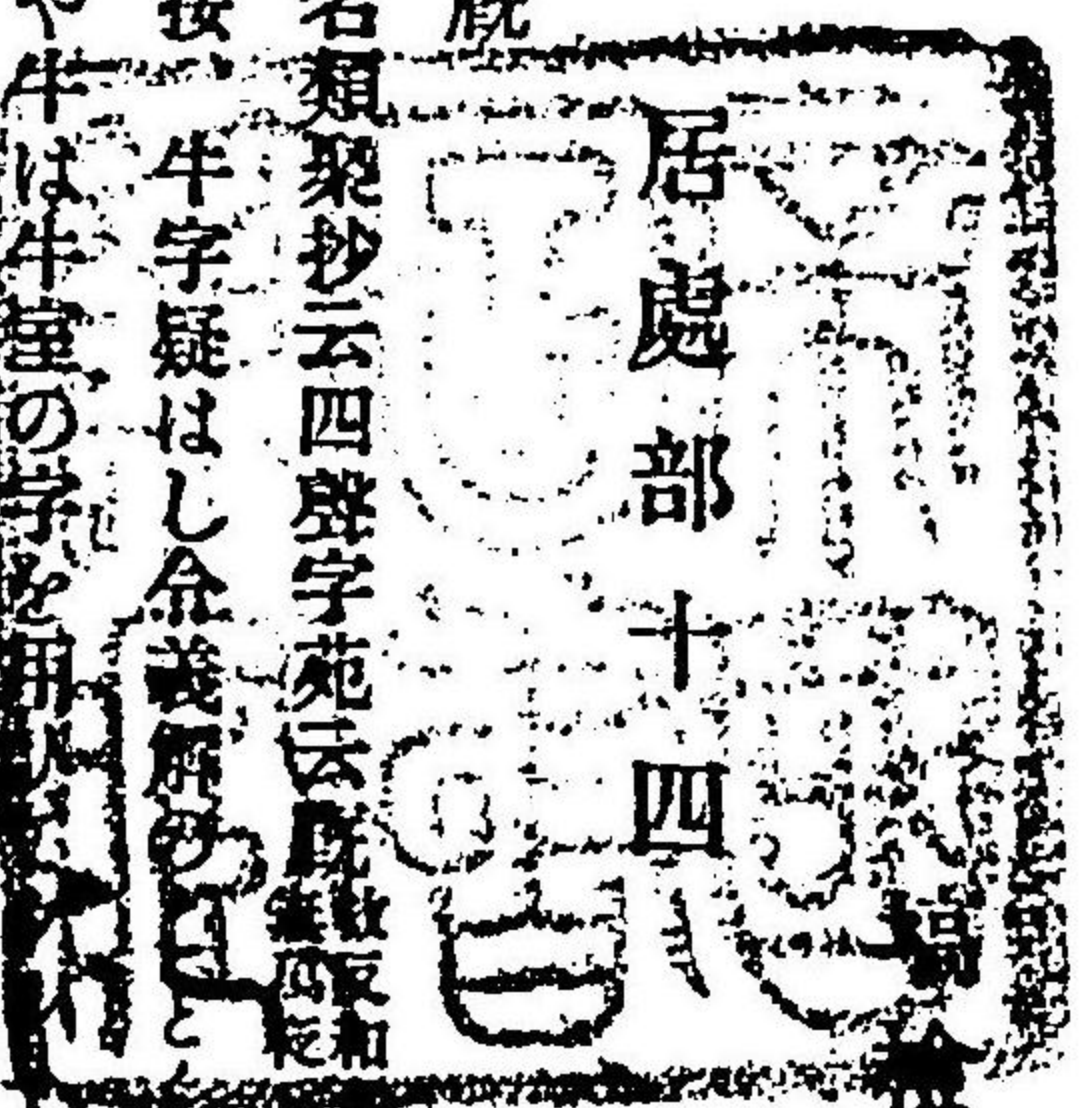
外形丸	一六八九
郭	一六八九
曲輪	一六八九
二曲輪	一六八九
三曲輪	一六九〇
內曲輪	一六九〇
外曲輪	一六九〇
外張曲輪	一六九一
橫曲輪	一六九一
腰曲輪	一六九一
帶曲輪	一六九一
葎曲輪	一六九二
出曲輪	一六九二
捨曲輪	一六九二
水曲輪	一六九二
的場曲輪	一六九二
町曲輪	一六九二
惣構	一六九二
外構	一六九二
黑構	一六九三

透構	一六九三
屋敷構	一六九三
町構	一六九四
橫矢構	一六九四
多門造	一六九四
多門	一六九四
第百册居處部廿四	
大手	一六九五
搦手	一六九六
虎口	一六九七
城戸	一六九八
大城戸	一七〇〇
一城戸	一七〇〇
二城戸	一七〇〇
三城戸	一七〇一
結城戸	一七〇一
一門	一七〇一
二門 今元	一七〇一
三門	一七〇二
詰門	一七〇二

二階門	一七〇二
黒門	一七〇二
黒鐵門	一七〇二
埋門	一七〇二
廊下門	一七〇三
上鎖門	一七〇三
透門	一七〇三
籠門	一七〇三
柵門	一七〇四
冠木城戸	一七〇四
揚城戸	一七〇四
揚篋戸	一七〇四
釘戸	一七〇四
桐戸張	一七〇四
大戸張	一七〇五
小戸張	一七〇五
門隠	一七〇五
升形	一七〇五
武者溜	一七〇五
勢溜	一七〇五

馬溜	一七〇五
馬出	一七〇五
角馬出	一七〇六
丸馬出	一七〇六
築地馬出	一七〇六
辻馬出	一七〇六
見付	一七〇六

武家名目抄稿第八拾九册



校保己一編

○厩

倭名類聚抄云四聲字苑云厩馬舎也

按牛字疑はし余義解の馬舎也と注すへき事に

や牛は牛屋の字を用ひたりト讀りと新井君美のい

ひしる事也

萬葉集云赤駒厩立黒駒厩立而彼乎伺吾往如思妻心乘而高山峯之手折丹射目立十六待如床敷而吾待公犬莫吠行年平治物語云七八人きりふせてみまやへはしり入馬二疋引いたし打のりくと、めよものともと、めよとて落けるてきにうしろを見せしとやおもひけんけんくはうはさか馬にのりてそはせたりける

吾妻鏡云治承五年五月廿四日己亥被曳小御所御厩等之地是能景時昌寛等奉行之

又云文治三年四月十四日乙酉雨降雷鳴霹靂落于政所因幡前司廣元厩之上

又云建久二年八月十八日甲午此間人々所進馬被立于新造御厩本自與所被立置之御馬相並有用捨先於南庭御覽十六疋也

又云同六年七月廿日壬寅若公御方御厩始立御馬三疋比企藤二奉行之

花營三代記云應永三十一年甲辰十一月九日貞經預御厩御料所員數入道照心可注之由直命也

季瓊日錄云寛正五年三月五日於御厩見洗御馬御具寸法記云馬屋の間は七尺五寸つ、也とちかね柱の面

八寸二分めんをとらすとちかね打所板より一尺八寸に可打也はらかけもたせのうわかた平は四寸二分長さ八寸其間一尺八寸なり衣かけの高さ三尺六寸とには廣さ三尺二寸同さんは七ツ又は九ツ也

毛利家記云天正十八年九月十八日天晴殿下様御成(中略)御馬屋十一騎立ナリ紅糸ノハラカケ十一ハナカワ十ニヤウ、ヒノ頭カケ十一ハツナ黒ヌリ蒔繪スエハツナ十一紅糸馬刀三ツ惣梨地紋馬クシ五ツ梨子地紋桐

○内厩

吾妻鏡云建久二年七月十八日甲子内御厩立柱上棟土

肥二郎岡崎四郎等沙汰之

太平記云洛中變道朝カ宿所七條東

洞院ヨリ俄ニ失火出來テ貯寶一モ

不殘内厩ノ馬トモマテモ多燒失ヌ

○大厩

吾妻鏡云建久二年六月十七日甲午

被建大御厩三浦介奉行之

又云建長三年二月廿日庚戌大御厩

此間新造高 後山崩顛云々 四谷口河俣

○二間厩

鎌倉年中行事云八朔公方様七間御

厩侍へ有御出二間御厩ト七間御

厩ノ間御庭ニ御間被替也

蟻川親元記云寛正六年四月十三日

寅上様奉公西山彌四郎貴殿御字事申之爲御禮太刀上

貳千疋折紙持參被副御太刀持直新

造於二間御厩被遣之

又云同六年七月十日乙卯松梅院禪親二千疋折紙持參於

新造二間御厩御對面同女中へ千疋いあひ上臈申之走禪

豫斗也

圖厩詞繪師大光圓○



○三間厩

太平記云稻村時成 千瀨條相模入道島津ヲ呼寄テ自ラ酌ヲ取テ酒

ヲ進メ三度傾ケル時三間ノ馬屋ニ被立タリケル關東無

雙ノ名馬白波ト云ケルニ白鞍置テソ被引ケル

長祿二年以來申次記云正月四日今日於三間之御厩一獻

在之一番衆申沙汰仍一番之頭細川淡路左京亮入道一人

伺公也

室町殿年中行事云正月四日將軍家出御于御對面所御供

衆申次御禮如每(中路)入御于常御所暫有テ渡御于三

間之御厩有御一獻一番ノ頭細川淡路左京亮入道申沙

汰也

蟻川親元記云寛正六年正月廿五日酉年始諸社御神馬御送

狀數通整之京極殿明日御成之時宜事光臨於殿中長老

達御齋恒例也三間御厩御一獻御相伴御衆各御狀物御給之

恒例

常照愚草云諸家の御内衆御禮の事於庭上懸御目事勿

論也然に甲斐一人は三間の御厩の立場の板上にて懸御

目也餘衆は皆以庭上也

三好義長亭御成記云御厩二間新造に立三間の厩の面の脇

也一間にはめしの御馬一間に進上の御馬を繋て御厩の者

共此御厩にあり

○五間厩

蟻川親俊記云天文八年二月廿七日丙寅貴殿五間御厩被

建之爲上意大工十人被仰付之京中町人被入被入被參

之

○七間厩

鎌倉年中行事云七間御厩ハ公方様之御厩ニ限也管領其外

ハ五間也

又云七間御厩ハ小山其外ハ臨時之御厩上古ハ五間近代ハ

三間はハ皆以公料大工ニ被仰付被遣之

在盛卿記云長祿二年十二月二日今日參上御所前七間御厩

注進之上御所諸門柱立日次明年正月十八日壬寅時卯辰

○十三間厩

二判問答云禁中ニハ被置左右馬寮被繋御馬候是ヲ

號寮ノ御馬候以此准據諸家ニ於面向不立厩候武

士ハ依爲守護以弓馬爲業然間於面向必立厩是

公武之差別也二間三間者諸人通法也五間七間已上者依

分國之多少有其實仍細川家者爲十三ヶ國之拜領依

之十二間之厩規模之由承候

○十五間厩

吾妻鏡云文治五年十二月九日甲午此間被建御厩十五

奥州駒中被撰上馬三十疋始被立置之

平家物語云物怪又入道相國の一の厩に立て朝夕隙なく撫

伺はれける馬の尾に鼠一夜の中巢をくひ子を産たりけ

武家名目抄稿第九十册

塙檢校保己一編

居處部十五

○床疊

酌並記云主貴人之有所へ盃を持て可出様之事角の打敷かへきにすはりたりとも持て出先座敷へはいりさいのきわにてつくはいて亭主の氣色を見つくりい扱持て可出客人と亭主同位ならば兩方の間に可置又所時によりて上座の床た、みに置事も有へし時によりみはからひてをくへし

○紫條ノ疊

○小紋ノ疊

長門本平家物語云本三位中將 東舍東のまへに五間四面のいたやありかも原平三さきたちて中將を入らる板屋のうちにし座には小もんのた、み三てうしきて東座にはむらさきへりのた、み五てうしきたり中將にし座のた、みにひんかしむきにいらるかけ時はきたより第二けんのゑんにあたり

今川大雙紙云別當乘てにむかいて一の馬屋の馬にて候と申候は、御前の手綱を乗へし御前の手綱の様はうつらまはらの手綱の事也一の厩とは二間もあれ三間もあれ其馬屋のつと入口の厩の事なり努々人にかたる事あるへからす一厩と云秘事也  
甲陽軍鑑云厩ノ事五間厩七間厩の時中ヲ一ノ厩ト云然間中ヲ見テ奥ヲ見テ其儘奥ノ次ヨリ次第々々ニ見ル也又四間六間八間十間歟ノ時は奥かあかり也それよりつきくを見る也半の時中より重の時は奥より見るなり口傳に有之なり  
○應部屋  
大友興廢記云宗麟公 狩殿御狩のため惟教馳走にて佐伯宮の内といふところにかり屋をたてらる、そのけんつもり一御廣間十五間六間一遠侍九間一御寢所五間一御臺所十二間六間一御應部屋廿間一御馬屋廿間一御長屋六十間右かり屋といひなからけつかうにあひと、のへらる、  
○熊鷹部屋  
水野勝成記云二ノ丸の門のきはにくま鷹のへや御座候

○簾

源平盛衰記云限定關東 下向條紫條ノ疊ヲ敷キ康定ヲ居フ良久シテ兵衛佐ノ命ニ隨テ罷向フ簾ヲ揚テ寢殿ニ高麗條ノ疊一帖敷テ兵衛佐御坐タリ

吾妻鏡云文治四年七月十日甲辰若公爲壽公 七歳始令著御甲之給於南面有其儀時尅二品出御江間殿參進上御簾給

又云建永元年六月廿一日辛未於御所南庭一覽相撲相州大官令等被候上南御簾云々

又云嘉祿元年十二月廿日丙午今日若君有御移徙之儀云云自南門令入御給於南庭中央令下御給經御車寄戸并二棟廊入御寢殿階間武州寮御簾被奉入畢

吾妻鏡脱漏云嘉禎二年正月一日己未完飯相州御 沙汰今日不被上御簾依御歡樂無出御之故也云々

太平記云鹽治判官 謹死條師直目モナク打笑テ暫シト袖ヲヒカエテ其宮ハイックニ御座候ソ御年ハ何程ニ成セ給フソト問ケルニ侍從立留テ近頃ハ田舎人ノ妻ト成セ給ヌレハ御貌モ雲ノ上ノ昔ニハ替リ給御年モ盛リ過サセ給ヌラント思ヤリ進テ有シニ一日物詣ノ歸サニ參テ奉見シカ古ノ春侍

遠ニ有シ若木ノ花ヨリモ猶色深ク匂有テ在明ノ月ノ隈ナク指入タルニ南向ノ御簾ヲ高クカケサ、セテ琵琶ヲカキナラシ給へハハラ、トコホレカ、リタル髪ノハツレヨリホノカニ見ヘタル眉ノ匂芙蓉ノ眸丹花ノ唇何ナル笙ノ岩屋ノ聖ナリトモ心迷ハテアラシト目モアヤニ覺ヘテコソ候シカウラメシノ結ノ神ノ御計ニヤイカナル女院御息所トモ奉見カサラスハ今程天下ノ權ヲ取ルサル人ノ妻トモナシ奉ラテ聲ハ塔ノ鳩ノ鳴様ニテ御副臥モサコソコハ、シク鄙闌タルラント覺ユル出雲ノ鹽治判官ニ先帝ヨリ下サレテ賤キ田舎ノ御栖ニノミ御身ヲ捨ハテサセ給ヌレハ只王昭君カ胡國ノ夷ニ嫁シケルモカクコソト覺テ奉見モ悲クコソ侍リツレトソ語ケル

武雜記云御簾の重には銅銀などにて生類を作て可置之候たとへは龜鶴の類也當時石をつ、みて置候事略儀候

○掛簾

室町殿年中行事云上様ニテ御禮之事正月朔日五日七日計ナリ(中略)於華御所御相伴衆國持衆外様御供衆申次ニテハ御末ノ東ノ脇戸ヨリ參上番頭以下ハ中ノ御末ヨリ懸蕙ノ内へ伺公裏辻ノ外ニテ御盃拜戴御酌ハウラ辻ヨリ右ノ脇ニ出カ、リテ役之公家衆并番頭等御所様御盃雖頂



戴無之上様御盃ハ拜戴之ニ云々上ノ御末中ノ御末ハ三  
 間梁ニ九間ニテ間ハ遺戸高國ナリ真中ニ柱アリ其際ノ戸  
 兩方へ一本充開此口ニ掛蓮アリ但ニ枝ノ蓮四ニキリ  
 縁チトイメ合云々朝夕御膳  
 獻スルニモコノ際ニテ中臈ノ御陪膳衆ニ渡ス此時裏掛  
 蓮ニ總テ上ノ御末へハ日野殿ニ條殿自然伊勢守亦御供衆  
 ノ内ニモ參上ノ仁少々有之自餘ハ不伺公ニ云々  
 伊勢守貞忠亭御成記云條々可有用意一事一御小便所か  
 け蓮あり一妻戸かけ蓮あり

○天井

倭名類聚抄云天井風俗通云殿舍作天井俗云  
殿堂菱藻水中之  
 物以壓火災也

大友與廢記云宗麟上  
宗麟に御對面被成候則御振舞御座  
 敷九間三口をひとつに取放し關白様ノ九間ノ主殿に角懸  
 て御座候(中略)御酒ニ返くはしその後金ノ御座敷御見せ  
 被成候天井壁その外みな金あかり障子ノ骨までも黄金  
 赤きしやにて張る見事結構不及申候

○天井煙出

太平記云天文本丸長  
丸鬼切條二丈計ナル牛鬼ニ成テ酌ニ立タリケル  
 網ヲ左ノ手ニ提テ天井ノ煙出ヨリ上ケルヲ頼光件ノ太刀  
 ヲ拔テ牛鬼ノ頭ヲ切テ落ス其頭頼光ニ掛リケルヲ太刀ヲ

きしやにて張る見事結構不及申候

○腰障子

文明十一年記云正月十七日御的始有之(中略)射手御太  
 刀拜領は御對面所へ入御成て東の御こし障子をあけられ  
 候てひろるんにて拜領也

○妻戸

吾妻鏡云正治二年八月廿一日甲辰宮城四郎爲御使節  
 下向奥州(中略)午冠宮城首途出甘繩宅參御所相  
 具家子三人郎等十餘人候侍西南角頃之廣元朝臣出廊  
 根妻戸招御使召仰事之由其後退出之刻給御馬被  
 又云貞應元年正月一日庚戌奥州任例被獻坑飯若君  
 出御南面妻戸間讚岐中將參進被卷上御簾人々奉  
 調

又云寛元二年四月廿一日辛卯今日將軍家若君六歳御名字頼  
 親能御殿  
 大宮局御元服也依被用嘉祿之例前佐渡守基綱奉三行  
 之(中略)次獻御引出物御劔前丹後守泰氏白襖袴衣澤色生  
 雙袴著下袴  
 經西侍實子並廊入妻戸置御座傍左

義貞記云奉公用意事御與御車寄ノ事大旨老キ侍若者ノ役  
 ニアラス中臈之態ナルヘシ更ニ推參ノ儀ニアラス御妻戸  
 開レハ大庭ニ畏ヘシ相手ニ色代センニ我論シマケテ先ニ

逆手ニ取直シテ合セラレケレハ此頭太刀ノ鉾崎ヲ五寸食  
 切テ口ニ合ミ乍頭ハ途地ニ落テ已ニ目ヲソ塞キケル其貌  
 ハ猶破風ヨリ蜚出テ嘖ノ天ニ昇リケリ

○障子

吾妻鏡云建久六年正月一日丁亥上總前司義兼獻坑飯相  
 模守惟義持參御劔又御弓箭以下進物事終將軍家更出  
 御于西障子之上盃酒及數巡私催群遊云々

又云正嘉元年二月廿六日壬午今日午二點相州禪室若公御  
 名

於三棟御所被加首服奥州并御家人各布衣  
 下括著西侍  
 太平記云京勢重南  
 方要向條中務少輔ハ餘ニ腹ヲ立テ貫ハキナカラ召  
 合セノ内へ走入テ屏風障子ヲ踏破リ日本一ノ云甲斐ナシ  
 ヲ憑ケルコソ口惜ケレ云々

慈照院殿年中行事云十月朔日諸御禮如每朔從今朝

閉御對面所ノ御障子御同朋役之

○アカリ障子

大友與廢記云宗麟上  
 宗麟に御對面被成候則御振舞御座敷  
 九間三口をひとつに取放し關白様ノ九間ノ主殿に角懸て  
 御座候(中略)御酒ニ返くはしその後金ノ御座敷御見せ被  
 成候天井壁その外みな金あかり障子ノ骨までも黄金赤

立時ハ何度モ下手ヘ可參也

宗五大雙紙云妻戸の出入之事何とも沙汰承り候はす候但  
 常には出入なく候か正月其外きとしたるときはかならず  
 妻戸の間より出い候左やうのときは立すなを兩方に置  
 候沓ぬきより間半計さきなりあまたれのか、らぬ程なる  
 へし妻戸兩の柱のとをりなるへし大さは其家の位により  
 大小あり的の時の數つかより大に候河原者委可知

又云與寄の妻戸のうはかさね下かさねこしのよる時さた  
 候はす候た、武家にはこしの左をあかりと心得候公方様  
 御劔の役人も御妻戸の左に祇候也また私さまにては與そ  
 への役人兩人あり妻戸のうはさ打たる方與の左あかり右  
 はしたて女房衆はめして後こしをそと御た、き候其時え  
 んより兩人かきおろし候へはこしかき請取候公方様には  
 御こしかきにあつかひ申候

今川大雙紙云妻戸のちやう木のある方を上手と云也  
 出陣聞書云馬を引立て乘事中門の妻戸の前にて乗へきな  
 り馬の頭南頭にひき立るなり但し家の作りに依へしその  
 主能心得て乗へきなり總して軍陣へいつるときは中門の  
 妻戸より出るなり

又云包丁越る事中門へ出妻戸の内のさんのきわに先を左

へなしはをむけて置て越るなり歸る時は刃を外へむけて  
越るなり

武雜記云妻戸の間出入事御沙汰は不承候但常に出入は  
有間敷候急度したる時は妻戸の間より御出入候間さやう  
の時御立砂をと立て平人出入斟酌可然候

○東妻戸

普廣院殿御元服記云正長二年三月九日乙卯天晴風靜御元  
服(中略)次御出震殿任應安御吉東御妻戸ヨリ御縁ニ御  
出階隱間ヨリ入於御座ニ御座八幡御拜云々

○キリ戸

ゑほし折云ちやうはんこれをみてさていかにやけしたと  
の小六承てえものはいくらも候八十四のかはこをきり戸  
のわきにつむたるは只たからの山のことし四十二疋のさ  
うた三疋ののり馬いづれもみなよきむまにて候

又云さるあひた吉次世にありかほなる風情にてしゆんの  
さかつきくたし客のさかつきとはせければ其後はさかも  
りになるあらいたはしやうしわかとの人は人めをつ、ませ  
給ふあひたきり戸のわきにすこくとた、一人た、すみ  
給ふ

○ワキ戸

縁ノ上ニ平レ伏テ何ニ引立レトモ起上ラヌ

○タカモカリ

ゑほし折云下ちよ承てけるみやこよりくたらせ給ふ人の  
これにてゑほしを御たつねさふらふかさりなからゑほし  
の御所望にて候は、あのむかひに見えたるたかもかりの  
うちこそ五郎太夫と申てゑほしの上手にてさふらへ云  
云

○アシ、ロ

大友興廢記云島津義久公の家老新納武藏守かはからひに  
て稻富新すけ出陣し花山において甲斐相模守と合戦せし  
かともし、こうかして利をうしなひその遺恨を胸臆にこ  
めてむさしのかみに内談して此度高森か城をおとし先の  
會稽をきよめんかために人數をかりもよをし武藏守か人  
數を少々くみしてその勢三千餘をもつて天正十二年甲申  
の十二月十三日に伊豫守か城によせきたる山の手陣を  
とり(中略)屏うらまてをし付屏をのりこさんとす城内よ  
りやりをそろへ屏きはに出相のほれば突おとせとも死人  
をあししろにして面もふらすのりこさんとす

○舞臺

季瓊日録云寛正六年九月廿九日南都一乘院御所南面左邊

常徳院殿御乘馬始記云松の庭にてめすなり若君様御ちや  
うけんを召て南の竹すのこのとをりの御わき戸より御出  
有て西の御ゑんのうへに御立あり

○節

倭名類聚抄云節周禮云節音部字亦作節 覆暖障光者也

ゑほし折云熊坂の太郎はとうつきををつとつてとうくと  
あてたみなもと聞召あは夜たうよと思召わさとおもての  
しとみを二三間取てえんより下へなけおろしよするぬす  
人をいまやをそしとまち給ふ

○半節

太平記云國治判官侍從カクト師直ニ申セハ頓テ侍從ヲシル  
ヘニテ鹽冶カ館ヘ忍ヒ入ヌ二間ナル所ニ身ヲ側メテ垣ノ  
隙ヨリ闖ハハ只今此女房湯ヨリ上ケルト覺テ紅梅ノ色コ  
トナルニ氷ノ如ナル練貫ノ小袖ノシホトアルヲカイ  
取テヌレ髪ノ行エナカクカ、リタルヲ袖ノ下ニタキヌサ  
メル處タキノ煙句計ニ殘テ其人ハ何クニカ有ルラント必  
タトシク成ヌレハ巫女廟ノ花ハ夢ノ中ニ殘リ昭君村  
ノ柳ハ雨ノ外ニ疎ナル心チシテ師直物怪ノ付タル様ニワ  
ナトト振ヒ居タリサノミ程ヘハ主ノ歸ル事モコソトア  
ヤナクテ侍從師直カ袖ヲ引テ半節ノ外マテ出タレハ師直

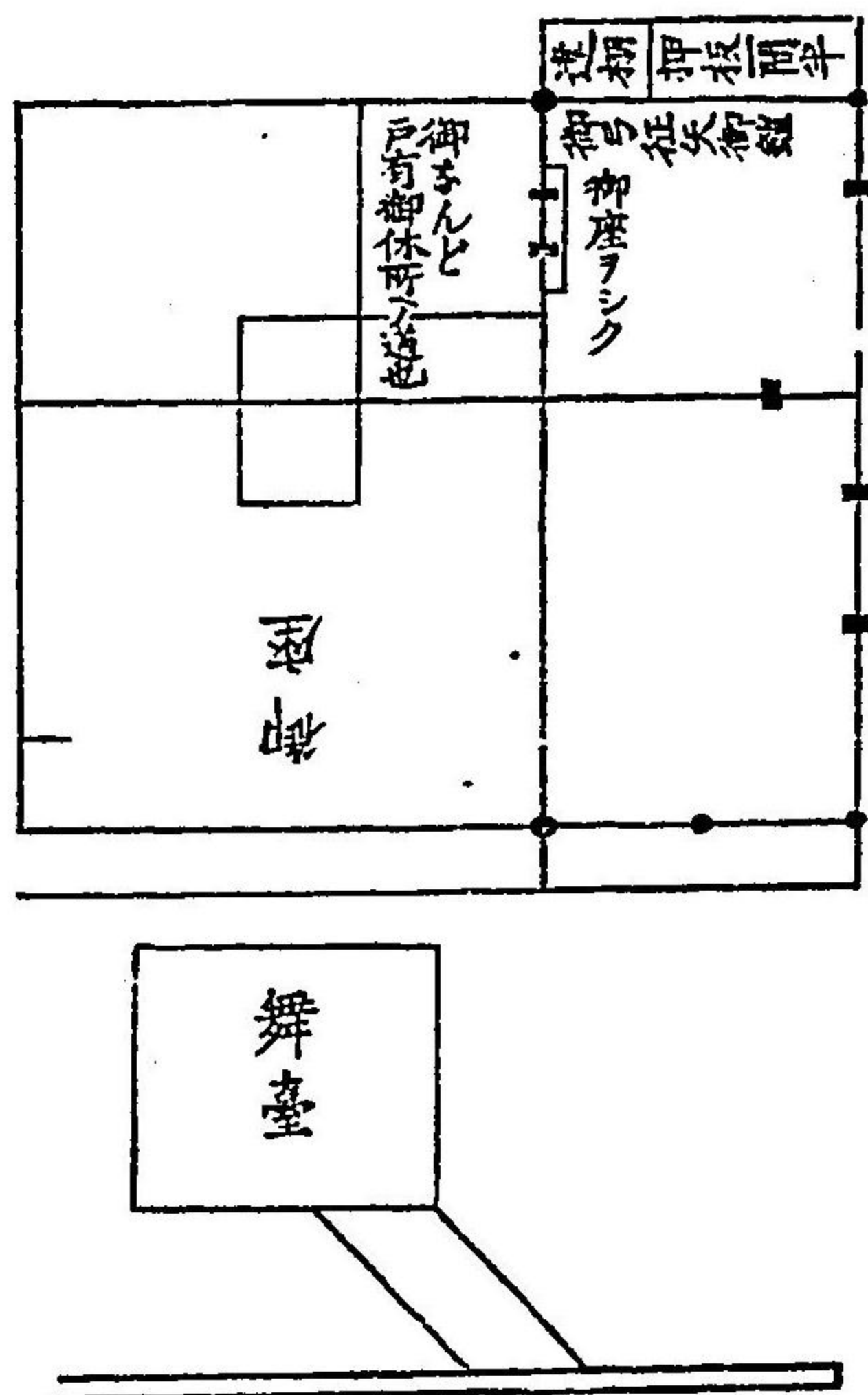
堂上公卿列坐庭上布衣奔衆觀世一座右邊堂上西邊兩門跡

一乘院大乗院巽頭列座庭上隨身公方小者火炬在三四角一舞  
臺中間小橋在<sub>レ</sub>西東樂屋黒木七間以<sub>レ</sub>松葉<sub>二</sub>而<sub>レ</sub>青<sub>一</sub>之前南門  
管領島山尾張守殿護<sub>レ</sub>之北門武衛次部大輔殿護<sub>レ</sub>之御相伴  
關白二條殿三寶院南都傳奏日野殿被<sub>レ</sub>參也

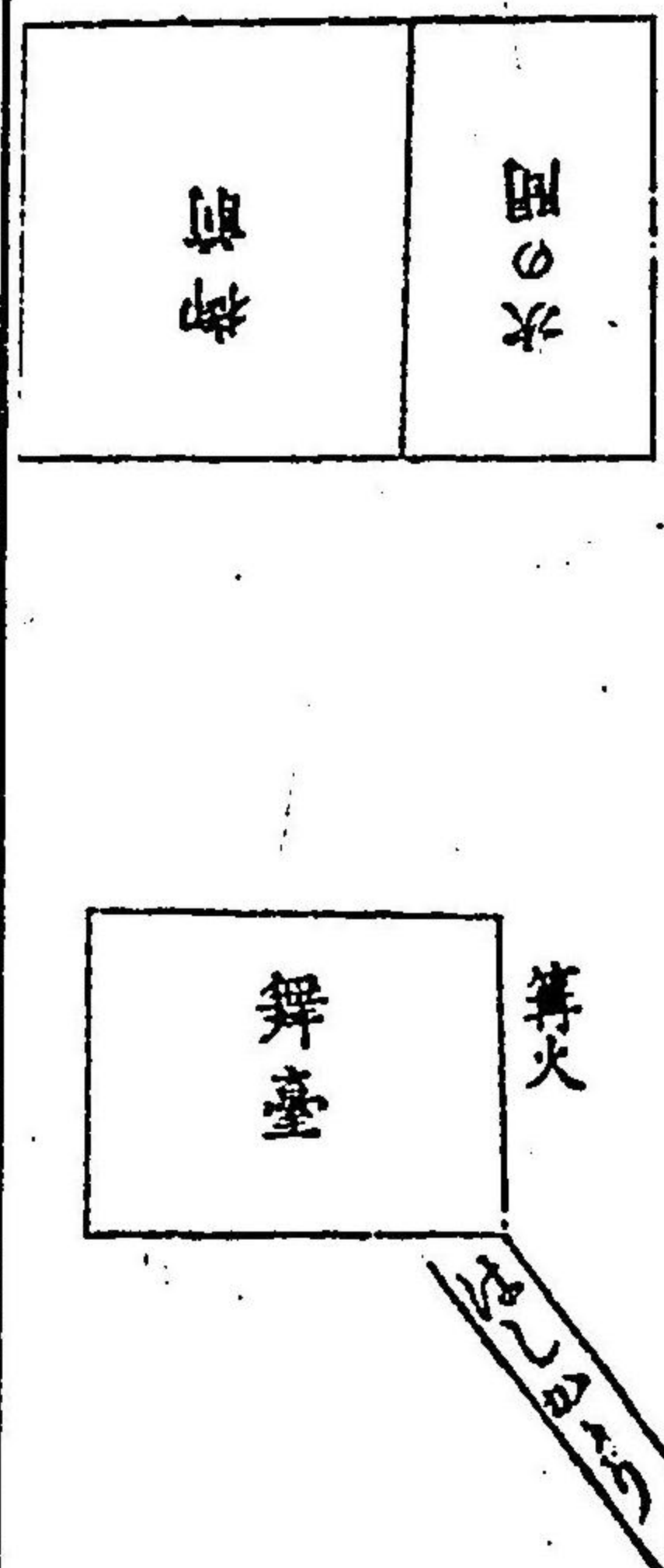
齋藤親基記云寛正七年二月廿五日飯尾肥前守之種亭御成  
御成已後兩御臺様同御成日野殿光聚院等御相伴申樂十四  
番親世能過於舞臺一歌之時百貫文積舞臺一  
了十貫文宛結中御供衆運之置舞臺能之時舞臺四角立三蠟  
燭了

三好義長亭御成記云やかて面へ御成さて五獻目進物參る  
御看參て御能始申儀如<sub>レ</sub>常貞孝舞臺を通樂屋へ入罷出よ  
と被<sub>レ</sub>申則はしまり申候也此時御簾あかり申紙につ、み  
たるおもしろしを御供衆御取あり御簾あけ被<sub>レ</sub>申引合をた、  
みてかねてより置て御妻戸と六間北一間は御簾あけ不<sub>レ</sub>  
申也庭上ニハ日吉太夫嵐太夫元阿彌冬阿彌甫阿彌御能以  
前ニハ御前へ向申御能始テ舞臺へ向申候也

大内問答云御能はいかやうの身體罷出はしめさせ可<sub>レ</sub>申  
候哉同舞臺以下様體之事於<sub>レ</sub>殿中<sub>二</sub>は此方勤役仕候様體の  
事無<sub>レ</sub>異儀<sub>一</sub>候時分見合そと伺申御次の間の縁より罷おり  
庭上にて卒度御前のかたをみて手をつき舞臺の柱のきは



より罷あかりはしか、りを通りて屋の内へ入事も有之  
又まくのきはにて申さかする事も有之之扱罷歸りさまに  
ははしか、りの柱の邊にて手をつき舞臺より庭上へおり  
前庭上にて手をつきたる所邊にて如前御禮を申手をつ  
さて御縁へあかり申候



又云舞臺のはしか、りにはやねをは不仕候哉の事やね  
の事常には不仕候又やねをふきたる事も候よし申候文  
安の頃島山左衛門督入道持國へ御成の時俄二番目の御能  
より大夕立にて御座敷にて二三番させられ公私御無興の  
よし申傳へ候し又永享の頃左兵衛佐義淳へ御成の時は兼  
てはしか、りにやねはなく候用意して被置しに御能半  
に大雨ふり候ひしに則やねを組仕候て御能無相違あり  
し由常に瑞笑物語仕候つる

蟻川記云らうそくの出様の事同しんの取様の事無別儀  
候先御前のより出し申候其後御縁舞臺たるへし御座敷の  
は右の手にて取持候御縁のも同前又舞臺のは有明の臺に  
て候間片手に不合期し候間もろ手にて可持候云々

甲陽軍鑑云能之次第舞臺の圍口傳舞臺の高さは御座敷に  
よるへし口傳舞臺のうしろにいかやうの人有とも不苦  
去ながら弓鎗など長道具をは置へからす是は正面要心の  
ためなり地うたひのうしろには屏風を立へし又夜に入は  
鐵籠をあかす橋か、りにて同前舞臺の上をふく事あらは  
むねよりふく日おほひと申か本なり上の水引のあまるを  
は柱にまくへし橋か、りの長さ三間廣さ一間但所により松  
を立事しまひ柱の松枝五幕きはの松枝九らんかんの竹末

と々々をゆひちりゆるや脇のうしろの柱に愛宕の札をを  
す勸進能の時は脇座の柱きはに蠟燭あり(中略)正面の橋  
よりは太夫一人通者也又太夫に被下時太刀を此橋より  
持てあかるなり仕舞柱より出入をすへし舞臺の高さ御座  
と對様舞臺の高さ勸進能はすこしかはる御座敷と舞臺と  
の間六間中其間には道具禁制但如此はあれとも唯三  
間かよき也

は佳例にて傳藏と云町の本座の太夫あて三番過候て能は  
七番宛あり諸侍は望次第罷出て見物いたしけり芝居には  
下々の者町人共入て見物仕り申候

○樂屋  
吾妻鏡云正嘉二年六月四日壬午今日勝長壽院供養也巳冠  
將軍家渡御(中略)入御之後後陣隨兵候同變北殿上人等  
候樂屋前云々

○幕屋  
聚樂第行幸記云庭上に舞臺左右の樂屋をたてらる

嘉良喜隨筆云能ノ舞臺ノハシカ、リカクヤノ幕キハヨリ  
一間ニテハ一寸ツ、サカリテユクナリサナケレハカクヤ  
ヨリ出ル太夫モ舞臺ノカタヨリモミニクキナリ

駿府記云慶長廿年乙卯七月廿二日御能鳥目二萬匹積舞  
臺唐織袷衣帷子觀世金春拜領之其外猿樂七十餘人各  
有纏頭一本多縫殿助康俊出舞臺與之

東武實錄云元和三年五月十三日公松平筑前守利常カ家ニ  
波御アリ(中略)猿樂七番上覽アリ三番過テ小袖猿樂太  
夫ニ與フ其餘ノ役者等ニ小袖ヲ與ヘ舞臺ニ鳥目五百貫是  
ヲ積ミ與ル

○棧敷殿  
吾妻鏡云建長二年五月十日乙亥於旅御所有鞠會一人御  
數如去二月其後於御馬場棧敷殿覽笠懸事終日其日  
可有遊御

○棧敷  
吾妻鏡云元暦元年八月八日甲子參河守範頼爲平家追討  
使赴西海午尅進發(中略)武衛構御棧敷於稻瀬河邊

○定舞臺

續撰清正記云清正出られ著座有と廣間の前に定舞臺有け  
る故則大文字屋と云狂言師面箱持出せんさいふりを舞翁

令見物之給云々

又云建仁二年八月十六日丁亥將軍家無御參宮於馬場  
棧敷覽流鑄馬許也

又云承元二年八月十六日癸未將軍家入御馬場棧敷於  
其所有御遙拜之儀美作藏人朝親橋判官代隆邦等爲御  
使奉幣參宮寺

又云建保五年七月十六日辛酉御出同昨日尼御臺所并御  
臺所爲御見物令出馬場棧敷給

又云正嘉二年八月十六日壬辰將軍家御參鶴岡宮寺馬場  
流鑄馬以下儀如例事終還御相州禪室自御棧敷令還  
給

又云弘長元年八月十四日甲辰放生會條々重有御沙汰  
(中略)次供奉人等於宮中可著座次第被定之兩方御  
棧敷之前除御妻戸之外布衣衆可候其下除兩國司著  
座之前東者可爲先陣隨兵座西者可爲後陣隨兵座  
云々

又云文永二年八月十六日辛巳將軍家爲覽馬場儀密々  
入御于相州御棧敷(中略)今年相州御棧敷七箇間之外人  
人棧敷皆以停之將軍家無御出儀之上依儉約也  
ますか、み云いわし水のなかれをわけてせきのひんかし

本役人計祇候候云々

齋藤親基記云寬正六年八月十五日神事御參向之時御臺其  
外御比丘尼御所々々於御棧敷御見物

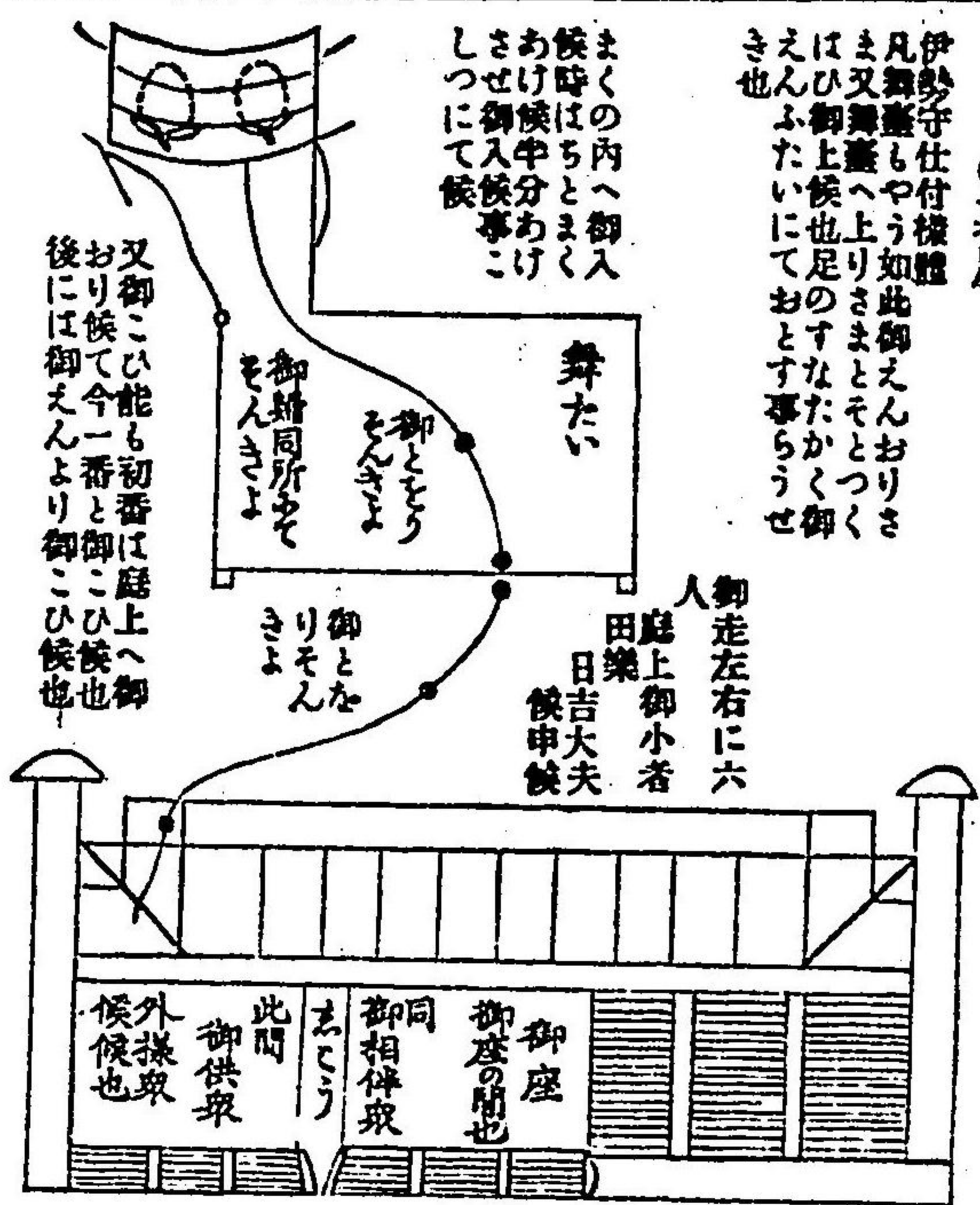
尺素往來云於六條河原可有御手組之犬追物御所於  
御棧敷有御見物可爲最晴候

蟠川親元記云文明十年四月廿二日甲寅勸進猿樂觀町室町  
殿御棧敷二間

○幕屋

伊勢守仕付様  
凡御臺もやう如此御えんおりさ  
ま又御臺へ上りさまとそとつく  
はひ御上候也足のすなたかく御  
えんふたいにておとす事らうせ  
き也

まくの内へ御入  
候時ちとま  
あけ候中分あ  
させ御入候事  
しつにて候



又御こひ能も初番は庭上へ御  
おり候て今一番と御こひ候也  
後には御えんより御こひ候也

にもわか宮ときこゆるやしろおはしますに八月十五日都  
のほうしやうるまねひておこなう其ありさままことにめ  
てたし法會の有さまも本社にかはらす舞樂てんかくし、  
かしらやふさめなとさまく所々にしつけたる事ともお  
もしろし十六日にもなをかやうの事なりさしきともいか  
めしくつくりならへて色々のまんまくなとひきつ、けて  
將軍の御さしきのまへにさかみの守をはしめそこのふ  
しともなみわたる

建内記云永享十一年六月十四日庚寅祇園御靈會也馬長近  
代不<sub>レ</sub>及沙汰一歎山笠拍子物等如例鼓吟達開室町殿御  
移徙上御第之後及多年無今日之御見物細川宿所引  
渡上在所仍御棧敷壞却之故歎於京極宿所者如初在  
下仍御棧敷如元無其煩當年七月御見物也近年無御見物歎  
鎌倉年中行事云六月十四日祇園會ノ船トモ參種々舞物有  
之御築地ノ上ニ被打御棧敷公方様同御簾中様御見物  
アル也

宗五大雙紙云慈照院殿御代寬正五年四月た、す河原にて  
勸進猿樂させられ候觀世太夫又三郎三十六勸進聖法印善成  
九十八號御棧敷之様別紙に注す初日五日御棧敷之一獻細川  
青松院于時管領遠御にはすくに彼亭へ御成觀世太夫以下  
右京兆時管領遠御にはすくに彼亭へ御成觀世太夫以下

武家名目抄稿第九十一册

塙檢校保己一編

居處部 十六

○政所

吾妻鏡云文治元年九月五日乙酉小山太郎有高押二妨威光寺領一之由寺僧捧二解狀仍令停一止其妨二任例可一經二寺用一若有二由緒者令一參二上政所可一言二上子細之旨被一仰下

又云建久四年十月廿一日甲寅諸御領乃實結解勘定事奉行人等於二私宅一遂二其節之由有一風聞二之間甚不一可二然至今日以後一者於二政所可一致二沙汰之旨被一仰云々

又云正治二年五月十二日丙寅羽林令二禁斷念佛名僧等給是令一應二恩喚云々然間比企彌四郎奉二仰相具之行一向政所橋邊二剝取袈裟燒之見者如一堵莫二不一彈指

又云建保元年五月二日壬寅凶徒到二橫大路一御所前二御家人等支之合戰及一數反也

西南政所前二御家人等支之合戰及一數反也

貞永式目追加云伊勢國道前三郡政所者雖二經七十年依一申狀子細二蒙御成敗一畢

建武式目追加云諸人借物事二永享一爲二政所雜務之法一依被二定置一年記一錢主等者過二十ヶ年欲一不二返辨太以符合仁政一者說於二自今以後者雖一及二拾ヶ年任一本法二以一倍可一令二辨償之於一十ヶ年已後二者以一本錢三分二假令一錢十貫可二糺返之一但年來利平等沙汰來輩并以前弃二破文者一三貫也

證跡二者不能一左右二焉

又云所用之時令二借用之間借與者芳志隨一也爰雖二致催促不能一返辨之是非而經二年月之條云一不知二恩云一無理二旁以背一正儀二者也所詮自一被二定置一永享二八已後雖一及二催促一二度二日限一於二不能一承引二者於一政所可二訴申一若糺決之間不二致一其沙汰二者本利相當返辨外爲一過息分二相副彼様分一可二被責渡之一

繪川親元記云四月十日飯尾加州被二參申一春日殿御局より被二仰候有一慈院御地之上關所屋事已前の御支證なく候共御いろいあり付たる事にて候間可二有一御成敗候由御申により候て貴殿へたつね申可二成一御奉書に二由候可一有二如何に一哉の由御返事先規の御支證なきに付候ては御奉書如何候はん哉其上地に付候て可二有一敗成二候時於一政所侍所可二存一法比候哉新法就二被一仰出二者可一致二其覺悟候松隣夜話云洲崎ニアタツテ人多ク群集シテミユル謙信公

人ヲ召テナニコトニヤト御尋ネアリ梅津左京承テ是ハ佐渡ノ星能ニテ酒ヲヌスミ仕タル者以上四人捕ヘ政所ヨリ今日殺害申付候ト申上ル云々

按、武家の政所は吾妻鏡文治元年記に見えたるかはしめにてその前年元暦元年公文所を新造せられて中原廣元其別當となり中原親能藤原行政以下の五人寄人たりしを文治三年十月廿九日政所下文に同くかの人々連署したり建久二年に至りて政所の職員を備へられたるにも猶廣元は別當行政は令となりて案主知家事等あり其後世々の下文に別當と連署したるは皆時の執權なりけりかれ是を通はし思ふに政所は一廊の惣稱にして正廳の外公文所問注屋等ありて天下の政務をよさね行ふ所にして猶皇朝の太政官に例すへきにや

○政所廳屋

吾妻鏡云弘長元年三月十三日乙亥未尅政所之郭内失火廳屋公文所問注屋炎上御倉等者免レ災十一日十二日甲戌政所廳屋等上棟

○公文所

吾妻鏡云元暦元年八月廿一日庚辰被レ新二造公文所一今日立レ柱上レ棟太夫屬入道主計允等奉行也廿八日甲申新造公

文所被レ立レ門安藝介太夫屬入道足立右馬允筑前三郎等參集大庭平太景能經營勸二酒於此衆一

又云寬喜二年正月廿六日於二武州公文所一武藏國太田庄内荒野可二新開事其沙汰在一之云々

又云仁治元年四月九日癸卯依二鶴怪異於一前武州公文所被レ行二百怪祭一

太田康有記云建治三年二月七日晴夜半許公文所炎上云云

花營二代記云應永卅年癸卯七月卅日卯御出御所様公文所へ成翰ヲ御越有役人大館次郎持房白直也自二公文所一春日風呂江成也佳例也自二春日一有二御院參一御方御所様公文所江成有二一獻一其ヨリ春日風呂江成六月御成始也

○問注所

吾妻鏡云元暦元年十月廿日乙亥諸人訴論對決事相二具俊兼盛時等一召二決之且令一注二其詞可一申沙汰二之由被一仰太夫入道善信云々仍就二御亭東面廂一簡間二爲一其所二號問注所一打レ額云々

又云正治九年四月一日壬戌被レ建二問注所於一塚外二以一太夫屬入道善信二爲一執事二今日始有一其沙汰二是故將軍御時營中就一二所二被一召二決訴論人一之間諸人群集成二鼓騷一現二無

禮之條頗爲狼藉之基於他所可<sub>レ</sub>行此儀一歟之由内々有評議之處熊谷與久下一境相論事對決之日直實於西侍除髮髮之後永被<sub>レ</sub>停止御所中之儀以善信家爲其所今又被<sub>レ</sub>新造別郭云々

又云建長三年九月十七日戊戌出舉利錢之所領於入流者被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>御教書<sub>一</sub>之由其外相論者可<sub>レ</sub>有一向問注所之沙汰之由被<sub>レ</sub>定云々

建武式目追加云文書紛失雖訴訟事於建武三年已前分者無事書之間委細之旨趣無<sub>レ</sub>據<sub>二</sub>糺明<sub>一</sub>歟任<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>尋問當知行之實否於有證人等者須<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>賜紛失安堵御下文<sub>一</sub>至同年已來分者守<sub>レ</sub>舊規於<sub>二</sub>事書在所<sub>一</sub>恩貸方安堵可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>焉

庭訓往來云問注所者永代沽券安堵年紀放券奴婢雜人券契和與狀負累證等謀<sub>レ</sub>實糺<sub>二</sub>明之<sub>一</sub>管領寄人右筆奉行入等評判也奉行人得<sub>二</sub>差符方與奪<sub>一</sub>當參仁者成<sub>二</sub>書下<sub>一</sub>下國之時者下<sub>二</sub>奉書<sub>一</sub>而無音時者被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>使者召文<sub>一</sub>調<sub>二</sub>訴陳狀<sub>一</sub>相對當所執事年々管領奉行入等致<sub>二</sub>問答<sub>一</sub>披<sub>二</sub>露沙汰<sub>一</sub>就<sub>二</sub>探題<sub>一</sub>之異見所<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>下知<sub>一</sub>也

按、問注とは訴訟人を訊問して申詞を注記するの謂なりはしめ御所中にありしを善信の家に移されて正治元

定衆等參進宮根山別當與實與<sub>二</sub>智藏<sub>一</sub>三郎法橋良實<sub>二</sub>遂<sub>一</sub>對決云々

又云仁治二年三月十六日甲辰今日有<sub>二</sub>評定<sub>一</sub>事終前武州持<sub>二</sub>參事書<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>披<sub>二</sub>覽御前<sub>一</sub>之後人々退散前武州猶還<sub>二</sub>著評定所<sub>一</sub>覽<sub>二</sub>庭上落花<sub>一</sub>有<sub>二</sub>一首御獨吟<sub>一</sub>事シケキ世ノナラヒコソ懶ケ<sub>レ</sub>花ノ散ナン春モシラレス

又云寶治元年十一月十四日癸亥相州新造花亭有<sub>二</sub>移徙之儀<sub>一</sub>評定所并訴訟人等著座屋東小侍等今度始所<sub>二</sub>造加<sub>一</sub>也又云建長三年十月廿九日乙酉與州相州并評定衆等於<sub>二</sub>幕府別參御所<sub>一</sub>良<sub>二</sub>唯評定所<sub>一</sub>之屋可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>建之由有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>

又云四年五月十七日庚子與州相州并前典厩尾州以下參<sub>二</sub>會評定所<sub>一</sub>將軍御方違事被<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>評議<sub>一</sub>以<sub>二</sub>與州<sub>一</sub>亭可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>御本所<sub>一</sub>云々

又云正嘉二年五月二日辛亥於<sub>二</sub>評定所<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>陰陽道之輩<sub>一</sub>勝長壽院供養日可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御出<sub>一</sub>如<sub>二</sub>去年大慈寺供養之時<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御方違<sub>一</sub>否被<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>仰之<sub>一</sub>云々

太田康有記云建治三年七月廿七日晴評定延引信判入相共出<sub>二</sub>御所評定所<sub>一</sub>問答云々  
鎌倉年中行事云正月八日管領出仕南小門ヨリ御遠侍ヲ透御評定所ノ御縁侍ヲ透并ノ御妻戸ヨリ七間ヘ參テ出御ヲ

年別郭に新造せらる其所は今考るによしなし弘長元年政所の郭内失火して公文問注屋炎上せしことありされは正治の別郭といひしは政所をさすにやとおもはるれと猶しからす建長二年九月十日訴訟御成敗專守<sub>二</sub>式條<sub>一</sub>不可<sub>レ</sub>參差<sub>二</sub>之由被<sub>レ</sub>觸仰<sub>一</sub>引付并問注所政所とも見えたればかの問注屋政所の郭内にありてこの問注所とはおのつから別なること見つへし

○問注屋  
吾妻鏡云弘長元年三月十三日乙亥末尅政所之郭内失火廳屋公文所問注屋炎上御倉等免<sub>レ</sub>災

○關所屋  
蛭川親元記云文明十七年八月七日乙酉政所方關所屋<sub>路島</sub>丸事御大工右衛門尉被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>之公人三郎右衛門渡<sub>一</sub>付之

○評定所  
吾妻鏡云嘉禎二年八月五日己丑匠作武州被<sub>レ</sub>參於<sub>二</sub>新造評定所<sub>一</sub>有<sub>二</sub>評議始<sub>一</sub>

又云同年十一月十四日丁卯匠作武州著<sub>二</sub>評定所<sub>一</sub>給其衆參<sub>二</sub>南都<sub>一</sub>事有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>衆徒靜謐之間止<sub>二</sub>大和國守護地頭職<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>元可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>寺家<sub>一</sub>云々  
又云延應元年三月廿九日己亥匠作前武州著<sub>二</sub>評定所<sub>一</sub>給評

待申サル云々同十一日御評定始云々御評定所ハ十五間中ハ油磨紫縁之御疊廻敷ニテ衆中ノマヘコトニ半疊アリ御坐ハ常ノ御坐ヲ紫縁ノ御タ、ミノ上ニ重テシカル、也面ハ皆御隔子ノマニテ障子ヲ立ラル、公方様御出ノ口ハ御ヤリ戸御荷用ノミチモ御遣戸ニテ北ハ大ヘラ也同十七日御的アリ公方様御二間六間七間之御坐トリハラハセテ御覽セラル、管領御評定所ヨリ見被<sub>レ</sub>申諸奉公中ハ御中門ノ御縁ニ有<sub>二</sub>伺候<sub>一</sub>也

太平記云<sub>天正本直義</sub>直義ハ大高完戸組手ニ定ラル其外曾我島津粟飯原彌津以下究竟兵共二三十人ニ具足セサセテ障子ノ内評定所ノ奥ニ隱置打漏サハ寄合スル様ニ堅ク用意シテ三條殿ヨリ仰談セラルヘキ事アリトテ師直ヲ召ル

關八州古戦録云<sub>奥羽兩國</sub>秀吉公會津黒川ノ城ヘ打入玉ヒ瑞雲山興徳寺ヲ評定所トシテ奥羽兩國ノ成敗ヲ沙汰セラ

元寛日記云寛永十三年丙子正月十一日評定所事始以前ハ傳奏屋敷ニ於テ評定アリ然ラ其屋敷ヲ分和田倉龍ノ口向御堀端開<sub>レ</sub>門於<sub>二</sub>此所<sub>一</sub>始テ公事ノ沙汰アリ

○引付  
吾妻鏡云建長二年四月二日丁酉諸人訴訟事於<sub>二</sub>引付<sub>一</sub>勘

決文書理非之間加丁見之處旨趣為分明者任先規不能對決又引付事已越以前可始行之云云頭人云云奉行莫及遲參且可進覽時付著到之由被觸仰三方引付云々

又云同年九月十日癸酉諸人訴論御成敗事專守式條不可參差之由今日被觸仰引付并問注所政所云々

又云正嘉二年五月十日己未鎌倉中并國々雜人沙汰事被定法是可仰付主人并在所地頭事也其事書樣一鎌倉中并國々雜人沙汰事奉行人奉書三箇度不叙用者可被成御教書又被狀難及三箇度不事行者於引付尋明子細事實者可注申所領之由可被成御教書次難治事同於引付可有其沙汰矣

又云文永三年三月六日己亥諸人訴論事被止引付沙汰問注所召懸訴陳狀可勸申是非也

關東評定傳云建長元年十二月始引付諸人訴訟不事行故也

又云文永三年三月六日止三方引付重事直聽斷細事被付問注所

又云六年四月廿七日正問注所沙汰被始五方引付庭訓往來云讓狀謀實越境相論未分甲乙之次第譜代相傳

形少兩日相煩兩日滯留石部少出陣之申分候而爰元雜說申候猶追々可申入候恐々謹言七月十二日永井右近太夫殿増田右衛門尉長盛此狀を右筆部屋にて右近披見候ていな

狀をこし被申候可懸御目と御前へ持參云々

○奉行所  
蟻川親元記云寛正六年八月四日己卯就御被官江州青木彌四郎所望愚狀莊嚴坊御被官也青木方其莊嚴坊相論事無異支證者青木申分無餘儀一存候雖然奉行へ内々問合候申處兼意同篇之由候但可召離御沙汰候哉不然者無爲落居候様莊嚴坊へ可被仰容ては可然候猶使者被申恐々今日増田隼人佐藤親元

又云天文七年十月十七日天氣御料所の事披露奉行所へ申室町殿物語云元龜手桐標あるとき天王寺の邊は至剛の狼藉もの主従二人とりこもりてなに者にても剛強のさふらひあらはよつて仕留て高名にせよといひてたてこもりける(中略)さて高橋口口口とも人にたせわか身丸こしにて裏へまはりて戸をたきければ内よりもなにもものそといふくるしからぬもの也奉行所よりもつかひにまかれり先あけたまへと心しつかにかにもをしつめていひければ云々

之重書等者於引付方可被達御沙汰頭人上衆聞閣右筆奉行人等爲終日御評定雖有窮屈更無御休息被勘判就問注所賦職重執事書與問狀奉公於訴人之時及兩度無音仰使節被下召符就違背散狀者直被下知于訴人令召進之時被封下訴狀三番問答訴陳於御前遂對決任離雄是非奉行入令取捨事書於引付窺御評定異見所令成敗也

式目新編追加云鎌倉中諸堂供料事元永寺用未下之間多致無供之勤云々寺務并雜堂共以不法也於引付札明子細早速可令尋沙汰

按、引付とは事類を引付書繼たる長案のことにてそれを預る所をも頓て引付といひけりこの所を始めて置れしは建長元年にて同四年二方を増加して五方となり弘長三年又もとのことく三方になされ文永三年悉く廢せられしを同六年ふた、ひ五方の引付を置れたりしより足利家に至りても猶先蹤を追て聯綿たり事は職名部にくわしければ爰には省きぬ

○右筆部屋  
板坂下齋慶長記云慶長五年七月十九日申之刻増田右衛門尉狀永井右近所へ來ル其狀曰一筆申入候今度於樽井大

大友與廢記云監海兵部丞兵部この墨鶴はいつれよりも些ちいさきほとに二百文にうれと云からすのねにはよきとおもひさらはまけて二百文にうれといふ代物二百をわた

し鴉をば投のけ鶴をとつてさうり取にもたせ出るていしゆこれは狼藉なり此くろき鳥をこそうりて候へとてをしとめんとする其時兵部鶴と鴉を我見しらぬことのあるへ

きか我は鶴のねをして買取たるそ是非我を狼藉者といはは奉行所へつれゆきて穿鑿を遂首をきらんにくき奴か云分なりと噴りければ云々

由良家傳記云百姓御仕置御法度御領主百姓給人所々百姓と公事御領之百姓十分勝利有之は奉行所へ公事代として百石に付永樂錢五百文差上へき事云々

聚樂物語云此禪門は都のかた邊土にて田島多く持てとめらたみなるか一とせせせうありてかれかちやくし奉行所へ參りけるよにすくれてふとりせめて大の男なるを何ものか申上たりけん故なくからめとりせせううつたへのさ

たもなくやかて其夜にきられけるとなり

當代記云慶長十八年四月十四日後藤庄三郎所へ自古田織部所金ヲ借ノ由謀書ノ持來者有庄三郎彼使ヲ相改處爲盜賊一問則奉行所へ註進ス彦坂九兵衛當時知行代官并駿河町奉行方

ヨリ彼者ノ宿へ押入欲ニ捕捕一處九兵衛若黨六七輩手負三人當座死云々

東武實錄云寛永六年己巳二月二十六日甲州身延山久遠寺ノ住僧日暹ト武州池上長築山本門寺ノ住僧日樹受不施不受不施ノ宗論アルニ依テ日暹訴書ヲ奉行所ニ捧ル云々

○守護所

吾妻鏡云文治元年九月廿三日壬申山内瀧口三郎經俊僕從自伊勢國奔參申云伊豫守稱宣旨被催近國軍兵此間爲誅經俊去十九日被圍守護所一定不遁歎云々

又云貞永元年閏九月十七日鏡社住人渡高麗企夜討盜取數多珍寶歸朝之間守護人爲尋問子細欲召取彼犯科人等之處預所稱不可交守護沙汰之由張行之旨就注申今日有沙汰預所非可抑留任交名早可召渡于守護所乘船并賊物事同可令沙汰之由被仰隱岐左衛門入道云々

又云弘長三年十月十日丁巳被行評定六波羅檢斷等事有<sub>爲使節</sub>其沙汰令召出彼祇候人佐治入道<sub>參向</sub>於當座被仰云強盜人事無地頭權門領以下所々自守護所隨相觸可被召出之不然者可被追放彼所無其儀者可補地頭之由兼可被申本所云々

増補家忠日記云慶長四年十二月三日大神君攝州ニ御放鷹有テ強木ノ城ニ入御有此所ハ川尻肥後守カ代官所ナルニ依テ川尻町尊ノ美膳ヲ獻ス

○檢斷所

室町殿物語云諸國就恐劇公方役地子役かつてす、むるにあはす催促きひしといへとも大かた質物に拂底しければ詮方なくて上下京一同に檢斷所へ訴訟を上る云々

○沙汰場

甲陽軍鑑云公事出沙汰場江後奉行人之外不可致披露況於落着之儀哉若又未出沙汰場江以前者雖爲奉行人之外不及禁之歟

○籠

太平記云<sub>阿蘇</sub>是コソ中納言ノヲハシマス籠ノ中ヨトテ見ヤレハ竹ノ一村茂リタル處ニ堀ホリ回シ屏塗テ通フ人ヲ稀也

○詰籠

太平記云<sub>北山殿</sub>公宗卿ト文衛入道トテ召捕奉テ夜中ニ京ヘソ歸ケル大納言殿公ヲハ定平朝臣ノ宿所ニ一問ナル所ヲ詰籠ノ如ニ拵テ押籠奉ル

○座敷籠

貞永式目云犯科人田島在家并妻子資財事於重科之輩者雖召渡守護所至田宅妻子雜具等者不及付渡

○地頭所

伯耆之卷云成田小三郎入道を召て勅定有りけるは奈和庄地頭村上又太郎長高か館を尋て丸是に御着有頼れ進せよと被仰下ければ畏て御前を立ぬ今時君に頼れ進せん事大に不定也千万に一つ也然は我首の被切事无疑自是何方へも失はやと思へとも隱岐を出しより命を君に奉ぬ今さら何にしてか君を後になし可奉とて心強く思切てを行にけるあれこそ地頭所よと云所に近付ける

按、守護所は大番の催促謀叛殺害夜討強盜山賊海賊等の檢斷を掌る所地頭所は地利を收め兵糧米を徴することを掌るなり鎌倉右幕下天下の柄を握り給ひて諸國平均に守護職地頭職を補任せられたりしは文治元年大江廣元か建議によられたる也其詳なることは職名部に就て見るへし

○代官所

慶長見聞記云中納言様中山道御攻上内府公ハ東海道御上リナサル、ニ相定候時木曾ハ中山道一ノ難所ニテ上方ヨリ石河代官所ユへ敵數多籠置由也

甲陽軍鑑云義信公天道遠事顯候故父信玄公の御意に深く違子歳より座布籠に入まいらせられ候

○土籠

太平記云<sub>兵部卿</sub>五月三日宮ヲ直義朝臣ノ方へ被渡ケレハ以數百騎ノ軍勢路次ヲ警固シ鎌倉へ下シ奉テ二階堂ノ谷ニ土籠ヲ塗テ置進セケル南ノ御方ト申ケル上臈女房一人ヨリ外ハ著副進スル人モナク云々



武家名目抄稿第九十二册

稿檢校保己一編

居處部十七

○庭

倭名類聚抄云庭考聲切韻云定丁反和屋前也

吾妻鏡云文永三年二月廿日甲寅尅於御所被行變異

等御祈主殿助業昌大學助晴長修理亮晴秀晴憲大藏權大

輔泰房晴平大膳權亮仲光等列坐南庭一勤七座泰山府君

祭

齋藤親基記云文正元年七月廿八日琉球人參洛當御代六號

長史於御寢殿庭前三人懸御目三拜庭鋪席

○廣庭

官地論云將政親宜強不可作罪怖來世之報去來面々

切腹宜左承候疊五六十帖擲出廣庭敷並々居既欲切腹

政親宜強不可切腹孟取添腹切刀可爲思指宣承候

打立大瓶早始酒宴

○大庭

吾妻鏡云寬元五年十二月十二日辛卯今日被定訴訟人參

被行土公祭

季理日錄云寬正四年四月十四日殿中常之御座小庭被構

泉水之由談餘被仰出也

○庭

吾妻鏡云文治二年九月九日壬子迎重陽節藤判官代邦通

獻菊花則移南縣之流被載北面之盡芬芳得境艶色

滿離每秋必可進此花之由被仰邦通

又云建仁二年十月廿九日庚子御所北御壺橋切立皆被

用松是所被充催人々也

又云承元々年三月一日丙子櫻梅等樹多被植北御壺自

永福寺所被引移也三日戊寅於北御壺有鷄闘會

又云貞應二年四月廿八日若君出御西御壺有例手鞠會

今川大雙紙云坪見物之事春は山より見下ていておは

るなり夏は中より見て山にてとまる秋は立石より見て水

分石にをはる冬は岩間より見てすなをはる

義發後覺云小坊主或夜信玄公此小坊主ヲ召レ茶ヲ御前ニ

テ引サセ給フ時ニ御坪ノ中ニ若侍ノ十人計寄合物語スル

聲シテアケクニハ口論シ後ニハ散々ニ切合音ノシケレハ

小坊師申シケルハ御坪ノ内ニテ若侍衆口論仕リ唯今打合

候所其狀云一訴訟人座籍事侍客人座孝行人召外不郎等廣

庇召外不可南廣庭但隨與沙汰之時可參雜人大庭武藏雜人等不

可參入南坪太平記云此間多治見ヲ始メトシテ一族若黨二十

餘人物具ヒシト堅メ大庭ニ跳出テ門ノ關ノ木差テ待

懸タリ

甲陽軍鑑云御館堀こみあけ普譜の時御旗本足輕衆と一條

右衛門大夫殿衆双方貳千斗の人々喧嘩ヲ仕とまのころを

あけ鐵砲をうち申候事然も大庭にての儀なり折節御屋敷

に駿河親世大夫大藏大夫直相の御能有之右の喧嘩せは

き堀ひとへ隔物冷有つれ共芝居衆奉公人は不及申地下

人までも少も喚かす罷在

○小庭

吾妻鏡云仁治二年十二月廿一日甲戌將軍家若君御前御乘

馬始也及晚於小侍小庭有此儀前武州被奉扶持之

又云寶治元年九月九日己未依仰諸人獻菊各所訓一首

和歌也悉被植幕府北面小庭云々

又云建長二年八月七日庚子幕府北小庭可被立石之由

有其沙汰云々

又云弘長元年六月十八日戊申依廣御所修理於北小庭

安土日記云天正六年十月五日五畿内江州ノ相撲取被召

寄二條御新造御坪ノ内ニテ相撲トラセ盛家清花等ハ御

見物也

義光物語云日比民部方へ無他事出入したる滿兼近習の

侍佐竹平内と云者を呼寄せ頼ければ無異儀同心仕ける

間御坪の懸金をはつし置候へと堅く申合

○石壺

吾妻鏡云壽永三年正月廿七日丁巳未尅遠江守義定蒲冠者

絶頼源九郎義經一條次郎忠頼等飛脚參着鎌倉去廿日

遂合戰誅義仲并伴黨之由申之三人使者皆依召參

北面石壺間食巨細云々

又云正治元年八月十九日己卯有諷候之族依妾女事景

盛貽怨恨之由訴申之仍召聚小笠原彌太郎和田三郎

比企三郎中野五郎細野已下軍士等於石御壺可誅景盛

之由有沙汰

又云二年二月六日壬戌今日則宗罪名并盛通賞事有其沙

汰爰有眞壁記内云者於盛通成阿黨之思生虜則

宗事更非盛通高名重忠慶之由憤申之仍於石御壺

被召決重忠與眞壁云々

又云建仁元年九月九日丙辰廣元朝臣始相具行景參御

所一行景先候侍所次依召廻石壺參廂御所簀子  
又云建仁二年二月廿一日丙申左金吾退御鎌倉一件柳被  
引之即被殖石御壺内一行景奉行之云々

○雨壺

義殘後覺云寄手我先ニト込入ケレハ中間六人アリケルカ  
畫ノ軍ニ兵具アレテ弓ハアレトモ矢ハナシ鎗長刀モ手廻  
リニナカリシカハ爰ニ雨坪ノ水タ、キニ手頃ナル石一間  
四方ニ敷置ケルヲ究竟ノ事コソアレトテ六人シテ爰ヲ先  
途ト打程ニ甲ノ眉間胸板向スネヲキラハス透間モナク打  
程ニ差モノ寄手モ暫是ニテ支タリ

○竹壺

吾妻鏡云建仁三年十月十日乙巳昨日御弓始射手十人被  
召ニ北面竹壺各賜祿

○藤壺

吾妻鏡云建保四年四月九日壬辰於常御所南終日聽斷  
諸人愁訴給各候于藤御坪言上子細云々

○松庭

長祿二年以來申次記云正月二日年始御乘馬始在之  
也御西向松御庭也にてめさる云々

參りうしろしさにうつなり左右へも打へしいつれも  
んへあかり候ときあしのぬれ候はぬやうに心得て打へし

○懸

吾妻鏡云建長二年三月廿六日壬辰將軍家於旅御所有  
御遊宴等(中略)次有御鞠會一條侍從承仰被注申人  
數二間爲秋田城介義景奉行已一點催人々午下尅教定  
朝臣以下參進以武藤左衛門尉左近入道上鞠事有御二間  
答于教定朝臣可爲兼教朝臣上鞠役云々其後大夫雅有  
十置御鞠於懸中云々四年四月廿四日丁丑御鞠也將軍家  
出御土御門宰相中將上藤其後人々集立光泰進出懸中  
央突右膝置御鞠云々

太平記云其時正成庭前ナル鞠ノ懸ノ柳ノ梢ニ近々  
ト降テ申ケルハ云々

室町殿年中行事云正月二日將軍家(中略)入御于常御所  
良有御休息而渡御于西面松御庭御乘馬始

御乘馬始記云松の御庭にためすなり若公様を伊勢守いた  
さ申御馬にめさせ北の松二本のあいへ打御出しありてそ  
れより西南へ三へんうち御まはし候て又懸の中程よりち  
と東に御馬を立られはしめのことく南の方へ伊勢守いた  
さをろし申候か、り御召候繪圖

如舊例於松之御庭可被看經之由被仰出也  
年中恒例記云宮々ノ御與ハ松庭ノ御庭ノ西向ノ唐トエヨ  
セラレテ御下與アリテ則其御座敷ニ御座候也是モ小上臈  
ヨセ被申候也御樣體御取々ノ御趣也但一カト御賞額の  
御事也

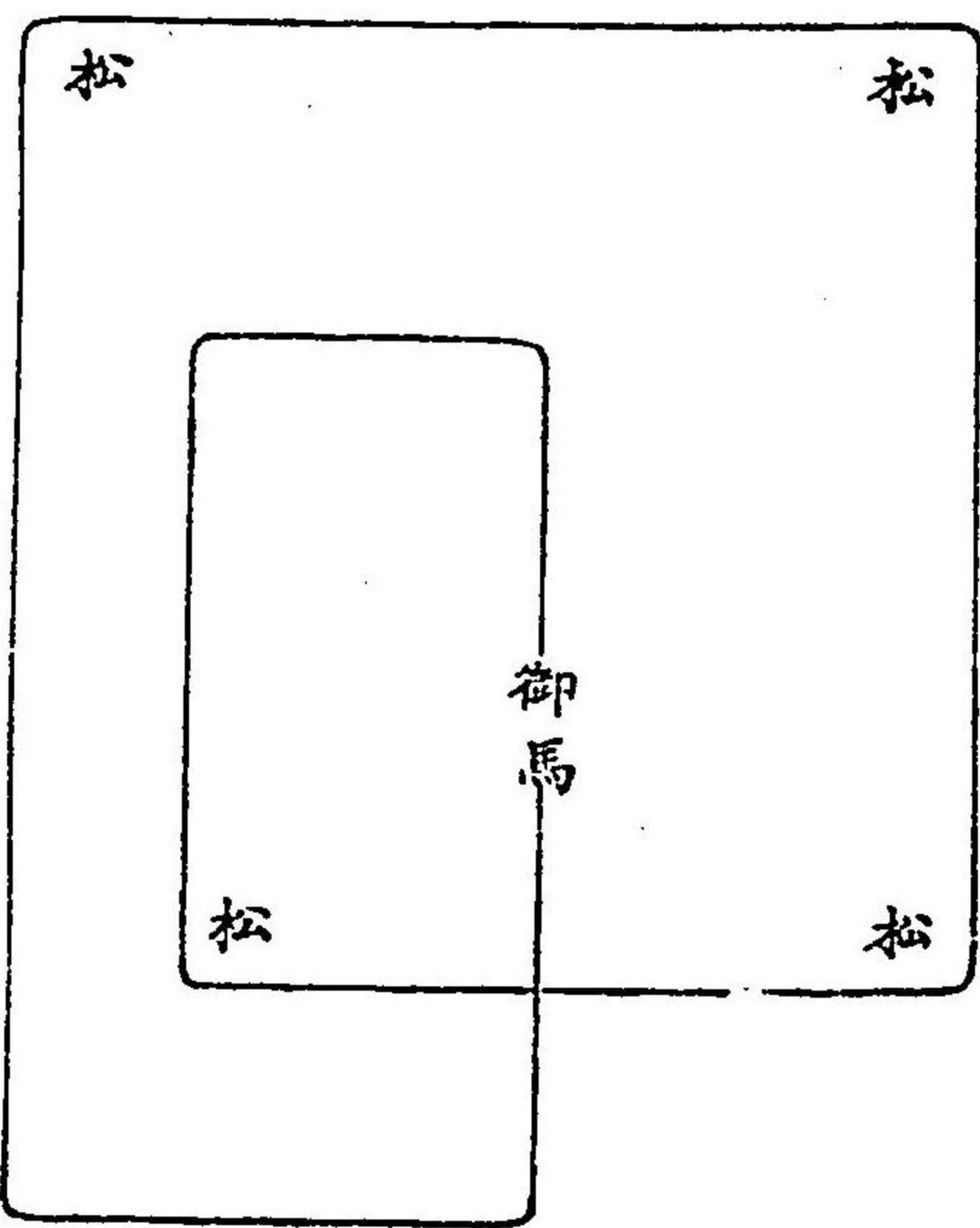
○鞠壺

吾妻鏡云建仁二年二月廿日乙未相模國積良邊有古柳名  
木之由就令開給爲移植于鞠御壺渡御彼所北條五  
郎已下六十餘輩候御共又被召具行景廿一日丙申左  
金吾還御鎌倉一件柳被引之即被殖石御壺内一行景奉  
行之但非良木之由申之云々

又云建長四年四月十四日丁卯及晚始着御直垂有御乘  
馬始之儀小山出羽前司長村三浦介盛時秋田城介義景等  
奉扶持之奥州相州武藏守尾張前司陸奥掃部助出羽前  
司等列着于敷皮於鞠御壺有此儀御馬者相州所被  
進也

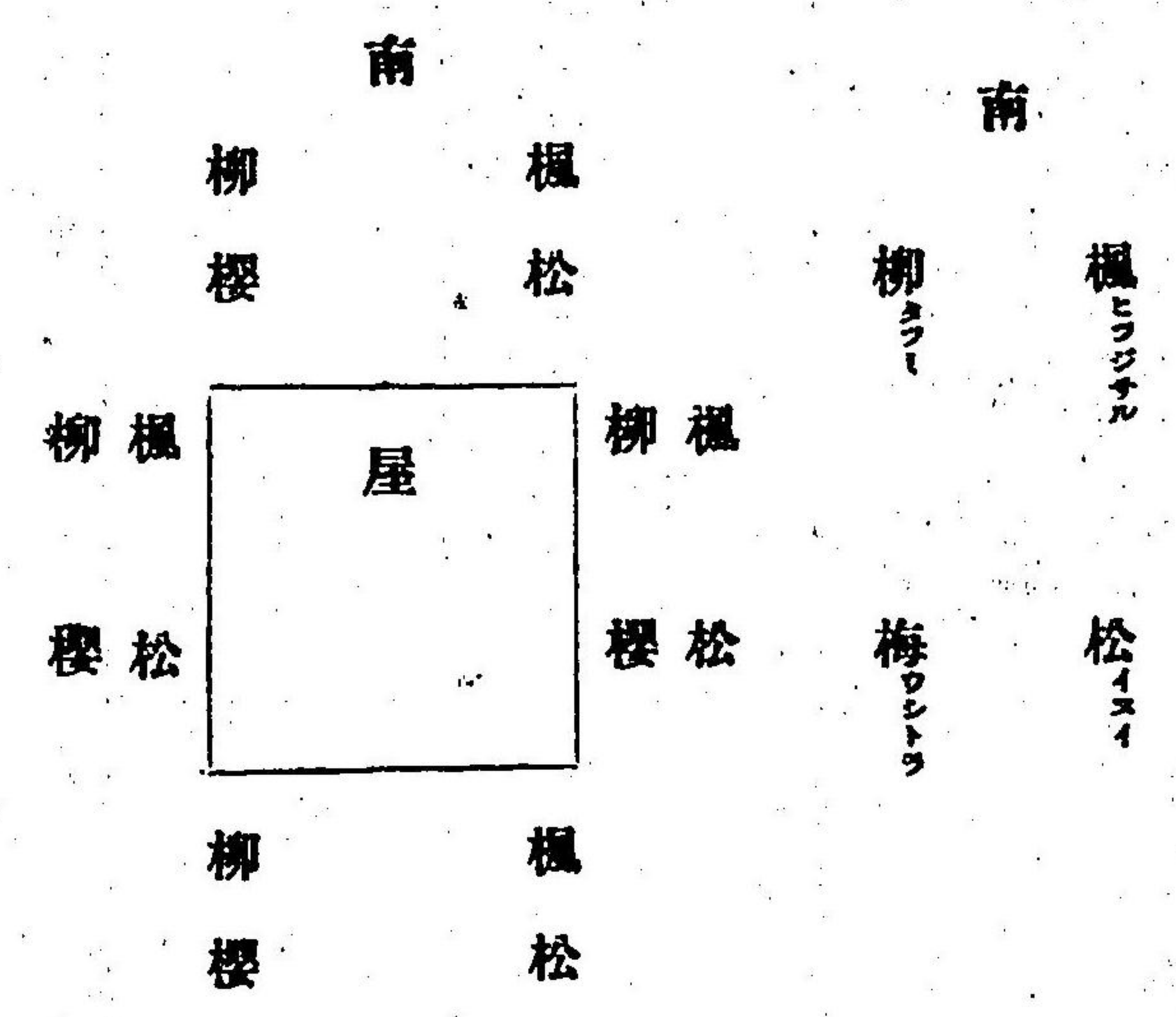
○鞠庭

今川大雙紙云刀をさぬ所は鞠の庭風は貴人の御近所  
也萬しつけ方の次第云まりのにはに水うつ事のきのむかふ



甲陽軍鑑云懸之樹之事式懸といふは櫻柳楓松也又四季の  
木不足して同木二本うふる事無子細又雜木もうふる也  
雜木には椶椋柿是は常に植木也但師の免なき人をしませ  
て植ことなし木は安宅の術懸は鎮屋の方也南向の庭を專  
とす然共東北の懸又常事也何方にても軒と樹との間一丈  
四尺二三寸許母屋の口よりの事なりひさしあらは縁の廣  
さをのそきてはしの方の邊より丈敷を打へし木と木との  
間二丈許二丈一尺にも植へし又庭せはからん所には一丈  
九尺八尺にも可然しからは軒と樹との間も五寸許もす  
すむへし所に隨ひ様によるへし木の高さ一丈五三尺但を

もふように有かたし一丈二尺三尺高くともひきくとも不  
苦うへて後高くなる木もさのみ思ふやうにさる事なし



○四本懸  
庭訓往來云御館造作事不可在<sub>ニ</sub>各別作事(中略)東面者  
構<sub>ニ</sub>轍物之坪<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>植<sub>ニ</sub>四本懸<sub>一</sub>  
甲陽軍鑑云大身小身其に然へき侍は作法にて庭に四本か  
かりを仕る

○白洲  
鎌倉年中行事云正月十七日御的アリ(中略)矢數致<sub>ニ</sub>記録<sub>一</sub>  
右筆は白洲致<sub>ニ</sub>伺候<sub>一</sub>人數並中外ヲ見テ記<sub>レ</sub>之  
又云國人御坐<sub>ニ</sub>テ御對面<sub>一</sub>一揆ハ御縁<sub>ニ</sub>テ御對面<sub>一</sub>富士歌訪  
ナトハ白洲<sub>ニ</sub>テ御對面<sub>一</sub>アリ  
家中竹馬記云公方様へ殿中にて諸家の内者御目に懸るに  
は御白砂にて掛<sub>ニ</sub>御目<sub>一</sub>也三職の宿老を始て何も御縁へは  
あからず  
諸大名衆御成被<sub>ニ</sub>申入<sub>一</sub>記云猿樂に遣候要脚つまれ候事能  
はて、白洲に大夫伺候うたひ申時要脚を亭主の同名衆は  
こひて御前の庭上につみ候也  
土岐家聞書云當方瑞瀧寺殿御時慈照院殿御成には觀世太  
夫能を仕りて萬疋下さる、也舞臺に置く其趣は五貫文宛  
並たる中を繩にて結て左右に拾貫文引さけて十人して持  
て出る也白砂の上より舞臺にをく正面にはをかす  
甲陽軍鑑云天正六年戊寅正月十五日巳の刻に勝頼公御く  
つろき所の小庭に馬の頭を二ツまで顯てみゆる勝頼是を  
御覽せられ土屋惣藏に仰付られあれを見よとある時惣藏  
承り急ぎ御白洲へをり候と等二ツながら消て見へす候  
安土日記云天正十年正月朔日御馬廻甲賀衆杯御白洲へ被

召暫時逗留御坐候處に御白洲<sub>ニ</sub>テ冷候ハンノ間南殿江  
罷上云々  
義殘後覺云毛利中納言輝光ノ家中ニ入江大藏之丞トテ凡  
日本一ノ大力有或時大閑聚樂へ御成被<sub>レ</sub>成ケレハ諸大名  
伺公シ玉フ其時大閑仰出サレケレハ如何ニ毛利中納言其  
方ノ家中ニ入江大藏之丞トテ大力ノ有由ヲ聞及ヒケレハ  
子カ抱置伊與之德緒之丞ト相撲ヲトラセテ見物セハヤト  
被<sub>ニ</sub>仰出<sub>一</sub>ケレハ輝元其コソ安キ御望<sub>ニ</sub>候トテ被<sub>ニ</sub>仰付<sub>一</sub>ケ  
レハ則兩人相撲ノ出立<sub>ニ</sub>テ行事連テ御白洲へ罷出ル  
○立砂

年中恒例記云三所ノ御立スナラツクリ申仍御太刀被<sub>レ</sub>下  
之  
酌并記一本云たてすな二ツの間をはむさととをらぬもの  
なり兩方のわきよりとをるへし  
○置石  
花營三代記云應永廿八年<sub>辛丑</sub>正月一日<sub>乙丑</sub>御參内并御院參ア  
リ自此御所<sub>ニ</sub>御車也御供無<sub>レ</sub>之<sub>布衣真宣於<sub>ニ</sub>居石<sub>一</sub>參會也</sub>  
又云卅一年<sub>甲辰</sub>正月一日<sub>戊辰</sub>島山中務少輔持清直垂<sub>ニ</sub>テ於<sub>ニ</sub>置  
石<sub>一</sub>參會

鎌倉年中行事云正月五日ノ夜御行始管領へ御出恒例也  
(中略)如<sub>レ</sub>此ノ後<sub>ニ</sub>御馬一匹御鞍置テ又引添テ一匹ハ裸  
馬也武州守護代子共兄弟又ハ被官中ニ賞瓶之人體引<sub>レ</sub>之  
立砂ノモトへ御馬ヲ引立時御腕別當皆々同前<sub>ニ</sub>白洲<sub>ニ</sub>伺  
候アリテ御馬ヲ引立云々  
宗恕聞書云妻戸の出入の事何共沙汰無<sub>レ</sub>之但常には無<sub>ニ</sub>出  
入<sub>一</sub>候正月其外きとしたる時は妻戸の間より出入候さま  
うの時は立砂を兩方に置候沓ぬきより間半斗さき也あま  
たれのか、らぬ程成へしつまと兩の柱のとほり成へし大  
さは其家の位により大小有立砂の事天地陰陽を表たる

居處部十七

# 武家名目抄稿第九十三册

塙檢校保己一編

## 居處部 十八

○弓場

吾妻鏡云仁治二年正月廿三日壬子於弓場相加宿老之類有射的之義云々

又云建長四年四月十四日丁卯御弓始射手六人入南門候弓場左右筵

又云正嘉二年正月十五日乙丑於御弓場有御弓始射手十八一五度射之云々

鎌倉年中行事云正月十七日御的アリ(中略)射手ハ七間ノ御腕へ參テ時分ヲ伺申也御左右アル時可射弓同張替之弓箭筒モタセテ射手ハ敷皮ヲ持テ面ノ御庭弓場へマカリ

出弓太郎ヲ爲シ始敷皮ヲシキテ居ヘシ

滋柿云泰時消息遺物近物大なる物にきものすへては女のみん所にも亦堅固に人のみざらん所などにもあれ唯御所の御弓場に立て千萬の人々にみらるゝ心任にて儀式をわすれずあたには物を射るへからず

○棚

倭名類聚抄云射探唐韵云 他果反字亦作樂場氏漢語抄云射探以久波止古靈世間云阿無豆知今按又用棚字音册

類聚國史云仁明天皇承和元年正月甲戌於永安門裏西腋廊前新作棚備于御射紫宸殿西南端廊被微毀以擬箭道也

太平記云 芳賀兵衛岡本信濃守白絲ノ鏡著タル岩松ヲ左馬頭殿ノト目ニ懸テ組テ討ント相近付ク岩松ハ又元來左馬頭ノ命ニ代ラント鏡ヲ著替シ上ハナシカハ命ヲ可惜二人共ニ開々ト馬ヲ歩マセ寄テアハヒニ草鹿ノアツチ長ニ成ケル時岩松カ郎等金井新左衛門岩松カ馬ノ前ニ馳塞テ岡本引組馬ヨリトウト落ケルカ互ニ中ニテ差違テ共ニ命ヲ止テケリ

了俊大草紙云笠懸の村梁も九杖につきて七杖に的を立なり

高忠聞書云大的丸物草鹿笠懸などにもあつちといふへきなわまとはと云事あるましき也但大的斗などの日は的場といふてもくるしからすそれもあつちと云へきこと本なり

佐竹宗三聞書云梁の寸法定事なし見てよきように上すは

蛭川親俊記云天文十一年九月三日庚戌細川殿貴殿へ御出也小的在之弓場にて破籠にて御酒まいる云々

武田射禮日記云弓場に立へき様ノ事先數塚ト三カナワニ立テ數塚ノ内ノ角弓ヲ立ヘシ

○的山

太平記云 留吹峰 長尾彈正根津小次郎トテ大方ノ剛者アリ今日ノ合戦ニ打負ヌル事身一ノ恥辱也ト思ケレハ紛レテ敵ノ陣へ馳入將軍ヲ討奉ラント相謀テ二人乍ラ俄ニ二引

兩ノ笠符を着替へ人ニ見知レシト長尾ハ亂髮ヲ顔へ颯ト振り懸根津ハ刀ヲ以テ己カ額ヲ突切テ血ヲ面ニ流シカケ切テ落シタリツル敵ノ頸鋒ニ貫キトツ付ニ取着テ只二騎

將軍ノ陣へ馳入ル(中略)將軍何クニ御座候ヤラント問へハ或人アレニ扣ヘサセ給ヒテ候也ト指差テ敵ヲ馬ノ上

ヨリノヒアカリ見ケレハ相隔タル事草鹿ノ的山計ニ成ニケルアハレ幸ヤタ、一太刀ニ切テ落サンスル者ヲト二人

乾ト目クハセシテ中々馬ノ開々ト打マセケル

庭訓往來云南面者通笠懸ノ馬場令結埒同可築的山鎌倉年中行事云正月十七日御的アリ御的五尺二寸の皮申御的山ハ小舍人役也是又上代ヨリ舊規也

岡本記云あつちに別に山もありまともやまとも申なり

りにして南方の上かをとたかくつくへし小的の梁は庭の廣さにしたかひつかすへし矢落はいつかたへもくるしからす座敷を射手のいたしやうにつくへし後向にはつくま

しきなり又産所の引目の時は北矢落を忌なり弓場をつくの場をつくととは不申候誘ゆるとは申へし

上田越前守圓物記云圓物のあつちの遠さ十一杖に打て十杖に立へしあつちと串とのあはひは矢たけより少しちかし

又云あつちの高さ三尺九寸横四尺八寸兩の脇ひろさ三尺五寸宛なり上のよこは六寸斗つくへしあまりにはすれば

あつちのなりわろし大かた此分にて見て能様に可掛射御拾遺抄云あつち高下と云は小的にかきりたる事なり

的立へきものなきあひたつらといふ物をくみて立なり又あつちなき所にてはすなつちなとをかきあけても射なり

自然又大的をかけすかして射時まとはなるへきか惣て當座にてあつちをしいたしたるを高下と云なり

笠掛記云笠かけ馬場にあつちをつき候事有引目と、めのみきはうしろのくしの方にならへて馬場本へむけてつくへし

射手馬場本の馬たつる所に立てさくりをこしてすちかへて射る也矢代をそのまへにふるへし

按、和名抄梁を以久波止古路と讀たる古語に的を以久波といへるか故なりいとあかれる世の詞にて天曆の頃世にははや阿無豆知といひ其後無は省かれて阿豆知といひ又万止也方ともいひけり万止也方は義よく聞るたれ共阿無豆知といふよしは未詳

○的場 的

太平記云 義貞義直本ヲ打出シ時先皇居ニ參テ天下ノ落居ハ聖運ニ任セ候ヘハ心トスル處ニ候ハス何様今度ノ軍ニ於テハ尊氏カ籠テ候東寺ノ中ヘ矢一射入候ハテハ歸參ルマシキニテ候ト申テ出タリシ其言ニ不達數ヲ一的場ノ内ニ攻寄セタルハ今ハカウト大ニ悦テ云々

了俊大草紙云的庭の遠さは昔は弛弓にて三十三杖に射梁を築くのをは三十杖に立しなり

弓馬問答云的場といふ事は惣名なりのかくる方をとりわけ的場といふ射方をは弓場と云也筒木よりの申迄三十三杖なり

又云的場の遠さ三十三杖寄て申を立は三十二杖と可ニ心得一申長さは出の上六尺八寸也三方同前なりと可ニ心得一申の大き六寸五分なり

百手問書云的場の遠さ三十三杖なり但近年廿三杖も云々

なり弓太郎の役としてしの竹を長さ一尺二寸に切て黒くぬりてをくなりぬらぬ事も有前後共に數つかの後のきはに五十つ、をくなりやはやをとやによつてさしかる様あり前後共に同前なり秘説たるにより巨細に書載るに不<sub>レ</sub>及歩射の時用る事なり

百手問書云五度弓次第の事數塚の高さ一尺二寸本の廻り三尺斗にして上のなりは見合候て次第に細くする丸くつくへしまへの數塚の中へ四寸ばかりなる石を入れてそのうへをすなにてつきかたむる是を弓圓と云也自然數塚くつれる時前の所をしらん爲なりまた數塚の廻りなとにわけ物をこしらへて其中へすなを入たるかよきなり數塚つくる事的かくる次第定法にはなければとも數塚のかぬまへの的のさはさ有ましき也惣て賞にて數塚弓場に有物なる故なり

又云五度弓數塚の事弓太郎見はからひてこしらふへしあつちの前かとの通りより前の數塚をつくへし期より數塚の遠さ卅三杖なり但近年は廿三杖又は小的その内にをするなりまへとうしろとの數塚の間二杖なり

弓馬問答云數墳の事高さ七寸と心得へきなり九寸ともあるなり

法量物云笠懸事的場の遠さ弓杖に打て八杖に可<sub>レ</sub>立的皮の布六の長さ五尺云々

○遠的場

太平記云 山門本間ト相間ト二人御方ノ兵ノ二町計隔タリタル向ノ尾ニ陣ヲ取テ居タリケルニ向テ例ナラス敵兵ノハタラキ候ハ軍ノ候ハンスルヤランナラシニ一ツ、射テ見候ハシ何ニテモ的ニ立サセ給ヘト云ケレハ是遊ハシ候ヘトテミナ紅ノ扇ニ月出シタルヲ矢ニ挾テ遠的場タテニソ立タリケル

○數塚

高忠問書云かすつかの高さ一尺貳寸前後のあひ弓のたけ後は扇たけあつちの方へよるへし

弓張記云かすつかの寸法の事まはり三尺斗高さ一尺貳寸斗りなり大的のとき弓立のかたにすなにて二つ有ものなりうしろのかすつか一尺五寸的の方へより二ツの間弓杖一ツ充にうつへし

射禮私記云數つかのたかさ一尺貳寸<sub>金</sub>の前と後との間弓すゑはつし一杖にうちて後の數つかを一尺五寸的の方へよする也又は八寸とも云

又云數つかといふはかちたちの時數をさすによつての名

佐竹宗三問書云數塚をつくとも又をくとも申へし

武田射禮日記云數塚へ寄ルヘキ様前弓ハ弓ノ末等一尺ハカリ數塚ノ本ニ打懸テカシコマリ後弓ハ末等數塚ニト、クト、カヌニ畏マルヘシ

○馬臺

扶桑略記云康平五年五月廿二日主上出<sub>二</sub>御馬臺<sub>一</sub>御覽鏡馬<sub>一</sub>皇大弟參現

○馬場殿

吾妻鏡云建仁三年十一月廿三日丙戌將軍家於<sub>二</sub>馬場殿<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>射<sub>二</sub>小笠懸<sub>一</sub>給

又云嘉禎元年閏六月廿三日甲戌將軍家渡<sub>二</sub>御馬場殿<sub>一</sub>覽<sub>二</sub>射藝<sub>一</sub>以<sub>二</sub>其次<sub>一</sub>入<sub>二</sub>御大膳權大夫師員屋形<sub>一</sub>即還御云々

又云仁治二年正月廿三日壬子將軍家渡<sub>二</sub>御馬場殿<sub>一</sub>前武州被<sub>レ</sub>參遠江前司駿河守宮内少輔攝津前司上總權介出羽前司以下數輩參上先令<sub>二</sub>若輩等射<sub>二</sub>遠笠懸<sub>一</sub>

又云文永二年八月五日庚午將軍家自<sub>二</sub>馬場殿<sub>一</sub>入<sub>二</sub>御々產所<sub>一</sub>即還御

鎌倉年中行事云御犬追物被遊馬場殿ノ事外様へ被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>一方四町ニ御築地ヲツキ面ノ方ニ御門ヲ立クロ木ノ御所ヲ被<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>南向<sub>一</sub>ナリ

花營三代記云應永廿九年壬寅七月七日於馬場殿御方御所様御笠懸アリ御相手六騎

長祿二年以來申次記云正月十四日さきつちやうの事及晩て馬場殿にてはやし申なり三間御厩の御縁へ御成候て辻こしに被御覽候

季理日録云文正元年五月八日御馬場殿南邊泥清之事門前掃地御談奏之聊有御領受色也

○流鑄馬屋

吾妻鏡云嘉祿三年七月十九日甲午北條五郎時頼始可被射來月放生會流鑄馬之間此初於鶴岡馬場有<sub>其儀</sub>今日武州爲<sub>扶持之</sub>被<sub>出</sub>流鑄馬屋駿河前司以下宿老等參集云々

又云寬元四年八月十六日壬寅流鑄馬十六騎揚馬訖而射手十人俄有<sub>霍亂之氣</sub>申障已及<sub>神事違例</sub>仍於<sub>御棧敷</sub>有<sub>御沙汰</sub>以<sub>雅樂左衛門尉時景</sub>爲<sub>御使</sub>可<sub>動</sub>此射手之旨被<sub>仰</sub>駿河式部大夫家村(中略)泰村起座行<sub>向弟家村</sub>座前<sub>早可</sub>應<sub>仰之旨</sub>再往加<sub>諷詞等</sub>時只<sub>今稱</sub>無<sub>射馬</sub>泰村馬者答<sub>用意之由</sub>泰村存<sub>如</sub>此時儀<sub>射馬</sub>置<sub>鞍兮兼以令</sub>置<sub>流鑄馬舍</sub>近邊云々家村失<sub>據</sub>于通避<sub>自取</sub>敷皮<sub>副</sub>于<sub>下手</sub>將<sub>向</sub>流鑄馬舍

の跡にかけん事恐あるへきよし内々御沙汰も候へは一定仰出さる、道も候はぬと覺候

季理日録云寬正六年八月廿二日今日於細川右京大夫殿馬場<sub>御</sub>覽<sub>御馬</sub>仍<sub>給</sub>元<sub>不及</sub>被<sub>露</sub>而退出也四鼓刻御成云々上様并今出川殿御出云々

織田家譜云天正九年二月信長信忠信雄上洛(中略)信長於<sub>禁裏前</sub>構<sub>馬場</sub>以<sub>召</sub>近國軍士<sub>見</sub>馬捕<sub>其</sub>粧盡<sub>美</sub>明智日向守奉<sub>行之</sub>

安土日記云東山慈照院御庭ニ二年被<sub>立置</sub>候丸山八海ト申候都鄙ニ無<sub>隱名</sub>石御座候是又<sub>被</sub>召<sub>寄</sub>御庭ニ居サセラレ其外洛中洛外之名石名木集メ眺望ヲ盡シ馬場ニハ櫻ヲ植號<sub>櫻之馬場</sub>與無<sub>殘所</sub>被<sub>仰付</sub>云々  
賀越圖詳記云<sub>宮田</sub>桂田<sub>文番</sub>丞ハ落行處ヲ生捕テ柳ノ馬場ニテ首ヲ刎ラル

○相廣馬場

吾妻鏡云壽永元年六月七日丙午武衛令<sub>出</sub>由井浦<sub>給</sub>壯士等各施<sub>弓馬之藝</sub>次以<sub>股解</sub>差<sub>長八尺串</sub>召<sub>愛甲</sub>三郎<sub>令</sub>射<sub>給</sub>五度射之皆莫<sub>不</sub>中而武衛令<sub>打</sub>彼馬跡與<sub>的</sub>下<sub>給</sub>之處其中間爲<sub>八杖</sub>也仍積<sub>此杖數</sub>可<sub>定</sub>相廣之馬場<sub>之由</sub>被<sub>仰出</sub>

又云寶治元年八月十五日乙未放生會延引去六月合戰觸<sub>穢</sub>之上依<sub>被</sub>追討<sub>余炎</sub>流鑄馬舍燒失故也京都就<sub>此事</sub>自去六月九日關東飛脚入洛日<sub>至</sub>七月五日<sub>觸穢</sub>云々

○馬場

文德實錄云天安元年三月丁卯有<sub>勅遣</sub>使神泉苑<sub>馬場角</sub>御馬之走足也  
百練抄云寬和二年丙戌三月十日右近馬場可<sub>改</sub>南北<sub>之由</sub>宣下

吾妻鏡云文治四年二月廿八日甲午鶴岡宮被<sub>始</sub>行臨時祭<sub>二品</sub>御出小山七郎朝光持<sub>御劍</sub>看<sub>御廻廊</sub>之後有<sub>流鑄馬</sub>二騎<sub>射</sub>之馬長三騎渡<sub>馬場</sub>遠近御家人爲<sub>營</sub>勸此會<sub>群集</sub>云々九月廿日壬午景能此間於<sub>鶴岡馬場邊</sub>構<sub>小屋</sub>是爲<sub>營</sub>固宮寺也

又云嘉祿元年四月十一日癸酉今日於<sub>馬場</sub>爲<sub>周防前司</sub>奉行<sub>鳥巢</sub>事被<sub>經</sub>其沙汰

又云文應元年八月十六日辛亥武州參宮同昨將軍家雖<sub>無</sub>御<sub>出</sub>馬場<sub>之儀</sub>棧敷等如<sub>例</sub>大夫判官行有大夫判官廣綱大夫判官行氏等警<sub>固</sub>馬場

滋柿云泰時消息近年在京の武士共物を射よとして内野を馬場に定たるよし其聞あり事實ならは代々皇居の跡也馬

按、相廣の馬場といふことさたかならず伊勢貞丈か説に豎も横も同じ廣さなるゆへ相廣といふ是は馬藝を練習するに宜き故なり八杖の敷を積て定むとあれば弛弓にて六十四丈四方の馬場なるへしといひしか<sub>武器</sub>いかかあるへき今をもふに相廣は間廣にて<sub>相字は只字調</sub>疏<sub>と</sub>期とのあひの廣き馬場をいふにや積<sub>此杖數</sub>とは季隆か乗りたる馬跡と<sub>的</sub>下との程をはからひて矢道の杖數に定られしといふなるも知へからず猶<sub>一</sub>微を得て斷るへし

○流鑄馬場

吾妻鏡云文治三年八月四日壬申今年於<sub>鶴岡</sub>依<sub>可</sub>被<sub>始</sub>行放生會<sub>被</sub>充<sub>催</sub>流鑄馬射手并<sub>的</sub>立等役云々九日丁丑鶴岡宮中殊以<sub>掃除</sub>今日造<sub>馬場</sub>結<sub>埒</sub>埒仍<sub>二品</sub>監臨給

流鑄馬次第云馬場たけの事二丁なるへし馬かへす所は笠懸の馬場のことし埒は兩方に有へしめ埒お埒といふお埒は高くめ埒は低かるへし射たる時の馬手をめ埒といふなり

○犬追物馬場

賀越圖詳記云<sub>於</sub>東庄<sub>大窪</sub>永祿四年四月六日ニ朝倉左衛門督

義景東ノ庄依ニ大窪犬追物有之御伴ノ人衆一萬餘人見物ノ貴賤其數ヲ不知馬場之廣ハ方八町ニシ構ヘラレケル

○犬馬場

異本伯耆卷云名和殿ハ六波羅ヨリ催促ニテ先月千劔破ノ城ニ向ヒタマウトテ御上洛ト申ス成田是ヲ聞力ヲ落シテ胸フサカリコハ如何ニト歎カシクテ夫レハ何日御歸可ト有ト問ヒケレハ亦人申ハイヤトヨ大殿ハ上リタマハス若殿計御上洛候タシカニ昨日マテ犬ノ馬場ニテ慕目ノ音聞ヘ候ト申システ、通りケレハウレシサ申ス計ナシ

○笠懸馬場

庭訓往來云御館造作事不可有各別作事(中略)南面は通ニ笠懸之馬場令結埒同可築三的山一射御拾遺抄云笠懸の馬場の來歴の事(中略)馬場のあて様大かた法量に在てまつ馬場たけは四十丈なり疏の廣さは上は二尺底は一尺八寸深さは六寸なり

○外馬場

家中竹馬記云馬場をあつると云は笠懸の馬場の事也犬の馬場をはあつるとはいはす犬の馬場をこしらふかと云外の馬場と云は竹塙もなしはうしをして見物衆を塙とする儀也又庭に犬の馬場をこしらへかへたるをは壺の馬場と云内馬場ともいふ宿所の外に拵て竹かきなどあるは犬の馬場までなり

○内馬場

出法師落書云此度の犬見物にはしりありきけれともつは馬場なるうへふかく人目をは、かりてさしまはして内外なきとち稽古しければ云々

○芝馬場

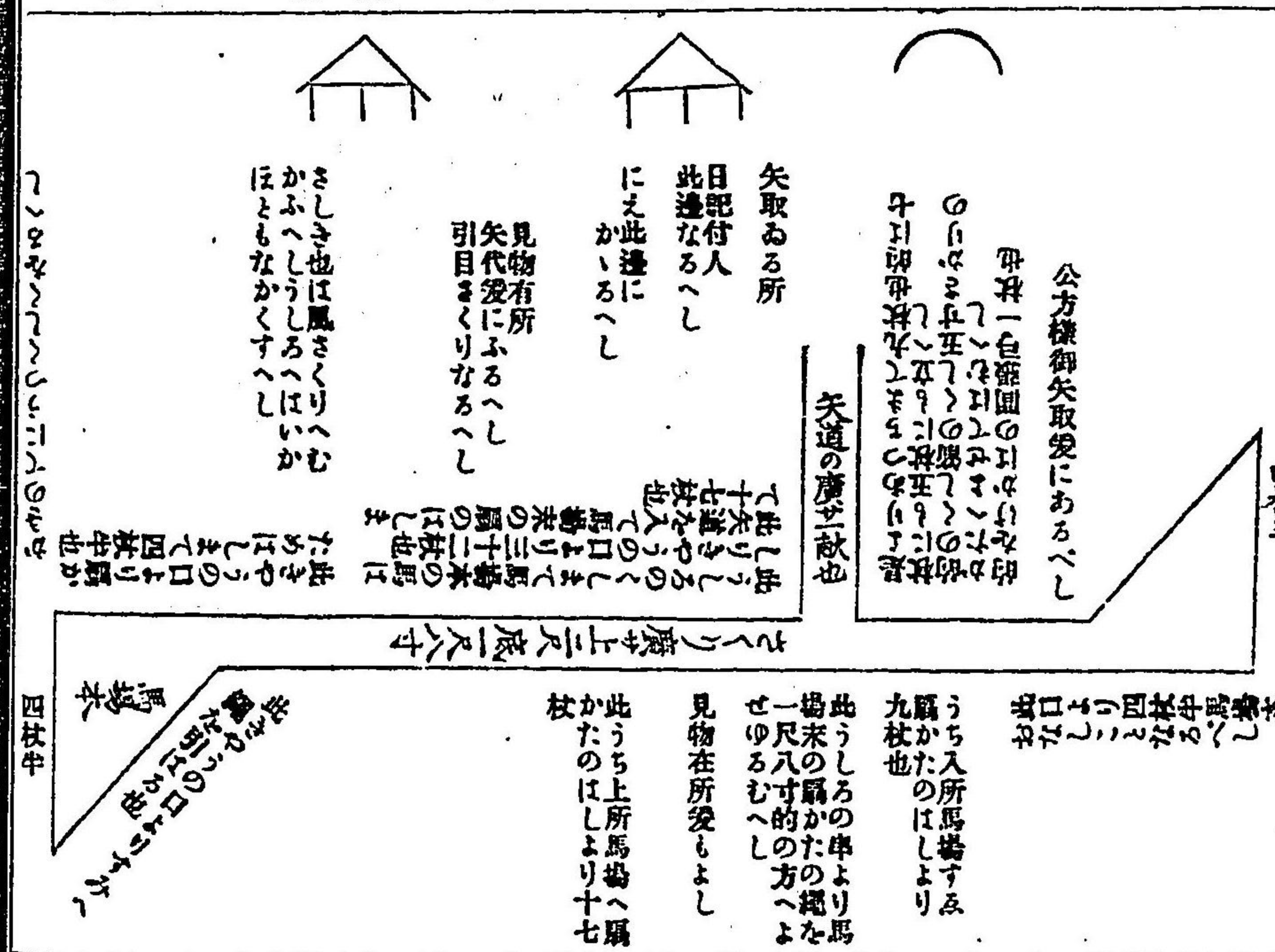
射御拾遺抄云しはの馬場にてはしやくりありかたしされはひくかと思はすてよつくかと思は捨へしといへともそれもしはのなき處にてはさくりの沙汰あるへしまた芝の馬場にて引目おちしりを見るにさかりたる矢は引目のおちしりに芝射つけらる、なり

○馬場本

笠懸記云たいはいの事をよそ扇かたに馬のたて様馬場北

○馬場本

笠懸記云たいはいの事をよそ扇かたに馬のたて様馬場北



頭にはしらかし候は馬場本南なるへし云々

○疏

齊藤親基記云文正元年七月十九日馬場殿芝被置之サクツヲ被充了

射御拾遺抄云笠懸の馬場の來歴の事根本は浦にてすなの上を馬をとをして其跡をさくりといへり馬のあし跡いぬのあしあを總してさくりといふなりそののちは此跡を表して笠懸の馬場のさくり出來次馬場のあて様大かた法量物に在てまつ馬場たけは四十丈なり疏の廣さは上は二尺そこは一尺八寸ふかさ六寸なり

弓馬問答云笠懸の事馬場の遠さ一町さくりの廣さ一尺五寸馬場本馬場末同前なり有三口傳(中略)馬場は五十杖に打なりさくりをは馬歸りてさくりてかき立る處を少し廣き様に又みよきやうにすへし馬場末も又如、此其故は歸る時小笠懸を可射爲也又さくりには馬場本馬場末は一尺八寸的通一尺五寸也

○馬走

笠懸記云たいはいの事をよそ扇かたに馬のたて様馬場北頭にはしらかし候は馬場本南なるへし扇かたのすみ未申かたへ馬の頭を向てひかへいかに心をも馬をもしつめ

て手綱のまかりまん中をとりさて左右をひつちかへて取引目をつかふまでひちを脇につくつかすに矢かまへて馬をかへす馬はしりにかき入所にて懸て打入へし云々  
法量物云小笠事(中略)的と馬走の間八寸

○扇形

高忠聞書云笠懸體拜射手の出立の事(中略)あふきかたへ打入中程にひかへ矢をさしはけて手綱を二重にかいくり云々

○揚穴

笠懸記云馬のかへし様一番に射る人馬場本のあけあなよりうち上りて疏のかたへ馬の頭をなしひかへしさて二番目の射手直に馬場本へうち入かへして射るなりさて三番目よりいくたりもあれあけ穴より上一番に上てひかへ候馬のうしろを通はし末へ次第に立ならへしいくたひも馬のかへし様かやうに有へし

○埒

吾妻鏡云安貞二年七月廿四日將軍家御逗留田村有遠笠懸等二人々候埒際見物此間三浦二郎素村與佐々木太郎左衛門尉重綱口論互及過言素村射手乗馬於埒内二挾箭重綱見進寄於埒外取太刀各可決雌雄之

形勢也云々

高忠聞書云かさかけのうちの事高さ一尺五寸木はくろもんしゆにてゆふ也はしりのあひた弓するに近し又みいろ木にてかりにするなりはしらは一間はかりつ、をくへし小笠懸の時めてに有へく候

射御拾遺抄云らちの事的の方計にゆふへしたかさは法量物にあり檜木をさす也又は柴にてもゆふへし其時はくろもんしゆといふ物をませていふなり或は萩はかりにてもゆふへし何もののをりはあくへし馬場本より馬場末まではさくりのなかにゆふなり

笠懸記云らちゆひ様

○雄埒

宇槐雜抄云保元三年九月廿三次騎射左十人右八人南上次左近番長掛的兵衛立的一的忠利二的武則三的兼文的立番長兵衛等相具他番長各近衛一人赤衣下部一人立了歸之時件二人猶留居雄埒下年の節

○埒門

吾妻鏡云嘉禎二年八月十六日庚子將軍家御奉幣于鶴岡下宮其後流鏑馬以下有馬場儀廷尉定員候埒門邊具子定員

○内傍示

○外傍示

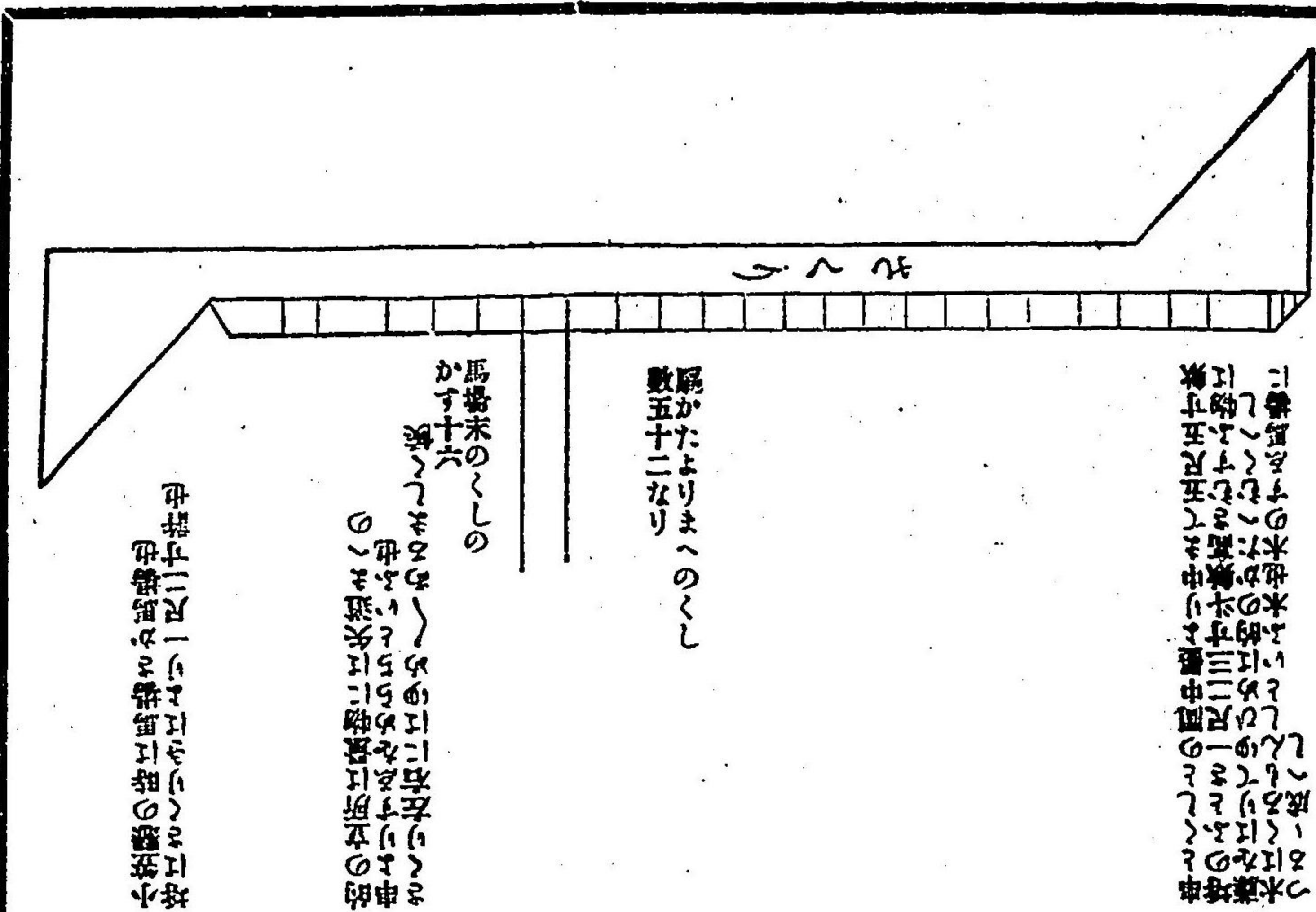
○小繩

○外繩

射御拾遺抄云馬場のはうしの事まつ小繩のひろさ弓杖一つへなり其中よりけつりきはまて三杖と申也又けつりきはより四方へ三十三杖なり其傍示さいはいをさす是をさいまきはといふ内のはうしは射のけよ外はうしは射かけよといふ名目ありうちはうしとは繩のことなり外はうしとはとなはの事なり

○狩場

吾妻鏡云建久四年五月廿九日祐泰去安元二年十月之頃於伊豆與狩場不圖中矢墜命是祐經所爲也  
又云仁治二年九月廿二日丁未左親衛自藍澤被歸數日踏山野熊猪鹿多獲之其中熊一者親衛以引目射取之爲先代未聞珍事之由諸人一同感申又下河邊左衛門尉行光者自幼少住于太田下河邊等田畔一定不馴如此此狩場歟之由傍證依梅思動爲試其堪不每走獸之便宜追合之行光必射取之然者今度物員獨在行光





但若狹前司及相論云々行光爲三故實射手之上、毎年在三那須狩倉、大堪、馳、嶺谷、也云々

太平記云、盛高モ岩木ナラテハ心計ハ悲シケレ共心ヲ強ク持テ申ケルハ(中略)トモ隠レアルマシキ物故ニ狩場ノ雉ノ草隠タル有様ニテ敵ニサカシ出サレテ幼キ御尸ニ一家ノ御名ヲ失レン事口惜其ヨリハ大殿ノ御手ニ懸ラレ給テ冥途マテモ御伴申サセ給タランコソ生々世々ノ忠孝ニテ御座候ハン云々

○狩倉

吾妻鏡云建久四年三月廿一日戊子將軍家爲、覽、下野國那須野信濃國三原等狩倉、今日進發給云々五月二日丁卯北條殿下、向駿河國、給是爲、覽、狩倉、可、令、越、彼國、給、御旅館以下作事伊豆駿河兩州御家人等狩野介相共可、令、沙汰、給、之、由、合、御旨、先、以、首途、給、云々  
高忠聞書云かりくらといふは鹿かりに限りたることなりされはけふのかりくら昨日のかりくらなりといふなりかりくらとは狩の總名なり

○狩山

長曾我部元親百箇條云狩山普請場於其外無射人を射科事即時可、成、敗、若、意、越、遺、恨、於、在、之、儀、其、身、行、死、罪、親、類

武家名目抄稿第九十四册

塙檢校保己一編

居處部 十九

○門

倭名類聚鈔云門四聲字苑云門和名所以通、出入、也唐令云門舍和名六品以下及庶人不得過、一門兩下、

御供故實云御門に石のなき事は御事の時しき居をのけらるへきために候間如此候

按、門を和名鈔加度と讀り古事記穴穂王子の御歌に加

那斗萬葉集に金門九可那門可奈刀同上と見えたりは

上古は門を加那斗といひしを那は省かれて加度となり

たるなり扱て其義はいまたさたかならず舊説に古金鎖

を以て門戸をくされり故に訶那杜といふといひ日本紀

或説に金物を稠く打て堅くする故に加那斗と云か又古

は皆なから金を押したるもあるへしなといへり上古さ

る事ありしともおもはれず且賤か門戸をさしても加奈

斗といへはいと、うけ難し今おもふに古語に加といふ

は際限の意なり垣を加幾といひ壁を加倍といひ皮を加

迄可、懸、科事

○鷹場

吾妻鏡云文治五年十一月十七日癸酉二品爲、歷、覽、鷹場、出、大庭邊、給

又云建仁二年十二月十九日己未將軍家爲、覽、鷹場、令、出、山内庄、給入、夜、還、御云々

波といひ限を加波利といふの類もおもふへし門は内外の際にある物なれば加奈斗といひしにや奈は助辭斗は戸にて入口の事也奈文字省かれて加度ともいふは美奈斗水美斗の例ともいふへきにや

○總門

吾妻鏡云建保元年五月二日壬寅朝夷奈三郎義秀敗、總門、亂、入、南庭、所、籠、之、御家人等利繼、火、於、御所、郭、内、宮、室、不、殘、一、字、燒、亡

又云建仁三年九月二日丁卯廷尉參入著、平禮白水干葛袴、駕、黑馬、郎等二人雜色五人有、共入、總門、昇、廊、杏、脫、通、妻、戶、擬、參、北面

普廣院殿左大臣御拜賀記云享祿四年十二月九日戊刻室町殿南面總門御出北小路東行萬里小路南行鷹司西行東洞院北行自、左、衛、門、陣、御、參、内、云々

家中竹馬記云正月の御晴并御的始松はやしなとは四足より御出仕あり室町の花の御所の時は四あしは西むき室町西也御所の未申のかと總門あり其きはにて御下馬有て四足より御參あり

新撰信長記云角テ夜モ明方ニ成ヌレハ總門ヲ押開キ大音聲ニテ名乗ヤウ柴田修理亮只今討死スル間佐々木殿ノ御

内ニ我ト思ハシ人ノコレ有ハ討取給ヘト名乗掛

○表門

安土日記云天正十年正月朔日總見寺毘沙門堂御舞臺見物申表之御門ヨリ三之御門之内御天主之下御白洲マテ御伺公候

○裏門

信玄家法云以自面用所不可裏御門出入事

羽尾記云能登守曰イカニ攝津守某ハ舊冬珍シキ刀ヲ求得タリ是御ランセヨトテ如氷ナル刀ヲヌキイタシ攝津守カシヤ類ナモノクソウニ指出ス攝津守此分野ヲ見テアハテヲトロキケレトモ能ク心ヲシツメ答曰天明キサンノヲ打物カナタレタレモ見物セヨトテサアラヌテイニモテナシ酒杯ヲ進メ肴マイラセントテ内處へ入ト見ヘシカ裏門ヨリ退出シ越後ヲサシテ落行ケリ

蘆名家記云高田同高田間荒井駈合スレハ敵又ツト引追手へ突テ出ル間ニハ裏門ヨリ攻入裏門へ突テ懸ハ追手ヨリモ攻入ケル

井伊直孝傳記云井上主計を以被爲成ニ上意候は明朝未明に直孝登城仕候へ候は、裏御門より出仕候様にとの上意なり

ノ旗ヲ給リ討手ノ大將ヲ承テ六條河原へ打出三千餘騎ヲ二手ニ分テ多治見カ宿所錦小路高倉土岐十郎カ宿所三條堀河へ寄ケルカ時綱カクテハ如何様大事ノ敵ヲ打漏スト思ケルニヤ大勢ヲハ能ト三條堀河ニ留時綱只一騎中門二人ニ長刀ヲ持セテ忍ヤカニ土岐カ宿所へ馳テ門前ニ馬ヲハ乗捨テ小門ヨリ内へツト入テ中門ノ方ヲ見レハ宿直シケル者ヨト覺テ物具大刀刀枕ニ取散シ高飽腔カイテ寢入タリ厩ノ後ヲ回テ何ニカ匿地ノ有ト見レハ後ハ皆築地ニテ門ヨリ外ハ路モ無シ云々

又云京勢道譽只今仁木ニ對面シテ軍評定仕候ハンスルニ其間ニ可然近習ノ者一人被召具女房ノ體ニ出立セ給テ北ノ小門ヨリ御出候へ御馬ヲ用意仕テ候何クヘモ忍ハセ進セ候ヘシト申タリケル

鎌倉年中行事云御所造等并新造之御移徙ノ様體之事大御門并小門何モ南向也東西ニモ御門アリ不明之御門モ西ニアリ

嘉吉物語云大勢は叶まじとて物のくして御座敷に御出ある人々には先赤松の彦二郎との同左馬助殿御内かたには浦上の四郎安積中村の彈正そのほか大かうの兵廿一人御供申て御前に參て助殿は右の御手にとりつき給彦二郎殿

○大門

鎌倉年中行事云正月十二日勝長壽院之御門主様殿中江御出被開大御門見二人坊官一人法師一人被召具云々嘉吉物語云時刻うつしてはと彦次郎殿左馬助殿みな御させなはをぬきおき給ひ事おもての廣縁にしき皮しかせ大門ひらきうつくむかひなは腹きらんと仰られて云々

蜷川親元記云寛正六年八月廿六日大門并壁御修理要脚七百疋餘自小大夫殿請取之森に下行

御供古實云御成の時は大門のそとののはしらのきはまて其亭主は罷出畏て申なり

袋輪軍記云兵矢鐵炮を飛ばす事大雨のことくなり是にて寄手數千の兵を討れ寄手數百人見えけるか城方大門押開き矢島久左衛門真先に進み鐵の棒をつき出にけり

○小門

吾妻鏡云建仁三年九月二日丁卯遠州著甲冑給召中野四郎市河別當五郎帶弓箭可儲兩方小門之旨下知給仍取分征箭一腰於二各手夾之二立件兩門彼等依爲勝射手應此仰云々

太平記云小串三郎左衛門尉範行山本九郎時綱御杖

は左の御手にとりつき給ふ其時御所様こはそも何事と仰られしかは助殿かまへて御恨有へからすと申されかたしけなくも御頸を安積給はりて御狩衣の袖につみ奉り大門小門さしかため彦次郎殿を大將にて喜多野浦上安積彦五郎をはしめとし而大剛の武者七八十人御座敷の御供の大名に切てか、りけれともかねてより御なさけなききみにてましますは心をよせすみみなおちゆかせ給ふ

義光物語云畑屋の城にては宮邊修理亮粉骨を盡し而五兵衛父子を討取上杉殿御威に預けたり去は此城も他の勢を不交し而攻落ん事本望なる間急き攻懸らんとて詮義區々成所へ城中の勢大門小門押ひらき大山も崩る、計に鯨波をあけ打て出ければ云々

○四足門

長祿二年以來申次記云正月十七日御的始四足之御門邊より着座人數事三職以下國持衆并細川陸奥守末野島山次郎云々

應仁記云勝元ハ一色引退ク上ハ兼テ内談セシ如ク公方ヲ可致整固トテ翌日ニ遂ニ出仕ヲ御旗竿ヲ申下シテ四足ノ御門ニ御旗ヲサシ擧テ誠ニ用心キヒシク人ノ出入リ

止ケル  
聚樂第行幸記云上達部殿上人便宜の所にやすらひ給ふに  
殿下御車四足の門へいらせ給ひ御車よせにてをり給ひま  
うのはりたまふ

按、四足門略して四足とのみいふなり

○四足

家中竹馬記云勝定院持御代に承國寺殿持御出仕始の先例  
と云々其御時之儀古老の申傳たるは土岐は有子細家也  
四足より出仕あるへさよし上意にて四あしより御出仕と  
云々は御面目云々

○棟門

源平盛衰記云 旋風 六月十四日旋風オヒタ、シク吹テ人屋  
多ク顛倒ス風ハ中ノ御門京極ノ邊ヨリ起テ未申ノ方ヘ吹  
持テ行平門棟門ナトヲ吹抜テ四五町十町持テ行テ抛テナ  
トシケル上ハ桁梁垂木々舞ナトハ虚空ニ散在シテコ、カ  
シニコニ落ケル

吾妻鏡云建長三年五月廿七日丙辰今夕西冠南風惡由比濱  
之民居焼亡延御所之南ニ到隣人家一則南面棟門之災難今  
之宮中希有而道餘災云々

殿棟梁高造リ雙テ奇麗ノ壯

觀ヲ逞クセリ

應仁記云 五種 室町殿ノ唐門

ト四足ノ間新造有テ青蓮院

妙法院三寶院聖護院南都ノ

門跡一人被レ出テ五種ノ法

ヲ行レケル

大的體拜記云介添弓矢を渡

事御所の唐門の外にて御門

よりちと南にて受取て内へ

參る也

板坂ト齋慶長記云慶長四年

冬島津龍伯と家康公知人に

御なり被レ成度と被レ思召

(中略)翌年御振舞可ニ申上

と冬より御約束被ニ申上ニ御

殿をたて又ふたいのやうな

る座敷をたて被レ申候秀吉

公をも可レ申請と御成門た

てられ候か秀吉公不被レ爲

てられ候か秀吉公不被レ爲

又云弘長三年七月十日戊子被レ立御所門  
御璽渡御記云元弘元年十月六日今日御璽自ニ六波羅亭  
可有渡御禁中ニ可ニ參向ニ之由蒙レ催問未刻許先參ニ仙  
洞ニ祇候行事辨房光奉行職事定親等同祇候西半刻兩人相  
伴參ニ向六波羅南方ニ於ニ釘貫外ニ下車入ニ棟門ニ昇ニ中門  
廊

八島草紙云被まる山のふもとにむねかたかき家あり此  
家に立こえ尚とらはやおもひほりのふるはしうち渡り  
おひをはいくわによせかけ云々

○唐門

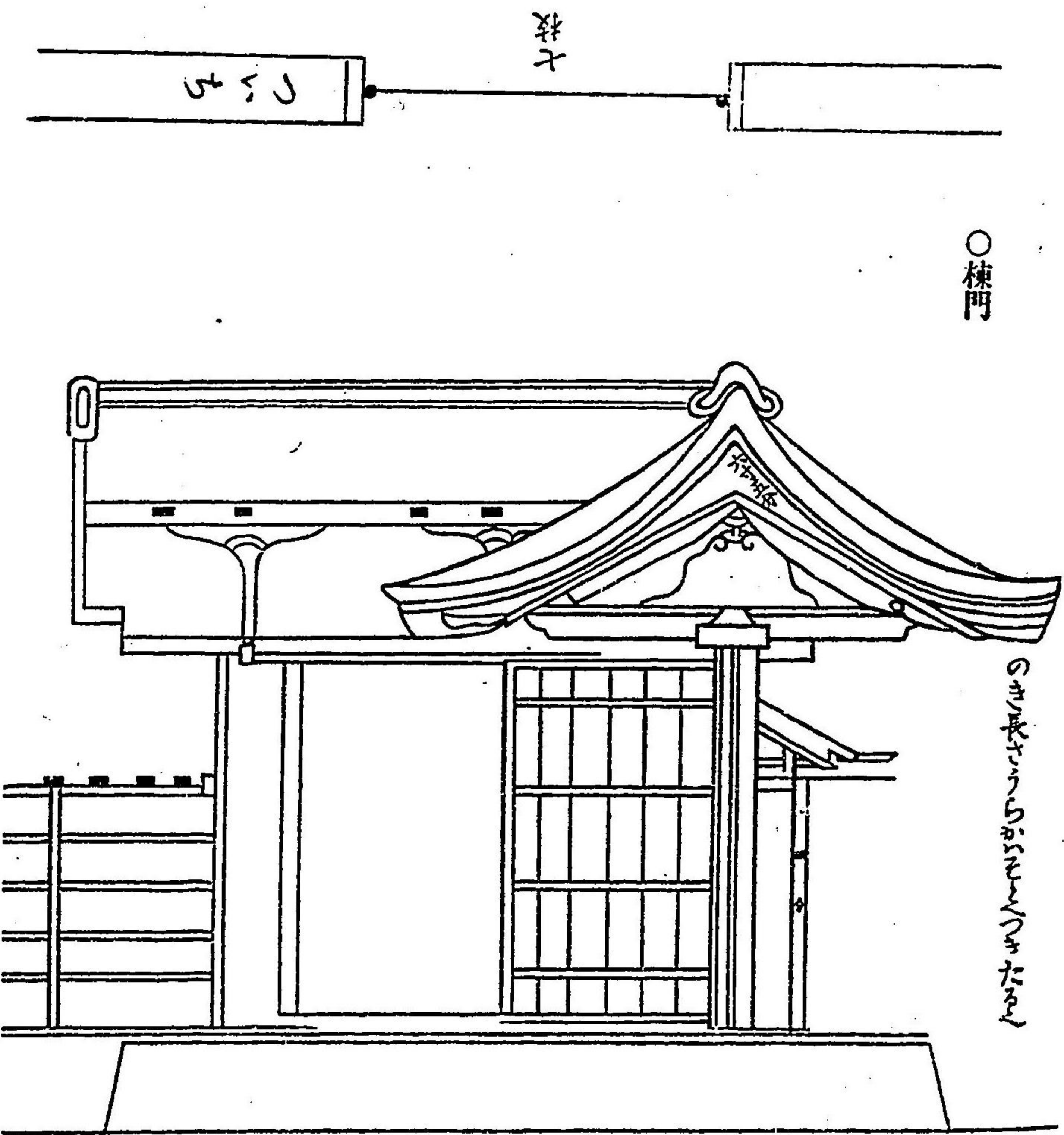
吾妻鏡云建長二年十二月十一日壬寅幕府南庭連夜狐吟今  
夜大番衆中筑後左衛門次郎知定代官男以ニ引目ニ射之仍  
走ニ出於東唐門ニ吟聲到ニ于比企谷方云々

○唐門

又云正嘉元年二月二日戊午將軍家御ニ參鶴岡八幡宮ニ寄  
御車於寢殿南面ニ土御門中納言候ニ御簾ニ御出西ニ  
唐門

太平記云 執事兄弟 常ノ法ニハ四品以下ノ平侍武士ナントハ  
關板打ヌ舒臂ノ家ニタニ居ヌ事ニテコソアルニ此師直ハ  
一條今出川ニ故兵部卿親王ノ御母堂民部卿三位殿ノ住荒  
シ給ヒシ古御所ヲ點シテ棟門唐門四方ニアケ釣殿渡殿泉

のまき長やうららひとてつきたる



○棟門

軒

5 5 J

成御他界候へは唐門をひらき被入候古風にて殊勝と人々申候

○藥醫門

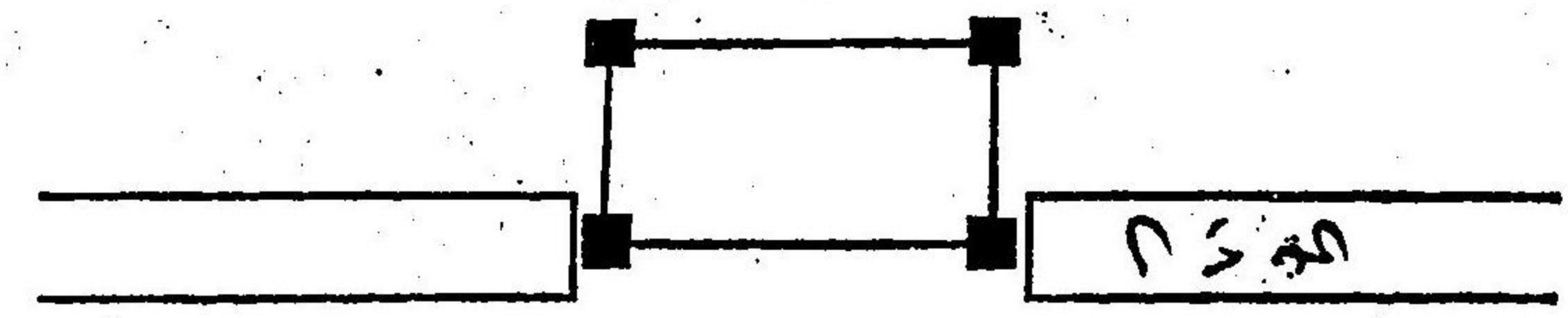
庭訓往來云早四方構大堀其内可意築地棟門唐門者有斟酌之儀於平門上土門藥醫門之際可相計之

應仁記云洛中大奉行頭人ト奉公外様ノ大名家々ノ殿ツクリ注サントスルニ際限ナシ或ハ藥醫平門ノ大名ノ内ニ至ル迄凡六七千間ハ左アラントソ覺ル

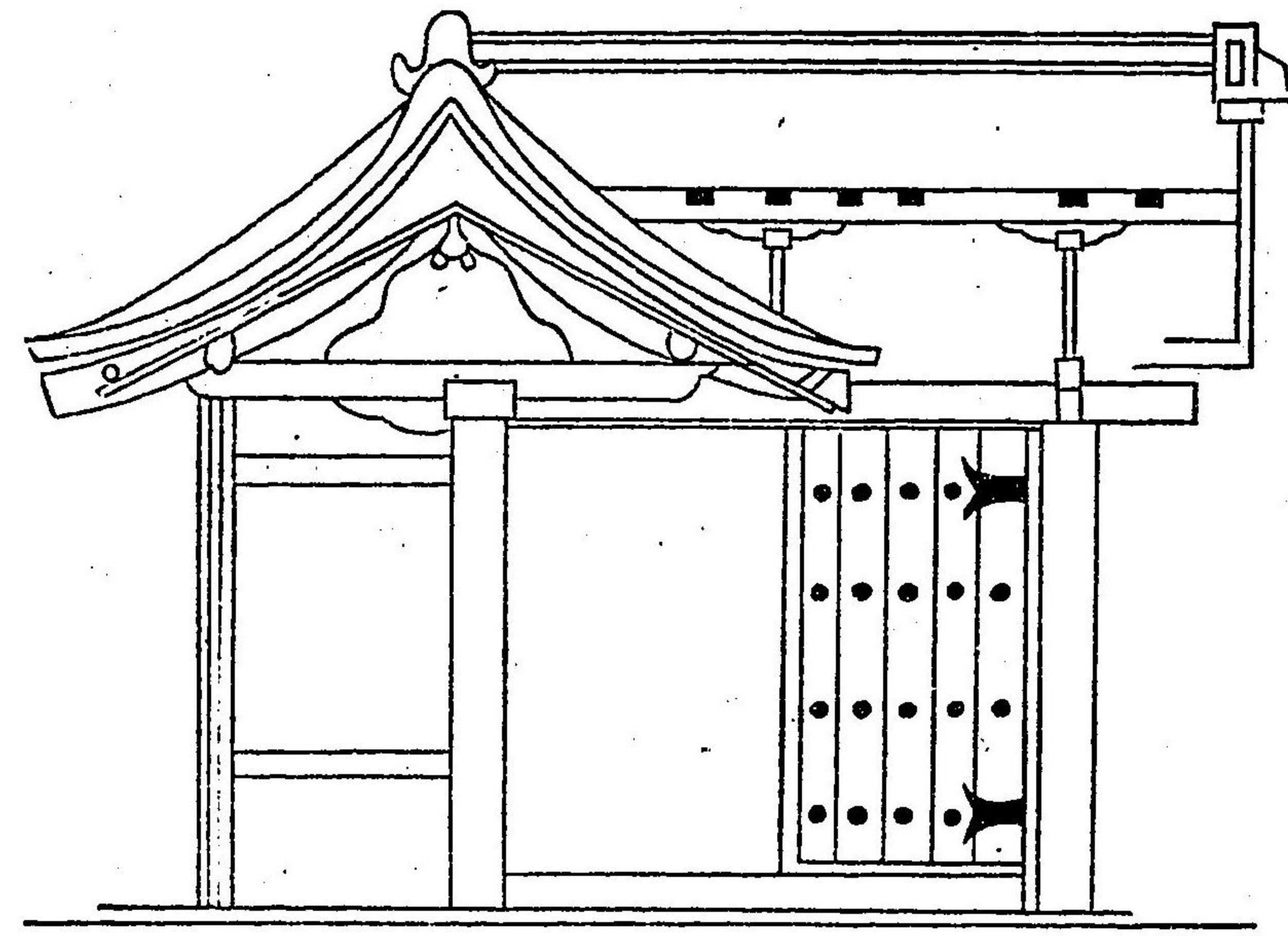
○上土門

齋藤親基記云文正元年七月廿八日琉球人參洛當朝代六號長史於御寢殿庭前三人懸御目三拜庭鋪席女中衆御見物御供東之御縁祇候走衆六人上土門南候了

應仁記云大名ノ家ツクリ吉良石橋澁川先ツオキテ武衛細川畠山



○藥醫門



名一色六角ハ上土門ヲ立ニケル

海人藻芥云武士ノ家ニハ不造檜皮屋皆板屋作ナリ然近年稱將軍家渡御ノ在所各構檜皮屋畢又上ケ土門ヲ立ル輩少々有レ之云々

○平門

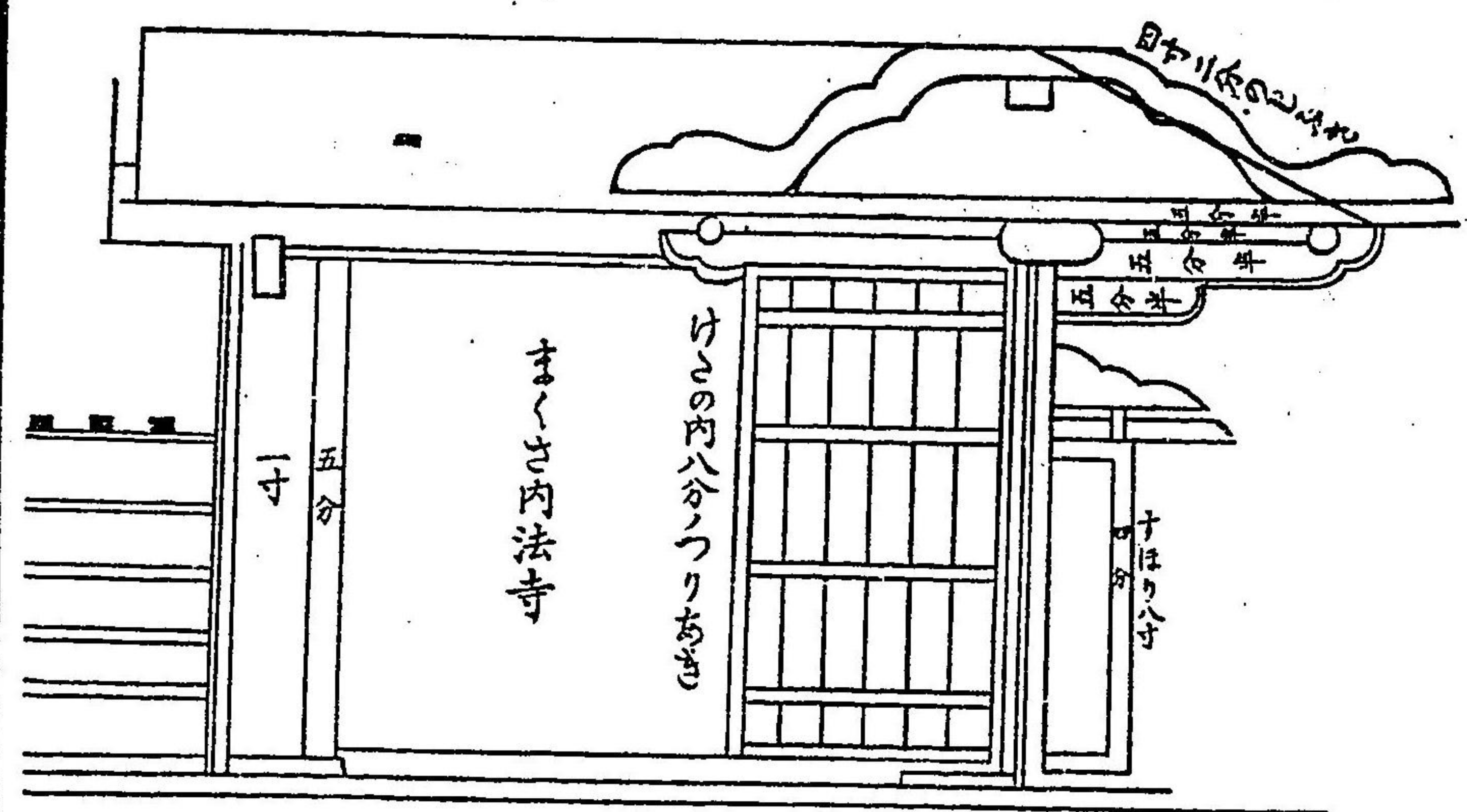
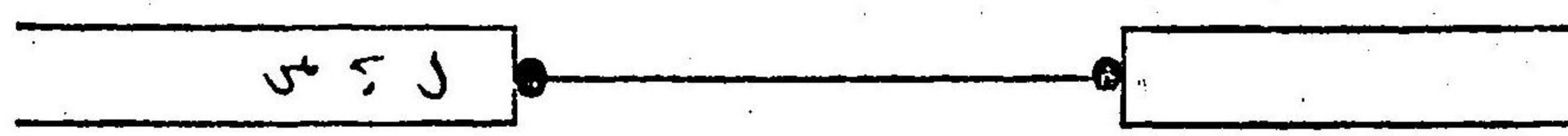
吾妻鏡云建長四年七月九日辛卯今日新御所門上棟亦當時御所相州壞南面平門始被新造門是相州御沙汰也

又云文應元年三月廿一日戊子戌寇御息所入御先寄御輿於東御亭相模大檜皮寢殿妻戸東御方被參儲相州武州被候之次自同西門出御雜色二人取松明前行町大路南行人御所東門棟經東北庭將軍家於東侍密々御覽云々

承久軍物語云はうくわんのしゆく所はたかつちよりは北京こくよりは西なり京極おもてはむなもん平門にて大もん也たかつちおもては土門にて小もんなり

○冠木門

○上土門



應仁記云洛中大機條冠木門ノ武士方ハ讃州相模土岐京極能登

美作兩大夫備中ノ守護因幡守護和泉兩守護淡路守護大館

宮樫伊勢武田大野大夫甲斐ヤ織田畠山ニハ播磨守中務少

輔遊佐ソアル細川方ニハ右馬頭下野守仁木ノ一族ニ五郎

少輔ト葦原トサテ京極ニ加賀守黒田トコソ聞ヘシ

○土門

吾妻鏡云寛喜二年六月九日酉尅雷落ニ于御所御車宿ニ云々

後藤判官下部一人悶絶則繩ニ進出ノ自北土門一畢及ニ戊尅

死云々

又云嘉禎二年十二月十九日壬寅亥刻武州御亭御移徙也日

來御所北方所被ニ新造一也被建ニ檜皮膏屋一南門東脇尾

藤太同西左衛門尉同西太田次郎南角政方兵衛入道北土門

東脇萬年右馬允同西安東左衛門尉同并南條左衛門尉宅等

也

承久軍物語云繪所まぢやのやうなる所につちかまへもん

二つありついちのうへにやくらありやくらの内に兵四五

人弓をいるところよせ手馬にのりてあまたありくろきよ

ろひきたる男あし毛馬に矢をいたてられたる所云々

○不明門

鎌倉年中行事云御築地ノ内ハ方四町也大御門并小門何モ

ニ差違々々算ヲ散セル如ク臥タリケリ

又云清氏叙清氏此上ハ陳シ申ニ言ハナシ今ハ定テ討手ヲ

ソ向ラルラン一矢射テ腹切ラントテ舍弟左馬助頼利大夫

將監家氏兵部大輔將氏猶子仁木中務少輔イトコノ兵部少

輔氏春六人中門ニテ武具ヒシノト堅メ旗竿取出シ馬ノ

腹帯ヲ堅メサスレハ重恩新參ノ郎從共此彼ヨリ馳參テ七

百騎ニ成ニケリ

鎌倉年中行事云中門ハ御二間之御妻戸ノソハ御車寄ノ左

ノ方ニ在リ御祝之時御劔御具足弓征矢沓行騰モ御中門ヨ

リ持テマカリ出テ持參申也

永享九年十月行幸記云御路東洞院を南行中御門を西行室

町を北行武者小路を東行今出川を北行北小路を西へ行室

町を北行

蟻川親元記云寛正六年十二月廿一日甲午攝家已下公家御參

賀自ニ大門ニ入御中門ヘ入中之武庫於ニ御車寄ニ御申次少々

貴殿ヘ御禮太刀金云々

文明十一年記云正月十七日(中略)東向之中門ヘ御出成テ

御見物

隨兵日記云大將先よろひひた、れに我家の紋をぬひもの

に織付着すへし但四のく、りを入へし次よろひを着すへ

南向也東西ニモ御門アリ不明ノ御門モ西ニアリ

○中門

平家物語云土佐房判官されはこそとて大刀取て出給へは

静させな加取て投懸奉る高ひも計して出給へは馬に鞍置

て中門の口に引立たり判官是に打のり門あけよとてあけ

させとやノと待給ふ處に夜半はかり土佐房ひた甲四五

十騎惣門の前におしよせて関をとつとを作りける

吾妻鏡云建保元年七月廿三日壬戌新造御所事有ニ其沙汰

今於ニ御前指圖少々有ニ被改之所々一今度可被立ニ中

門之由云々

同脱漏云嘉祿元年五月三日癸亥ニ品御方鱧板中門并織戸

可被立之由有ニ其沙汰一然夏季可有ニ其憚一哉否武州以

御書ニ令問ニ陰陽師ニ給入ニ六月一而後鱧板可被造云々

太田康有記云建治三年十二月二日晴相太守賢息御元服相

太守已下着ニ座子庭一中門以南南北行車宿前東西行(中略)

一御馬栗毛ニ鹿毛ニ河原毛皆被置ニ銀鞍一自ニ西侍妻一被

引ニ向中門與ニ西侍東南角一

太平記云頼良同加様ニ大手ノ軍強ケレハ佐々木判官カ手

ノ者千餘人後ヘ回テ錦小路ヨリ在家ヲ打破テ亂入ル多治

見今ハ是マテトヤ思ケン中門ニ並居テ廿二人ノ者トモ互

し刀をさし上帯をしめ次に中門に打て出て太刀をはき次

に廿五矢に切符又大中黒の羽の付たる矢をおふへし

軍陣閉書云出陣歸陣の時は東よせのつまとへ可出入一也

さる間しゆてんと中間のあはひに妻戸一ツ有あひた妻戸

二ツを出入する也

清正記云ぢしんゆると則清正おきあかり二百人の足かる

にてこもをもたせ侍とも召つれふしみの御城へ馳行て太

閣様御座候邊まで参らる(中略)主計高藏主へ申されしは

夜中にはつらなる體に候條中門には我等をつけ置申へき

と申さる

按、大門の内庭より寢殿の前庭に入るへき門を中門と

いふなり

○屏中門

吾妻鏡云建仁二年九月十五日丙辰將軍家又出ニ御于石御

壺屏中門内ニ召行景一以小鞠一令争ニ勝負一給云々

又云建保元年四月七日戊寅於ニ幕府一聚ニ女房等一有ニ御酒

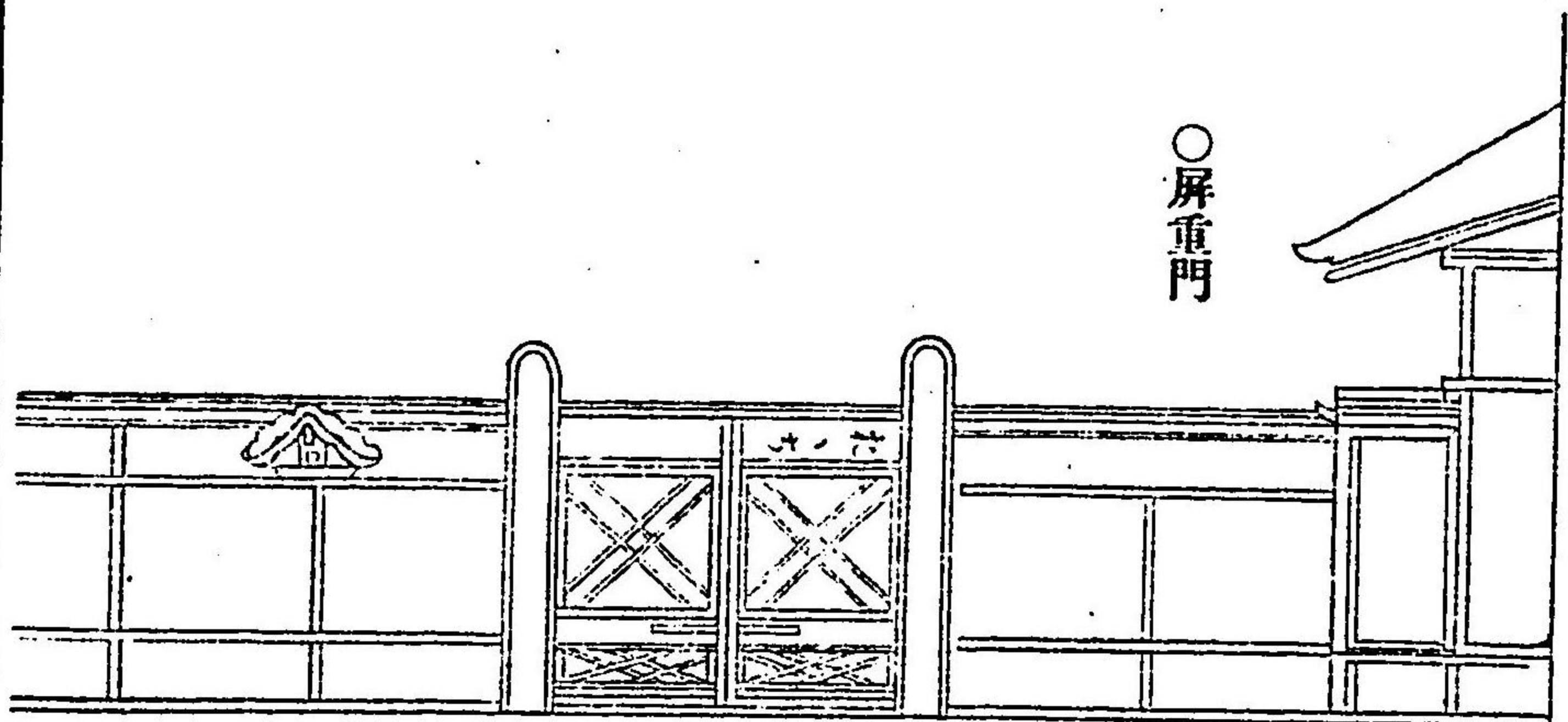
宴一于時以ニ内左衛門尉筑後四郎兵衛尉等一併ニ御屏中門

之砌一將軍家自ニ藤中一御覽召ニ兩人於御前縁一給ニ盃酒一

又云康元二年九月十九日丙午申尅將軍家御沐浴陰陽少允

晴宗候ニ御身固一陰陽醫師權侍醫長世賜ニ祿云々於ニ東屏

中門之内有<sub>二</sub>此儀<sub>一</sub>  
 常徳院殿御乘馬始  
 記云御馬めさる、  
 間は御所様御中門  
 より御出ありて御  
 座ある也管領へは  
 中門より南西のへ  
 いのきはに被<sub>レ</sub>畏  
 也云々  
 諸大名衆御成被<sub>二</sub>  
 申入<sub>一</sub>記云斯波殿  
 への御成に限り屏  
 中門の内にて御馬  
 を被<sub>レ</sub>懸<sub>二</sub>御目<sub>一</sub>也  
 屏中門の内と申は  
 おもては廣庭にて  
 其奥に屏中門あり  
 其内の事也是寢殿  
 の庭なり



○屏重門

大内問答云三職の御衆御出の時は御縁又は庭上迄も可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>出向<sub>一</sub>候也同御歸りの時は御縁にて一度庭上にて二度以上三度の御禮たるへし但屏中門までも可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>送申<sub>一</sub>候  
 按、屏に設たる中門なる故屏中門といふ屏重門とも書は上の屏といふに引かれて中はおのつから濁らる、か故なり又中をつめて平地門ともいふなり三好亭御成記云壁中門といふことあり屏中門のことにそあるへき  
 ○平地門  
 今川大雙紙云よめ取の時の火合せをば平地門の脇にて二人の役者ちやうちんより取出してたかひに三度執ちかへたとぼす也扱らつろくは白かるへし  
 萬しつけかた次第云公家方か又貴人などのわかところへ御座候はんときへいちもんまでまかりいてつくは候てしやうし申てゑんまで御あかり候は、ゑんのきはまてまわり候也  
 ○壁中門  
 三好義長亭御成記云御馬之事壁中門ヨリ被<sub>レ</sub>成可<sub>レ</sub>然ノ由談合候へ共見物群集不<sub>二</sub>合期<sub>一</sub>候間冠木門ヨリ引申され候

○唐塔

吾妻鏡云建長四年八月廿二日甲戌法印隆辨於<sub>二</sub>御祈禱道場<sub>一</sub>一寢之間感<sub>二</sub>得靈夢<sub>一</sub>之由相州被<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>上于御所<sub>一</sub>云々小童二人<sup>各著唐裝束</sup>面赤衣青自<sub>二</sub>御所南面唐塔<sub>一</sub>退云々  
 太平記云<sup>左兵衛督</sup>師直ハ夢ニモ可<sub>二</sub>思寄<sub>一</sub>事ナラネハ若黨中間ハ皆遠侍大庭ニ並居テ中門ノ唐垣ヲカケヘタテ師直只一人六間ノ客殿ニ座シタリ云々

○築垣

古事談云伊豫入道頼義於<sub>二</sub>向堂<sub>一</sub>修<sub>二</sub>逆修<sub>一</sub>之間或日義家聽<sub>二</sub>聞之<sub>一</sub>中間郎等一人出來義家カ耳ニサ、ヤイ事ス聞<sub>レ</sub>之有<sub>二</sub>忿怒之色<sub>一</sub>歸<sub>二</sub>向宿所<sub>一</sub>爰入道呼<sub>二</sub>郎等一人<sub>一</sub>云左衛門尉有<sub>二</sub>怒氣<sub>一</sub>歸畢何事ノアルソ見テ可<sub>二</sub>歸來<sub>一</sub>云々使歸來云只今御キセナカヲ被<sub>二</sub>取出<sub>一</sub>テツラヌキタテマツリ御馬ニ被<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>鞍之間也云々頼義サレハコソ怒ヌレハ眉髪カミサマニアカル也トテ又以<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>云何事也トモ此修善殘<sub>二</sub>今一兩日<sub>一</sub>也結願之後イカナル事モセラルヘシトテ門ニ鎖ヲ指廻テ築垣ヲ超テ可<sub>二</sub>歸來<sub>一</sub>之由示テ遣ケリ使如<sub>二</sub>云指廻テ鑑ヲ取テ歸了義家聞<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>テ云ヲシノ鞍轡ノミツ、キニテアケヨト云テ即アケサセテ打出畢

○築地

吾妻鏡云嘉禎二年五月廿四日己卯新造御所築地七月中可<sub>レ</sub>終<sub>二</sub>功之旨被<sub>レ</sub>定<sub>一</sub>之佐渡守基綱藤内大夫判官定員爲<sub>二</sub>奉<sub>一</sub>行<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>  
 又云建長四年六月十日壬戌御所築地以下事被<sub>レ</sub>催<sub>二</sub>諸御家人<sub>一</sub>云々  
 又云正嘉元年九月廿四日乙亥依<sub>二</sub>地震<sub>一</sub>御所南方築地壞也來々月一日大慈寺供養以前可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>築地<sub>一</sub>否有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>云々  
 沙石集云用心ノ爲ト仰候ヘトモ泰時運蓋ナハ鐵ノ築地ヲツキタリトモ助リ候ハシ運有テ召使ハルヘクハカクテ候共何事カ候ヘキ云々  
 元徳二年叡山行幸記云山門六波羅へ寄へきよし聞へありとて六波羅に京都の武士はせ集る築地の上に塙楯をかき門戸かたくとちて用心しける程也  
 庭訓往來云御館造候事不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>各別作事<sub>一</sub>奉行早四方構<sub>二</sub>大堀<sub>一</sub>其内可<sub>レ</sub>用意築地  
 室町殿物語云こ、に高橋作右衛門光範と云人あり器量骨柄いかめしく力ありて一心の至剛なる事凡世にたくひなし兵法は我朝にあるほとの家々の奥儀をつたへ取手は竹内の極意をきはめ此ほか十文字長刀かまことちなと家々

の秘奥をかくせり大のをとこといへともおほきなる雨こしを帯しなから八尺のついちをあなたこなたへ自由に飛こゆる

蝮川親俊記云天文八年三月十三日巳辛貴殿御普請中路修理築地五笈築之

○芝築地

太平記云足利殿者御孫村 則國人馳参條六波羅ノ館ヲ中ニ籠テ河原面七八町ニ堀ヲ深ク掘テ鴨川ヲ懸入タレハ昆明池ノ春ノ水西日ヲ沈テ淵淪タルニ不レ異殘三方ニハ芝築地ヲ高ク築テ格ヲカキ雙ヘ逆木ヲ重ク引タレハ鹽州受降城モ角ヤト覺エテヲヒタ、シ

伊達日記云郡山窪田ノ間ヘ働候敵ノ人數引返山玉山ヨリ段々ニ押備ヲ立一戰ヲ持懸候ヘトモ御無人數ニテ合戰大事之由何モ申サレ候間我等備ヨリ一人モ不レ出候故合戰無レ之被引上候陣場ノ前ニ用水堀御座候ヲ當ニ取其日ハ陣屋ヲモ不レ懸二重ニ五尺アマリニ芝築地ヲ付明日働可有之カト相待候

奥羽永慶軍記云佐竹與伊達 安積合戰條伊達方ニハ思ノ外小勢ナレハ爰彼ニ見セ旗ヲノミ押立大勢籠城ノ體ニシテ軍延引スルマニ陣ノ前ニ芝築地ヲ一丈餘ニ築キ矢羅井虎落ヲ結六月

十六日ヨリ同十八日迄對陣ス

○釘貫

劔璽渡御記云元弘元年十月十六日今日劔璽自六波羅亭可レ有渡御禁中可レ參向之由蒙催問未尅許先參仙洞祇候行事辨房光奉行職事定親等同祇候西半尅兩人相伴參向六波羅南方於釘貫外下車入棟門昇中門廊

應仁記云勝元方 峠起條細川方ト京極方トハ一人モ不レ出仕日々夜々ニ交合シテ内談評定區々ナリ（中略）先要害ヲ急ヤトテ面々ニ堀ヲホラセ屏ヲ附サセ城カマヘシケレハ京童トモ山名方ノ者共是ヲ見テ心得ヌ堀屏カナ賊後ノ弓ノ要害トテツ咲ヒケル山名ト勝元ハ聲ト勇ノ事ナレハ日比ノ兩家下々迄モ軒ヲ双ケル處ニ俄ニ隔心シテ屏ヲ間ニ附釘貫ヲサシテソ有ケル

蝮川親元記云文明十二年三月十六日聰明殿より御使伊賀 清孫右子細者上之御所南の御くきの番事堅被仰出候間内々領掌申小川くきの番事をも勤申候兩所共仕候事迷惑仕候へ共面々あまた御變斗候間是をは御免も有て以此番衆上之御所御くきの番を仕候様被御取合候は可レ爲レ祝着候委細注文にて申候御返事注文披見申候被仰出候奉行方へ此分可レ被レ傳候

三河記云長曾我部をは八幡にてとらへて高手小手にいまして二條の駒よせしはり付てさらし給ふ

按、駒寄は小間寄にて論定すへし

搦糞鈔云町々ニ有城戸ヲクキヌキト云歟文字如何クキヌキト云也平家ニモ成経歸洛ノ時父ノ基ニ參リテ垣築クキヌキセサセト書リ字ニモ釘貫ト書ク人ヲ登セシトテ釘ヲ打通根ヲ不レ返故ニ釘貫ト書歟造作ノ具ヲハ釘抜ト書拔ハ蒲八反擡也ト釋セリ擡ハ達卓反引也拔擡也ト云ヘハクキヲヒキヌク義也彼ハ釘ヲ貫ク心也名寄ノ歌ニ曰守ル人ハマタツタナキニ河口ノ關ノ釘貫早クチニケリト侍リマダツタナキニトハ拙ヲ萬ニヨセタリ萬ハ未タカ、ラヌニハヤ朽ニケルト云ナルヘシ

按、釘貫は堅木に穴を穿りて横木をく、らせぬき通したるか故の名にて釘貫と書くは例の字訓を假たるなり搦糞抄に釘を打通し根を不レ返といへるはひかことなり古に久幾といひし例有

○駒寄

藤葉榮衰記云源賀川 合戰條城中ニテハ兼テヨリ大手搦手ノ門ノ向ヲ深ク掘リ少モ障ラハ崩ル、様ニ兩方ノ橋ニ本ヲ假ニ石垣ニ築石ノ奔ラヌ様ニ留木ヲ立其木動クカ横木ノ留ヲ少モ踏下ハ石垣一度ニ崩レ打殺サント統クリ拘橋ヲ渡シ簀ヲ掛ケ上ニ薦ヲ敷小砂散シ平ラケ橋ノ兩方ニハ芦萱ヲ以テ高サ六七尺ニ駒寄ヲ仕タリケル

### 武家名目抄稿第九十五册

塙檢校保己一編

#### 居處部二十

○本所

吾妻鏡脫漏云嘉祿元年十月廿八日乙卯御作事今年中可被途之由其沙汰治定畢外記大夫爲奉行云々今夕若君渡御于伊賀四郎左衛門尉朝行大御堂前家御騎馬御水干也駿河守大炊助三浦駿河前司同次郎後藤左衛門尉等供奉是可被破却御所之間爲御本所也

按、御本所とは本朝本國などいふかこく此所をもて御在所とするをいふ又御本屋ともいふなり

○本屋

吾妻鏡云嘉祿二年四月四日庚寅將軍有御方違可有渡御于小山下野入道生西家若宮大路之由有其沙汰彼家先年燒亡更新造之後未及入御可有爲何様哉之旨爲藤内大夫判官定員奉行被尋人々(中略)此上於被問晴賢文元等可有憚之旨一旦雖申之便宜邊無可被用御本屋之旨可有被有用之由亦申之云々

十間有間架其半鋪板敷其半爲厨有竈有炉器皿若干薪炭若干精米鹽梅之類若干皆具焉

伊達日記云七月十六日本丸計自燒ニ仕會津へ引除候地下人ハ思々ニ相除候我等ニ城請取可申由被仰付其日ニ罷越本丸ニ假屋ヲ仕候政宗公七月廿六日御出被成御覽候テ日カヘリニ被成候

賀越園靜記云山崎新左衛門尉 吉家對向安宅頃ハ神無月ノ末ツカタサヒシキマ、ニ皆人々打出テ見ハ(中略)雪ニ磨ケル月ノ影猶白山モ冷シク住ウカレタル越路ノ里馴テ住ムサヘイト、猶心ヲ碎ク折ナルニ況ヤ陣旅ノカリ屋ノ中櫓モ離モ構ハネハ風吹トヲス鏡ノ袖トチ重ネタル薄水云々

○長屋

長曾我部元親式目云侍中家居身上相應之家作仕表向塙長屋見苦敷無之様ニ仕并掃除等能可仕分限に過て結構成作事堅停止事

太閤記云秀吉於敵國成 要者之主かくて伊勢に令出張被出之要害をせさせ給ふへきと永祿九年七月五日大小の長屋十ヶ櫓十塙二千間柵木五萬本來八月廿日以前に仕立候へと作事奉行所に被仰出しに日限より先て出來せし

板坂下齋慶長記云細川越中守女房自害家内燒亡の由家康

○假屋

奥州後三年記云夜半はかりに將くん資みちをおこしていふやう武ひらこん夜落へしこ、えたる軍ともおのくすへしたるかり屋ともに火をつけて手をあふるへしといふ

源平盛衰記云宗遠僅小 大郎條土屋三郎宗遠ヲハ甲斐國ヘソ越ケル足柄ノ山ニ關居スハリタリト聞テ宗遠夜ニマキレテ通りケルカ見レハ平向ニ假屋打テ前ニ箒ヲ燒ク者ナラハ四五十人カ程ソ伏シタリケル如法夜半ノ事ナレハ關守リ睡テ驚カス能キ隙ト思ヒ拔足シテ下リケリ

吾妻鏡云養和元年七月廿日甲午鶴丘若宮寶殿上棟社頭東方構假屋武衛著御

又云建久四年五月十五日庚辰藍澤御狩事終入御富士野御旅館當南面立五間假屋御家人同連

大友興廢記云宗麟公 狩跡條御狩のため惟教馳走にて佐伯宮の内といふところにかりやをたてらる、そのけんつもり一御廣間十五間ハ八間一遠侍九間一御寢所五間一御臺所十二間ハ一御鷹部屋廿間一御馬屋二十一間御長屋六十間右かりやといひなからけつかうにあひと、のへらる、  
豐臣家譜云秀吉使造假屋于海邊廣數間長百數十間每

公味方に被參候衆の妻子大坂屋敷に被居候を城中に長屋を造り不殘とりあつめ候由

○小屋

吾妻鏡云文治四年十月廿日壬午景能此間於鶴岡馬場邊構小屋是爲警固宮寺也

賴印信正繪詞云同廿日武衛御陣ノ西ニ野田入道等忠陣中小屋ヨリ俄ニ出火シテ猛風黒烟ヲ延テ既御腕ニ及フ安土日記云天正六年十二月十一日惟任日向ハ直ニ丹波へ相働波多野館取巻四方三里カ廻ヲ塙柵ヲ幾重モ付サセ透間モナク塙際ニ諸卒町屋作りニ小屋ヲ懸サセ其上廻番ノ警固ヲ申付誠獸ノ道モ無シテ在陣也

播州佐用軍記云寄手惣勢上月表 山々へ取登條城ヨリ打出レモ寄手ハ出合トモセス普請ヲ止居タリケレハ城ノ者共只其儘ニテ引籠タリ兎角スル間ニ日モ暮近ク成ケレハ寄手モ小屋小屋エ引入リ箒火ヲ燒連用心ノ體ニ陣シタリ

大友興廢記云小牧の城 攻の條強兵衛尉に降參の緒方の武士ならひに之のひの者一旦の武略の和睦なればひとしほ勇氣をはけまし死を論し火をちらしせりあひた、かへし強兵衛か勢一所になりて雌雄を決すといへとも剛の勢にせり立てられ早過半討たり大手口的小屋ともを緒方に忍の武士と



も焼はらふ

板坂下齋慶長記云慶長五年七月廿八日五ツ時に三河守殿一番に小山へ御越其外不殘午前大將衆小山へ被致致參上候小山古城の内に庄屋居申候家を三河守殿廣間に御用ひおくに三間四方草のかりの御殿御つくらせ此廣間へ大將衆御あつまり座敷の内四方のすみく中座にて上意の仰出し本多中務本多佐渡守兩人なり三河守殿は此時は番所のこやへ御はいり御座候

○小屋懸

水野勝成記云岡田長門尾州本根城主(中略)かり屋に惣兵衛殿十郎日向親子かけつけうしけ口より押つめ候處に城より足輕を出して則追込天野五郎左衛門橋の下ニ少こやかけ仕候

板坂下齋慶長記云こや御在陣の内に家康公家中の人足利家の陣場にて水をくみ候何方の者と申候に下薦なればこたへあしく候哉らん利家の内の下人た、き候よしこなたの家中衆それを聞とりあへず大かた利家の陣所家中衆のこやかけへとりつめ候大勢にて候へは利家の内衆も武具着せぬ計にて鐵炮に火をはさみ候はん用意おひた、しき事に候

○根小屋

甲亂記云武田相模彼下會根内々含逆意偽テ申ケルヲ信ト被頼ケル事は相州ノ運命ノ盡處也既小屋之根小屋迄被ニ打結ニ更ニ城ヲ渡可申模様ハナク剩逆心ノ企露顯シケル間信豊客ニ向テ宣ケルハ下會根相偽テ申ケルヲ令ニ信用ニ是迄來事偏信豊カ窮運之至也所詮命ヲ縮ニ白及上怨ヲ酬黃泉下ニシカシ逆モ不逆所也サラハ城中へ攻入尋常ニ討死ヲ極ヨト下知シタマヒ信豊真先ニ進玉ヒケル間葛山右近甘利右衛門ヲ始トシテ義心金石ノ兵トモ切先ヲ双テ切テ入城中ノ者共俄ノ事ナレハ周章騒コト無ク限

○陣屋

高サ一丈餘ニ重ニ付其間ニ石ヲ入挿柄籠ヲ高ク上前ニ逆茂木ヲ引柵ヲ結川ノ面ニ大綱ヲ張亂杭打大石ヲ入橋ノ上ニ番ヲ居改ニ人ノ通ヲ一後ニハ諸國ノ軍勢陣屋ヲ作り並へ辻々ニ木戸ヲ立簀ヲ燒セ夜廻無隙廻リケリ

東亂記云今度義元ノ代官トシテ甲州晴信出勢ノ富士ノ大宮通リセコヒンナアツハラヲ通リテ富士河ノ端々賀島ノ柳島ト云所ニ加藤下野ト云地下ノ侍ノ屋敷ヲ陣屋ニ用小山田彌三郎馬場民部ヲ先陣トシテ大宮アツハラ邊へ足輕ヲ出合日々小矢軍ニ及フ

甲亂記云小山田出羽去二月諏訪ニ御在陣之砌(中略)如何ナル者カ仕タリケン跡部尾張守ノ陣屋ノ前ニ高札ヲ立テ無常ヤナ國ヲ寂滅スル事ハ越後ノ金ノ所行ナリケリイトヒコシイモセアフ夜ノ中ナラテ國ニ別ノ鐘ノ音ソウキ金故ニ眞實ニ耻ヲ大炊助尻ヲスヘテモ跡部成ケリ如此上下萬人此亂逆ハ只一兩人ノ重欲ノ深故也ト各批判ス

甲陽軍鑑云出動時食物服夜中從陣屋一只今合敵様出立打歸迄少不可油斷事

篁輪軍記云關東八ヶ國に上杉召抱の城四拾二ヶ城也其外陣屋と名添物成取立所廿三ヶ所有之候へ共八ヶ年の間信玄皆打取し事は云々

吾妻鏡云慶元二年正月十日壬寅御的始可爲來十三日一仍昨日射手十八人之中叶三清撰二分十人所被番五手也相觸之處各進奉云々其狀書様右各來十三日如法卯刻以前可被參東御門陣屋之狀依仰所廻如件

太平記云山門屏ノ上ヨリ見越ハ是コソ大將ノ陣ト覺エテ中黒ノ旗三十餘流山下風ニ吹シテ龍蛇ノ如クニ蹴リタル其下ニ陣屋ヲ双テ油幕ヲ引爽粧タル兵二三萬騎馬ヲ後ニ引立サセテ一勢一勢并居タリ

又云諸國方桃井本ノ陣へ打歸テ物具脱テ休ケルカ夜半計ニ些可評定事有トテ此陣ヨリ二里計隔タル井ノ口カ城へ誰ニモ角トモ不知シテ只一人ソ行タリケル(中略)陣ヲ並へタル外様ノ兵共是ヲ聞テサテハ桃井殿被落ニケリト騒テ我モ何クヘカ落行マシト物具ヲ著モアリ捨モアリ馬ニ乘モアリ乘ヌモアリ混ヒシヌキニヒシメク問燒捨タル火陣屋ニ燃着テ燎原ノ熾盛也

備前文明亂記云互ニ洛中ヲ城郭ニ構へ既ニ十餘ケ年ニ及テ合戦タユル間ナシ是ニ依テ主上モ室町殿へ臨幸アリシカハ則禁中ハ武士ノ陣屋ト成梶井殿三寶院妙法院諸門跡諸王山モ或ハ放火或ハ城郭トナル

別所長治記云三木城兵向城ト敵城ノ間僅ニ五六町ナリ塚ヲ

太閤記云山路將監 立善允思ふやう與平九八郎三州長篠に籠城し極運をひらく時爲の巢山の陣屋を焼立しかは武田が勢跡を焼立られ度に迷ひしなりあの要害の麓へ廻り下小屋を焼候へ去ほとならは敵跡を焼れ度を失て敗北せん事疑有へからず

安土日記云家康公御念ヲ入サセラレ(中略)御陣屋丈夫ニ數百間御屋形ノ四方ニ二里三里ニ柵ヲ付置

軍陣問書云征矢おひてよき程にては弓を人にも持せ又よせかけ置ことあるまじき也自然ちんやのうちにても持なから可座なり弓物にもあたはそはにたて、可置左様の時は外にて人に持せもすへき也わか座するそはにてもあれ下に横にふせて置事あるまじきなり

○陣小屋

義殘後覺云或時ニ五月半ノ事ナリシニ五月雨ノ痛ク降續テ鎧旗指物モ一シホリニ成テ先行先モ見ヘヌ程ナルニ諸軍勢行暮レテ廣々トアル野原ニ陣小屋掛ル方便モナラス云

矢島十二頭記云和州殿は五郎とのと切結終に五郎とのに討れ給ふ付添侍も十五人討死す其より陣小屋へ火をかけて新庄へ押向勢へ後より押付かんと被成候

一日一夜宛番役を勤

播州征伐記云爲塞ニ三木魚住通路一始ニ君峯一廻之付城五六十其透ニ立ニ番屋一堀柵亂杭逆茂木表引ニ荆棘一裡凌堀

○番所

細川亭御成記云六郎殿様者御同伴に被御參候間奥の御番所の其奥の御さしきにて御喝食と御一所に御湯漬御點心をわり也

甲陽軍鑑云近習之輩於ニ番所ニ縱雖爲ニ留守ニ世間之是非并高聲可レ令停ニ止之

義光物語云義光公へつかはしたる使者かへり急き通し候やうにと申來りける間與惣右衛門罷出木戸をひらき御通り候へとて通しけり其時立より番所の體を見たまふに掛ならへたる鐵炮の内誠の鐵炮も有又は棒なとを鐵炮のことくにみせ火繩をく、り付たるも有

太閤記云名護屋山里二之九御番所御牧勘兵衛尉同くの木作番所同人

惟任征伐記云將軍信長御運盡所頃天下靜謐之條無ニ御用心一偶御供之人々洛中所々打散作ニ思々遊興ニ御番所漸扈從衆不レ過三百人ニ者也

續武家閑談云細川忠興入道三齋陣小屋を取をきに致一間半に五間の小屋を馬貳駄につくるやうに出來す柱は樅木を細くし鐵を以て石突にしかけ折ぬやうに拵上も四方も皆桐油布也在所は勿論京江戸にもこしらへ置

○直屋

吾妻鏡云正嘉二年八月廿日丙申御教書云近日出羽陸奥國夜討強盜蜂起間往還之聲有ニ其類ニ之由風聞尤不便是偏郡郷地頭等背ニ先御下知ニ無ニ沙汰ニ之所ニ致也甚無ニ其謂一其郡知行宿々建ニ直屋ニ令ニ結番ニ殊可レ令ニ警固ニ也云々

○番屋

建武年間記云陣中法條々番屋專爲ニ役人之沙汰一不日可ニ造畢

永享九年十月行幸記云御路東洞院を南行中御門を西行室町を北行武者小路を東行今出川を北行北小路を西へ行室町を北行室町殿の四足に至る室町殿番屋の南の邊にて御下馬此時御駕を取せ給御懸なけり地下前驅閉路より御馬の所へまゐる

甲陽軍鑑云横目集萩原豊前守久保田助之丞原大隅志村又右衛門中村彌左衛門河野但馬石坂勘兵衛萩原五左衛門山本土佐久保田監物右十騎は御中間頭也一人に付て三十人御小人御中間御道具衆よりこを預り御構大手の番屋にて

増補家忠日記云慶長七年七月東丹波守其子所左衛門尉馬場和泉守其子新介大窪兵藏等首將トシテ佐竹守人ヲ招キ集一撥ヲ企水戸ヲ窺フ于レ時大窪兵藏カ家人潛ニ越中ニ忍ヒ入ラントス松平五左衛門カ番所ニ於テ是ヲ生捕テ詰問スルノ處ニ彼カ懷中ヨリ一揆ヲ企ツルノ由廻文ヲ索メ得タリ云々

東武實錄云寛永六年己巳去年ヨリ當年ニ至テ江戸辻々ニ於テ往來ノ者ヲ故ナク殺害ス是ニ依テ此春江戸中辻々ニ番所ヲ立テ是ヲ守ラシム是ヨリ後猥リニ人ヲ殺ス事ナシ云々

○在番所

季瓊日録云延徳二年正月六日相公御不例一大事在今早々可レ被レ參由伊勢守白レ之云々乃調ニ東府ニ先往ニ調阿宅ニ以レ使尋ニ右京公ニ則在ニ松田對馬宅ニ返答云早々可レ參ニ殿中ニ乃調ニ在番所ニ云々二月十九日調ニ御所ニ奉公衆數十員在番所達ニ大館禮部ニ愚出頭之儀白レ之

○寄居番所

新田老談記云新田足利ヨリ態トタワケタル者ヲ出シ置テ慮外ヲサセ謙信カ心ヲ引見ルト覺エタリ先手ノ歩弓ニ申付一人モ不レ可レ逃其上寄居番所ヲモ撫切ニシテ可レ通ト

被仰ケレハ先陣ノ歩弓人はヲ承テ我先ニト押行追拂タ

○遠見番所

續武家閑談云六月上旬敵金山へ押寄長手口より北條房州  
田色山上及成田長康等千五百餘金鞍を鳴し攻寄る(中略)  
城兵は谷間の藪陰に待かけ散々に射立大石を落しかくる  
元來嶮岨と云進む事はす引取所焼山切通に傳へたる者  
共まきりに遠矢を射かけ石弓を放ければ長岡の廣場へ崩  
れ退くを新井由良前所に控たるもの共相圖して敵を取込  
火水に成て攻戦ふありさまを小金井四郎右衛門遠見番所  
よりこれを見て案内はまじりたり頻にかけ下り競す、む寄  
手彌敗北しけるか所々の落穴田畑の水堀へ走入人馬落重  
り死亡するもの若干なり云々

關八州古戦録云佐野小太郎宗綱討死録赤見内藏助富士大貫馬ノ口ニ馳  
リテ前夜ヨリノ深雪殊元朝ノ義ナレハ諸勢出陣ニ心染ズ  
就中今曉敵方遠候ノ番所ニテ早鐘ノ音聞エ申ス上ハ後詰  
ノ到來心元ナシ是非ニ於テ思召留ラレ然ルヘシト申シケ  
レ共云々

新田老談記云天正十一年極月廿九日ノ夜丑ノ刻ニ佐野勢  
發足シテ名草藤坂ノ寄居押寄(中略)赤見大坂富士源太ヲ

まてわり入とて痛はしや三枝勘解由左衛門正月十三日に  
腹をたて我等に申語申され候つる

○簀屋

吾妻鏡云仁治元年十二月十二日辛未洛中辻之簀屋用途事  
被定侍所處對捍之由依有其開隨多少可令充ニ  
造簀屋只可註申交名之由今日被仰六波羅云々  
貞永式目追加云仁治十一廿三評被召所領者所々訴訟  
無盡期歟可被召簀屋用途也但隨其所之多少可  
被召之縱令五十町所者可被召錢五十貫文也  
太田康有記云十二月廿五日晴番役并簀屋事奥州越後左近  
大夫將監兩人差代官可令奉行  
沙汰未練書云簀屋トハ在京人役所也

○役所

新式目追加云寄役所一致自由合戰事縱雖披群之忠  
不可被行其賞所證隨大將命可令進退由嚴密可  
被相觸九州守護并御家人以下輩也  
建武年間記云陣中法條々帶武具出入事衛府官并役所勤  
仕之輩者非制之限其外者一向可停止  
又云去年八月二條河原著書云町コトニ立簀屋ハ荒涼五間  
板三枚幕引マハス役所輒其數シラス滿々タリ

初申上ケルハ此度ハ佐野へ御歸陣可被成元朝ノ合戦ナ  
レハ歩弓物頭モ心勇不申様ニ相見エ候其上足利遠見番  
所ノ早鐘ノ音ケハシク相聞候後詰モ可來候間佐野方勝  
利不可有云々

○弓番所

甲陽軍鑑云平賀源心法師は大剛強の兵者にて既に力も七  
十人力と申ならはし候定て十人力もこれ有へし四尺三寸  
許の刀を常に所持仕大人にて數度のあらかなき働の兵に  
て候是を晴信公初陣に手柄にて討取たまふ云々平賀の源  
心をは石藏造にいはひ今にいたるまで大門峠に彼地藏立  
おかれ候刀は常に御弓の番所に源心か大刀とて御座候  
又云其後武かさ與一郎方々へありき志村金助か中間大剛  
者にて金助まあましたるを我等か仕出してくれ候故如  
此手おふたるとて島の湯などにて股の疵少のあとを諸  
人に見する故志村金助是をき、大なるいひ事になる(中  
略)さすかの飯富兵部も下にてさばく事ならずして御前  
さはきになる信玄公兩人を御弓の番所へめしよせられ左  
右のめやすをよませてきこしめし云々

又云信玄公御代には御弓の番所へやうく來るは八田村  
新左衛門信玄公他界したまふ三年このかた御くつろき所

太平記云赤坂城正成長崎カ厩ノ前ヲ通りケル時敵是ヲ見

ツケテ何者ナレハ御役所ノ前ヲ案内モ申サス忍ヤカニ通

ルント咎メケレハ正成是ハ大將ノ御内ノ者ニテ候カ道ヲ

踏違ヘテ候ヒケルト云捨足早ニコソ通りケル

又云千部破名越遠江入道ト同兵庫助トハ伯叔甥ニテ御座

ケルカトモニ一方ノ大將ニテ責口近ク陣ヲ取り役所ヲ双

テソ御座ケル

又云春宮選春宮幼稚ナル御心ニモ彼人々袖山ニ有ト敵ニ

知セテハ懸テ押寄ル事コソアレト被思召ケルニヤ義貞

義助二人昨日ノ暮程ニ自害シタリシヲ手ノ者共カ役所ノ

内ニテ火葬ニスルトコソ云沙汰セシカト被仰ケレハ云

云

又云新田義貞船田入道畏テ大塔宮ハ此邊ノ山中ニ忍テ御座

候ナレハ義昌方便ヲ廻シテ急ニ令旨ヲ申出シ候ヘシト事

安ケニ領掌申テ己カ役所ヘソ歸ケル

由良家傳記云平左衛門兩人家老まうかく存候と申て立な

から刀を抜申候處を後に罷在候隨心家人則討留申候其外

五拾騎計なる者にも役所を定五拾人宛大形討取申候

大友與廢記云氏政退湯水口には千葉新助其勢八十餘竹浦

口は北條陸奥守成田下總守壬峰上野守其勢一万餘如此

役所を定上方勢を禦さ、ゆへき爲に出しおかる、  
會津四家合考云兵部由凶徒モ今モ最後ノ軍ヨト火花ヲ散  
シテ防ケトモ四方ノ寄手一同ニ墾ヲ破リ逆茂木ヲ引除テ  
同時ニ攻入りハヤ役所役所ニ火ヲ懸散々ニ薙捨テケレハ  
云々

松隣夜話云矢倉ニアリケル小田カ役所ニ來リ刀根川ノ方  
ヨリ馬煙夥ク見エドヨミテ次第ニ相近キ候氏康公奥筋ヘ  
御手使候ヤト申ス

武家名目抄稿第九拾六册

塙檢校保己一編

居處部廿一上

○城

日本書紀云是時磯城八十梟師於彼處屯聚居之果與天  
皇大戰爲皇師所滅故名之曰磐余邑又皇師立詰之處  
是謂猛田作城處號曰城田

又云皇極天皇四年六月戊申中大兄即入法興寺爲城而  
備凡諸皇子諸王諸卿大夫臣連伴造國造悉皆隨侍

又云天武天皇元年七月甲午近江別將田邊小隅越麻深山  
而卷轡拖鼓詣于倉歷以夜半之街梅穿城劇入營  
中

續日本紀云文武天皇二年秋七月丁未修理高安城天智天皇  
五年築城  
也三年十二月甲申令太宰府修三野稻積二城

又云天平勝寶八歲六日甲辰始築怡土城令太宰大貳吉  
備朝臣眞備專當其事焉

又云天平寶治二年十二月丙午徵發坂東騎兵鎮兵役夫及  
夷俘等造桃生城小勝柵五道具入並就功役三年九月

己丑勅造陸奥國桃生城出羽國雄勝城所役郡司軍毅鎮  
兵馬子合八千一百八十人從去春月至秋季既離郷  
土不願產業朕每念茲情深矜憫宜免今年所貢人身  
舉稅

又云天平神護元年三月辛丑太宰大貳從四位下佐伯宿禰今  
毛人爲築怡土城專知官少貳從五位下采女朝臣淨廷  
爲修理水城專知官

又云神護景雲元年十月辛卯勅見陸奥國所奏即知伊治  
城作了自始至畢不滿三旬朕甚嘉焉夫臨危忘生忠  
勇乃見街綸遂命功夫早成非但築城制外誠可減戍  
安邊若不哀進何勸後徒宜加酬賞式慰匪躬十一  
月乙巳置陸奥國栗原郡本是伊治城也

又云延曆七年三月庚戌軍糧三萬五千餘斛仰下陸奥國  
運收多賀城又輸二萬三千餘斛并鹽仰東海東山北陸等  
國限七月以前轉運陸奥國並爲來年征蝦夷也

日本後紀云延曆十五年十一月戊子朔陸奥國伊治城玉造塞  
相去卅五里中間置驛十一月戊申發相摸武藏上總常陸上  
野出羽越後等國民九千人遷置陸奥國伊治城

又云弘仁二年閏十二月辛丑征夷將軍參議從三位行大藏卿  
兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂奏言今官軍一舉寇賊

無遺事須悉廢鎮兵永安百姓而城柵等所納器仗軍  
糧其數不少迄于遷納不可廢衛伏望置一千人充  
其守衛其志波城近于河濱屢被水害須去其處遷  
立便地伏望置一千人充守衛遷其城訖則留千  
人永爲鎮戍自餘悉從解却

三代實錄云元慶二年夏四月四日己巳出羽國守正五位下藤  
原朝臣與世飛驒奏言秋田郡城邑官舍民家爲凶賊所燒  
亡之狀去月十七日上奏厥後差權掾正六位上小野朝臣春  
泉文室真人有房等授以精兵入城合戰夷黨日加彼衆我  
寡城北郡南公私宅皆悉燒殘殺虜人物不可勝計此  
國器仗多在彼城舉城燒盡一无所取加之去年不登  
百姓飢弊差發軍士曾无勇敢望請隣國援兵勦力襲  
伐

扶桑略記云皇極天皇三年十一月大臣蘇我宿禰蝦夷并男入  
鹿起其一家於甘檜岡以大臣家稱曰宮門以入鹿家  
言谷宮門呼男女宅謂王子屋外作城構門傍作兵  
庫每門置盛水舟以備火災恒使力人持兵守家畝  
火山東穿地爲城起庫儲箭將五十人兵士繞身出入  
不離按城構を指すに城構とあり  
其文は檜の所に引たり

吾妻鏡云治承四年五月廿三日甲戌三井寺衆徒等構城深

溝可追討平氏之由會議之云々

又云九月卅日己卯新田大炊助源義重入道法名西臨東國未一  
接之時以故陸奥守嫡孫孫孫自立志之間武衛雖遣御  
書不能返報引籠上野國寺尾城聚軍兵

承久軍物語云よせては大せいにてみたれ入しやうの中は  
こせいなりければふせきた、かふにりをうしなひわつか  
七八人ありける兵もいぬいのかたのついちをのほりこえ  
ておち行ければいまはあつた三郎同四郎はかりのこりけ  
る

太平記云新將軍南東國勢ノ體思フニモ不似無左右敵陣

へ懸入シ共セス爰ニ日ヲ經彼コニ時ヲソ送リケルサラハ  
此方モ陣ヲ前ニ取り城ヲ後ニ構ヘテ合戦ヲ致セトテ和田  
楠ハ俄ニ赤坂ノ城ヲ拵テ三百餘騎ニテ楯籠ル福塚川邊佐  
良階當木岩郡橋本判官以下ノ兵ハ平石ノ城ヲ構テ五百餘  
騎ニテ楯籠ル

又云赤坂合此城三方ハ岸高クシテ屏風ヲ立タルカ如シ南

ノ方計コソ平地ニ繼キテ堀ヲ廣深ク堀切テ岸ノ頭ニ屏ヲ  
塗其上ニ櫓ヲ播双ヘタルハ如何ナル大力早態ナリトモ輒  
ク可責様ソナキ

又云將軍自筑紫白旗ノ城資落サレナハ自餘ノ城一日モ快候

大伴室屋大連發信濃國男丁一作城像於水流邑仍曰  
城上也としるされたる堤のことく聞ゆその所を城上

といふ故よしを明さんとて城像とは書れたるなり天智  
天皇紀に於筑紫築大堤貯水名曰水城と見えた  
るまさしく堤をさして城といへる也又柵をも城とおな  
しくキと讀みたるところ往々見えたりかれこれを通は  
し思ふに土を築きもし木を構もして内外を隔るを古語

にキといひけるなり垣はかなたのかきりなる故  
カキといひ關はゆききをせくか故にセキといひ稻を藏  
る所をイナキといひ馬を牧ふ所をウマキといふの類と  
て其然るを知るへし近代是をシロといふことその義さ  
たかならず或説に苗シロ松シロ杉シロなといふシロと

同義にて城郭は兵士を集め置く料の所なるゆるシロと  
いふなり山城の國の體たる山打圍みて自然の城郭をな  
せるか故に山背を改めて山城の字を用られしも城にシロ  
といふ意のおのつから籠れるか故なりといへり猶可

考

○柵

日本書紀云大化三年十月造淳足柵置柵戸老人等相  
謂之曰數年鼠向東行此造柵之兆乎

マシ四箇國ノ要害皆敵ノ城ニ成テ候ハンスル後ハ何百萬  
騎ノ勢ニテモ御上洛叶マシク候

てこくま物語云さるあいたかいたはおかへのよきやう  
とにあるよしをつたへき、よきかたきそとおもひえろの  
こしらへおひた、しくみへにほりをほらせらんくひうた  
せさかもさひかすればとりならてかよふへきともおほえ  
す

岡本記云まろにてつねに馬引事た、常のことくたるへし  
在城なれば常のことくなり

祇園執行日記云天文三年七月廿日今日谷ノシロヘヨセ候  
由申候就今日ハタ、ズ候廿一日谷ノシロヘツメ候トテド  
シメキ候キサウトヨリシロヲ手ヲアハセミナトリマシ  
候由申候廿五日今シロセメ候テシタ、カセメシユウ死申  
候由候

長曾我部元親百個條云尺杖の事城普請其外何によらず本  
間六尺五寸間たるへき事付田地は可爲各別事

按、城はいにしへキと云しを中頃は音のま、に讀て其  
後シロといふことになりたり伊呂波字類抄には城シヤ  
敏佐造之とのみありて字鏡集には城シヤ同ミヤコアツク。

シロ、サカと見えたり書紀を檢するに武烈天皇紀に詔  
ヒキツク。

續日本紀云文武天皇四年二月己亥令越後佐渡二國修  
營石船柵

又云大寶二年十月丁酉先是征薩摩隼人時禰祈太宰所  
部神九處實賴神威遂平荒賊爰奉幣帛以賽其禰  
焉唱更國司等今薩摩言於國內要害之地建柵置戍守  
之許焉

又云和銅二年七月乙卯朔以從五位上毛野朝臣安磨呂  
爲陸奥守令諸國運送兵器於出羽柵爲征蝦狄也  
又云養老三年七月丙申遷東海東山北陸三道民二百戶  
配出羽柵焉

又云天平五年十二月己未出羽柵遷置於秋田村高清水岡  
又於雄勝村建郡居民焉

又云天平九年四月戊午遣陸奥持節大使從三位藤原朝臣麻  
呂等言以去二月十九日到陸奥多賀柵與鎮守將軍從  
四位上大野朝臣東人共平章且追常陸上總下總武藏上野  
下野等六國騎兵惣一千人開山海兩道夷狄等咸懷疑  
懼仍差田夷遠田郡領外後七位上遠田君雅人遣海道  
差歸服秋和我君計安墨遣山道並以使旨慰諭鎮撫  
之仍抽勇健一百九十六人委將軍東人四百五十九人  
分配玉造等五柵麻呂等帥所餘三百四十五人鎮多賀

柵一遣副使從五位上坂本朝臣宇頭麻佐一鎮玉造柵一判官正六位上伴宿禰美濃磨磨新田柵國大掾正七位下日下部宿禰大麻呂鎮一社鹿柵一自餘諸柵依舊鎮守又云天平寶字二年十月甲子發陸奥國浮浪人一造桃生城一既而復其調庸一便即占着又浮宕之徒貫爲柵戶一

日本後紀云弘仁二年閏十二月辛丑征夷將軍參議從三位行大藏卿兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂奏言今官軍一舉寇賊無遺事須悉廢鎮兵永安百姓而城柵等所納器仗軍糧其數不少迄于還納不可廢衛伏望置一千人充其守衛云々

扶桑略記云康平五年九月六日攻入衣河燒重々柵了殺傷者七十餘人十一日襲鳥海柵宗任等棄城逃走保厨川柵射殺賊徒卅二人被疵逃者不知其員

奥州後三年記云たけひらかいふやう金澤の柵といふ所ありそれはこれにはまさりたるところなりといひて二人相具して沼柵をすて、かなさはにうつりぬ

吾妻鏡云文治五年九月二日己未出平泉令赴岩井郡厨河邊給是爲相尋泰衡隱住所也亦親父祖父將軍追討朝敵之比十二箇年之間所々合戦不決勝負送年之處遂於厨河柵獲貞任等首依靈時佳例到當所可下

る云々

平家物語云去程に木曾義仲はみつからは信濃に有なから越前の國火燧か城をそ構へける彼城郭に籠る勢平泉寺長吏齋明威儀師富樫入道佛智新助齋藤太林六郎光明石黒宮崎土田武部入善佐美を初として六千餘騎こゝ籠りけれ所本より究竟の城郭磐石時ちめくつて四方に峯を連ねたり山を後にし山を前にあつ城郭の前には能美河新道河とて流れたり

源平盛衰記云廿六日ニ藏人頭重衡朝臣大將軍トシテ五條大綱言郡綱卿ノ山莊東山若松ノ亭ニシテ勢汰アリ到着アリ其勢三萬餘騎南都ヲ攻ムヘシト披露アリ大衆是ヲキ、テ東大寺ノ大鐘鳴シ蜂起騒動シテ大和山城ノ惡黨吉野十津川ノ者共ヲ招集テ奈良坂磐若路ノ道伐塞キコ、カシコニ落シヲ掘リ管ヲ植ヘ在々所々ニ城郭ヲ構テ云々

又云木曾ハ山門ノ返狀ヲ見テ加賀國住人林富樫カ一黨已下北陸道ノ勇士等五萬餘騎ヲ引卒シ大夫房覺明ヲ先達ニテ近江國湖ノ浦々ヨリ漕渡リテ天台山ニ打登リ惣持院ヲ城郭トス

吾妻鏡云治承四年五月廿七日戊寅官兵等燒拂宇治御室戸一是三井寺乘徒依構城郭也云々

討泰衡獲其頭之由内々令思案給云々三日庚申泰衡被圍數千兵爲遁一旦命害一隱如鼠退似鴟差夷狄島赴糟部郡此間相持數代郎從河田次郎到于肥内郡執權之處河田忽變年來之舊好令郎從等相圍泰衡一島首云々

按、柵は城とおなじくキとよめり又城柵の二字をキともよみキカキとも讀しを中頃より城も柵も音のまゝにいふこと、なりたりわけていは、土を築て構たるを城といひ木を建て構たるを柵といふ柵を又城ともいひしと見えたり大化三年越後國停足柵を造られしか東北邊の地に柵を構へられたるはしめにて其後蝦夷を鎮めらるへき爲に造られたる所々の柵國史に見えたるもの少からず後代に及ても城郭を柵といふこと奥羽の方言のことくなりたるはよしあることなりかし又矢羅井の類を柵といふそは柵の條に載たり

○城郭

保元物語云十三のとしよりふんこのくにきよらうしてあその平四郎た、かけかむこになりて九國をなひけんとするにたれかはさうなくまたかふへき菊池原田をはしめとして所々にまやうくわくをかまへくにひきこも

又云八月廿六日丙午義明云吾爲源家累代家人一幸逢于其貴種再興之代也蓋喜之哉所保已八旬有餘也計餘算不幾令投老命於武衛欲募子孫勳功汝等急退去今可奉尋彼存亡吾獨殘留于城郭模多軍之勢令見重頼云々

又云嘉禎二年十月二日丙戌六波羅飛脚參着申云自去月中旬之頃南都蜂起構城郭巧合戰六波羅遣使者雖相宥彌倍増云々十一月一日甲寅未剋六波羅飛脚參着南都去月十七日夜破城郭退散云々

太平記云木朝去程ニ東寺已ニ院ノ御所ト成リシカハ四壁ヲ城郭ニ構ヘテ上皇ヲ警固シ奉ル由ニテ將軍モ左馬頭モ同ク是ニ籠ラレケル

新式目云正嘉三年ニ城郭事次岩門并宰府構城郭之條爲九州官軍一可得其構云々早爲領主所沙汰可致其構云々

按、内曰城外曰郭と見えたりは即後代内曲輪外曲輪といふものなりされと必しもまかわちていふにはあらずおほよそにいへるなり

○城壁

吾妻鏡云治承四年十一月四日壬子佐竹冠者於金砂築

城壁一固要害兼以備防戰之儀敢不搖心動干戈發矢石一彼城郭者構高山頂也

又云文治五年八月七日甲午秦術日來聞二品發向給事於阿津賀志山築城壁一固要害國見宿與彼山之中間俄構一口五丈堀堰入逢隈河流相一以異母兄西木戸太郎國術爲大將軍著金剛別當秀綱其子下須房太郎秀方已下二萬騎軍兵凡山内三里之間健士充滿加之於刈田郡又構城郭名取廣瀬河引大堀堀秦術者障于國分原

○稻城

古事記云爾天皇詔之吾殆見欺乎乃與軍擊沙本毗古王之時其王作稻城以待戰此時沙本毗賣命不得忍其兄自後門逃出而納其之稻城此時其後姓身於是天皇不忍其後懷妊及愛重至于二年故題其軍不急攻迫如此逗留之間其所姓之御子既產故出其御子置稻城外令白天皇若此御子矣天皇之御子所思看者可治賜於是天皇詔其兄猶不得忍愛其後故即有得後之心是以選聚軍士之中力士輕捷而宜者取其御子之時巧掠取其母王或變或手當隨取獲而擲以控出爾其後有豫知其情悉刺其髮以變覆其頭亦腐當納掖庭以充官之數天皇聽矣時火與城崩軍衆悉走狹穗彥與妹共死于城中

又云雄略天皇十四年夏四月詔曰根使主自今以後子々孫八十聯綿莫預群臣之例乃將斬之根使主逃匿至于日根造稻城而待戰遂爲官軍見殺(中略)事平之後小根使主小根使主權使主子也夜臥謂人曰天皇城不堅我父城堅天皇傳聞是語使人見根使主宅實如其言故收殺之

又崇峻天皇紀云二年秋七月蘇我馬子宿禰大臣勸諸皇子與群臣謀滅物部守屋大連(中略)大伴連嚙阿部臣人平群臣神手坂本臣糠手春日臣名俱率軍兵從志紀郡到濫河家大連親率子弟與奴軍築稻城而戰

按、成務天皇紀に五年秋九月令諸國以下國郡立造長縣邑置稻城並賜楯矛以爲表と見えたる稻置は即稻城にて後に屯倉を置れ屯倉首して其事を掌らしめしかことく稻城のことを預り掌るものを置れしこと、聞ゆ租稻を蓄積む所なれば盜賊水火の備に堀を穿り土居を築き垣を構へて圍み堅めたるからに稻城といふ其制堅固にして頓て城郭に用へければ狹穗彥小根使主物部守屋大連等の戦に臨みてそれに摸して作れるをも亦稻城といひしと見えたりまかるを垂仁紀に積稻作城

王緒三重纏手且以酒腐御衣一如全衣服如此設備而抱其御子刺出城外爾其力士等取其御子即握其御祖爾握其髮者御髮自落握其手者王緒且絕握其御衣者御衣便破是以取獲其御子不得其御祖故其軍士等遠來奏言御髮自落御衣易破亦所纏御手之玉緒便絕故不獲御祖取御子爾天皇悔恨而惡作玉人等皆奪其地故諺曰不得地玉作也亦天皇命詔其後言凡子名必母名何稱是子之御名爾答曰今當火燒稻城之時而火中所生故其御名宜稱本牟智和氣御子

日本書紀云垂仁天皇五年冬十月發近縣卒命上毛野君遠祖八綱田令擊狹穗彥時狹穗彥與師距之忽積稻作城其堅不可破此謂稻城也雖月不降於此皇后悲之曰吾雖皇后既亡兄王何以面目蒞天下邪則抱王子譽津別命而入之於兄王稻城天皇更益軍衆悉圍其城即勅城中曰急出皇后與皇子然不出矣則將軍八綱田放火焚其城於焉皇后令懷抱皇子躍城上而出之因以奉請曰妾始所以逃入兄城若有因妾子免兄罪乎今不得免乃知妾有罪何得面縛自經而死耳唯妾雖死之敢勿忘天皇之恩願妾所掌后宮之事宜授好仇丹波國有五婦人志並貞潔是丹波道主王之女也

其堅不可破此謂稻城也としるされたる文字に就て設たる説にてさることわりなきこと斷して知るへし

○名城

三好記云天文十九年二月十六日城山ノ御番諸事初有テ無程作リ出シケリ將軍地藏山ノ城是ナリ攝州丹州目ノ下ニ見下シ無隱名城也  
新田老談記云小金井四郎右衛門ハ敵ヲ思ノ儘ニ麓迄追下シ人馬ノ谷へ落テ木石ニ當テ死タルヲ見テ名城ノ徳何ノ時モ是也新田ノ一族家人ハ一人モ不損云々  
難波戰記云大御所就御返事大坂城中評定條老兵等申上ケレハ(中略)當城ハ名城ト云トモ關東ノ計策ニヨリ郭外并ニ三ノ丸迄破却致シヌル上ハ籠城難叶云々

○古城

清正記云秀吉公羽黒の古城御普請なされ堀尾茂助を入おきたまふ其刺茂助主計召出されきのふのまつはらひよく仕たり兩人ともに御取たてなさるべきとの仰也  
奥羽永慶軍記云三番須賀盛義父前ノ彈正少弼輝行代ニ今泉ノ古城ニ家臣矢部周防同二ノ丸ニ柳川左衛門ヲ置與力三十餘騎ヲサシ添テ三春ノ押ヘヲセサス處ニ清顯叔父田村月齋ヲ大將トシテ二百餘騎ヲ卒シ今泉ノ城ヲ攻

○新城

續武家閑談云天正十八年庚寅秀吉公北條氏政父子退治の時權現様御出陣御家人を以て北條家所々の城を拔きたまふ時氏直か舍弟北條十郎氏房か居城武州岩付を本多忠勝平岩親吉查右衛門元忠に命じて攻しむ諸將各面々の持口あり查右衛門は新城の隠居郭に向ひて是を責云々

武家名目抄稿第九十七册

稿檢校保己一編

居處部廿一下

○山城

官地論云諸陣之面々大將御陣大乘寺打寄思々評議愛洲崎入道進出申看此城之體容易不可成力責攻物人馬之死骸築山兵革緋血可流河所詮諸勢從四方詰寄打留糧道可爲兵糧詰殊更明日明後日惡日其上爲三天一天上不可攻山城申  
大友興廢記云城中水に中國には金ほりの上手多き國なれば方々より金ほりを入れて大手の矢倉をまたほり崩し水の手をもほりきるそれによつて城中人馬ともに難義におよひし時鶴原田北下知にて白米に灰を入れて山城の高き處にて馬をまた引出し湯あらひのまねなどをして見せけるこれは別所の丸に水ありと敵に見せんためのはかりこと也  
安土日記云武田四郎勝頼此頃被抱取出持舟之城有又山中路次通マリコ之河端ニ山城拵フセキ之城有  
ともひさしくこしらへたるまやうにてほり廣して底ふかし云々  
應永記云去程ニ討手ノ兵ノ評議ニハ是程ノ平城只一度ニ可責落トテ十一月廿九日ノ卯ノ時ヨリ押寄せ御方三萬餘騎楯ノ板敷ヲ控テ一度ニ関ヲ作ケレハ云々  
嘉吉物語云石見の彈正近宗石見守の御前にまゐりて此城と申は尊氏將軍の御こもりありし時かたしけなくも天照大神を勸請し給へはつねの城にはかはるへしその上天下に弓とりおほしといへとも此ものともはすくれたる名人ともものあつまりたれば平城なりとも卒爾にはおつへからすと申ていろくの調議してゐたりける

賀越園諍記云城之目山九月中旬ニ木目ノ山城ニ信長公江州堀井阿閉ト云者ヲ城守ニ居置玉ヒケルヲ諸坊主衆打立テ四方ヲ取巻晝夜キヒシク攻戰云々

築城記云山城ノ事可然相見也然共水無之ハ無詮候間努々水ノ手遠くはこしらふへからず又水の有山をも尾つつきをこり切水の近所の大木を切て其後水の留事在之能々水を試て山を可拵也人足等無體にして聊爾に取かかり不可然末代人數の命を延事は山城の徳と申也返々出水の事肝要に候條分別有へし城守も天下の覺を蒙也日夜辛勞を積て可拵事肝心也

甲陽軍鑑末書云城取ニ曲輪數多ハ危シク圓ク取ヘシ小城ニハ山城ニシク事ナシ

○平城

太平記云<sup>盛等勅書被</sup>尾張守高經ノ義ヲ守ル心ハ森カタシトイヘトモ機ナル平城ニ三百餘騎ニテ楯籠  
又云<sup>任道勅被</sup>此兩三年越前ノ城三十箇所相交テ合戰ノ止日ナシ中ニモ湊ノ城トテ北陸道七ヶ國ノ勢共カ終ニ攻落サ、リシ城ハ義助ノ若黨畑六郎左衛門時能カ機ニ二十三三人ニテ籠タリシ平城也  
高館草子云龜井か開てさん候此城はひらまやうにて候へ

す繩うちと云へき也

○里城

大友興廢記云<sup>龍造守隆</sup>こ、につくし上總守廣門居城なり一里うちに里城をかまへ筑紫一門春門一千餘をもつて出相ふせさしかとも方々の諸勢およそ二十一萬にてとりまさせむる云々



又云尾高幸禮實久軍卒をいさめていはく豊後勢は多勢城中は少勢九牛の一毛にてたとへばた、かひいふとも維經の働をなすへしと下知すされともとりてのさと城は豊後勢おしかけのころところなくうちやふりぬ

○小城

太平記云足利殿著六波羅ノ兵共上ニハ勇メル氣色ナシ共心ノ下ニ仰天セリ彼雲南萬里ノ軍戸ニ有三丁一抽一丁トイヘリ況ヤ又千葉屋程ノ小城一ヲ賣ントテ諸國ノ勢ヲ盡シテ被<sub>レ</sub>向タレ共其城未<sub>レ</sub>落

安土日記云瀧川左近人數入置是ヨリ脇々小城へハ御手遣モナク直ニ奥へ御通候テ國司父子被<sub>レ</sub>楯籠一候大河内之城取詰信長懸マハシ御覽シ云々

甲陽軍鑑末書云天正二年二月中旬ニ勝頼公五ヶ國ノ人數ヲ催シ信長方へ御働被<sub>レ</sub>成然ルニ信長ハ美濃先方ノ侍衆ノ小城へ十騎十五騎程宛警固ヲ遣其外取出ヲコシラへ都合十八ヶ所云々

○屋敷城

三河記云家康もかひの國を治給て夫寄大久保七郎右衛門を被<sub>レ</sub>仰付てさくの郡へ指つかはされて御馬は入七郎右衛門は御受申午九月新府を立てかちか原にてすはへ使を

立てすはを引付てえんの行者へいて、それよりあしたの小屋へ行ければ早野澤の城をやき拂て退けるにその城へうつりてあるに四方一里二里の内に小城やしき城ともに十二三あり

○雑城

安土日記云天正三年八月十四日敦賀ニテ武藤宗右衛門所御陣宿御敵物候城々海手ニ雜城拵若林長門守息甚七郎越前衆相加

○搦揚城

甲陽軍鑑云遠州いぬい天野宮内右衛門は則乾にかき上城あり

見聞雜錄云府中今川の屋形跡には岡部次郎右衛門とて與力の面々駆催して府中の燒跡御館跡の堀をさらへ柵を振木戸を拵へ逆茂木引廻引廻信玄の旗待受(中略)跡部大炊尤也それく、弓鐵砲の足輕共一面に出てとめ矢倉も不<sub>レ</sub>上此構垣上城にも劣りたり先手に續いて覺えの者共打て入と下知すれ共云々

十河物語云天正十一年ニ讃岐ヲ仙石權兵衛尉拜領セラル仙石則淡州ヨリ船ニトリノリ讃岐ノ引田ニ着船シ掛上ゲノ城ヲコシラへ入タリ

藤葉榮衰記云尾州被<sub>レ</sub>申ハ惣領ノ左近十八九ニナルトイヘトモ病者ナレハ我等名代ニ難<sub>レ</sub>立其外ハ皆ナ幼少ニシ

テ一城ノ主ニ危シ我死シタリトテ跡ヲハ頼給マシ雖<sub>レ</sub>然五人ノ内一人名代ヲ結所領ノ主ニ成ヘシ五人ナカラ身體立給マシ然ハ我<sub>レ</sub>生涯ノ内御館へ御耳ニ入<sub>レ</sub>死後ニ兄弟ノ中和睦シ思合スル上ハ誰ニ恐<sub>レ</sub>一騎ノ役ヲモ仕續クル事ナラハ仕合ニヨリ果報ニヨリ五人ノ内何様ナル搦上城ナリトモ預ル事モ有ヘシトテ讓狀ヲシテ逝去有ケレハ御城ニテモ一入哀ニ思召遺誠相違ナク所帯ヲ五人ナカラニ賜ハリケリ

按、おろそかに構たる城を搦揚城といふ又省きて搦揚とのみもいふなり堅固に築たるにはあらで唯土をかきあけたる城といふ意にや知らず

○搦揚

續武家閑談云秀吉御下知を以て三月十九日巳の刻過より先鋒の諸將箱根のこなたより仕寄道具を三島の陣所より取寄ける午の刻秀吉公は近江中納言殿陣の先ずてに箱根山中城出丸へ八町斗有所まで馬上にて赴き二町はかり西谷越に人數を被<sub>レ</sub>立(中略)足輕二十三十宛出し置候所より鐵砲打掛候は、御人數色めき可<sub>レ</sub>申候か當座にかきあ

けを仕候様に被<sub>レ</sub>成度もの歎と云々一氏尤とて則家中へ申渡堀道具を取揃させける

武者物語云金澤の城主前田又左衛門尉利家は徳川家康のみかたなるか慶長五年七月廿六日に越前表へはたらきに出らる、三田山にかきあけを構へ岡島備中といふ侍を百騎はかりにして指置給ふ

○垣城

鴉鷲物語云日くれければある鳥つととひゆきてほととありて歸り來ていはく中嶋にははや表の木ともをかき城にとつて鹿垣ゆひて矢庫あけ火たきに箒たかせて用心以外の外に密かす云々

按、かき城は垣城にや本文は小楯にとりてなといふはかひの意と聞ゆ

○城中

太平記云千葉國城寄主上上皇皆關東へ落サセ給ヌト翌日ノ午刻ニ千葉屋へ聞エタリケレハ城中ニハ悦ヒ勇テ只籠ノ中ノ鳥ノ出テ林ニ遊フ悦ヲナシ寄手ハ性ニ赴ク羊ノ被<sub>レ</sub>驅テ廟ニ近ツク思ヲナス  
又云義助朝臣イサヤ今夜備後ノ鞆へ推寄テ其城ヲ追落シテ中國ノ勢着ハ西國ヲ責隨ヘントテ其夜ノ夜半計ニ備後ノ

輒へ押寄スル城中時節無勢也ケレハ三十餘人有ケル者共且戰テ皆討死シケレハ云々

○城下

松隣夜話云瀧長門ト云者ヲ前橋ノ城下幡屋ト云處ニ指遣シ彈正入道ト忍ヒ會ス

○要害

吾妻鏡云養和元年三月十三日己丑安田三郎使者武藤五自遠江國參着鎌倉申云爲御代官令守護當國相待平氏襲來一就申請命向橋本欲構要害之間召三人夫之處淺羽庄司宗信相良三郎等於事成度如不致合力云々

又云文治五年八月廿一日戊申追泰衡令向岩井郡平泉給而泰衡即從於栗原三迫等要害雖彌鐵攻戰強盛間奉防失利爲宗之者若次郎者爲三浦介被誅云

梅松論云細川の人々あみたか峯には目もかけず川原を下りに南にむかひしほとに淀竹田に充滿したる敵とも竹田細手の小處を堀切竹を打切て鹿垣を結構をあげ城戸を立て相待處に大勢掛りける(中略)三騎ながら城戸の内へにけ入しを後の大勢つきて即時に竹田の要害を打破て一

人も残らず淀川にひたしける

太平記云天下怪カクテハ南都ノ皇居叶マシトテ翌日廿六

日和東ノ鷲峯山ニ入セ給フ此ハ又餘リニ山深ク里遠クシ

テ何事ノ計略モ叶マシキ處ナレハ要害ニ御陣ヲ召ルヘシ

トテ同廿七日潛幸ノ儀式ヲ引ツクロヒ南都ノ衆徒少々召

具セラレテ笠置ノ石室へ臨幸ナル

又云山門楞嚴院九谷ノ衆徒處々ノツマリツマリニ關ヲ拊

へ逆木ヲ引テ要害ヲ構ヘケル其頃大師ノ御廟修造ノ爲ト

テ材木ヲ多ク山上ニ引ノホセタリケルヲ櫓ノ柱矢間ノ板

ニセントテ坂中ヘソ運ケル

又云青野原師直一家ヲ盡シテ打立給ケル間諸軍勢是ニ驚

テ我モ我モト馳下ル(中略)サレトモ要害ノ堀稠テ猛卒悉

ク志ヲ同シテ楯籠タル事ナレハ寄手毎度戰ニ利ヲ失フト

聞エシカハ云々

織田信長譜云永祿五年五月信長到西美濃放火于郷邑

構要害於洲俣一使織田勘解由左衛門居之

松原自休手録云四日從城外或十町或十五町以竹束

攻寄之朝霧深クシテ人面不憶越前魁首本多飛騨同伊

豆郎從城兵發矢石然處ニ石川肥後守持口ノ櫓不慮ニ失

火起ル越兵見之飛入堀底屏上懸手井伊掃部松平筑前

縱へは十七萬の人數の籠たる城を一萬六千にて責たるこ

とくなり

矢島十二頭記云天正十八年五郎殿仁賀保へ押寄十死一生

の軍可仕官家中へも申合八月三日兵庫頭殿居城根城へ

押寄被成折ふし風雨仕候へは水の手を切取らんと被成

候得共用心嚴敷水の手切取候事不成城は目下に見ゆる

と云とも根城へ取付山クキ長して一騎討の切所にて寄か

たく兎や角する内に物見のもの來て五郎殿へ申上るは

云々

○壘

日本書紀云舒明天皇四年蝦夷叛以不朝即拜大仁上毛

君形名爲將軍令討還爲蝦夷見敗而走入壘遂爲

賊所圍軍衆悉漏城空之

久米田軍記云京公方様御館ノ四方ニ深堀高壘長關堅固ノ

御造作有リ未タ御門ノ扉以下ハ不出來

朝倉敏景十七ヶ條云當家學館の外必國中に城郭を構させ

らる間敷候總て大身の輩をは悉一乘の谷へ引越しめて其

郷其村には只代官下司のみ可被居置事

○塞

日本後紀云延曆十五年十一月戊子朔陸奥國伊治城玉造塞

守ノ軍勢争出進先登被疵輕死城兵周章ス直田九當城

巽百間四面ノ要害也出丸ノ西方開門敵來ラハ從西働出

可引入東門兼テ堅ク下知云々

與羽永慶軍記云豐嶋二郎重村扱又加保ハ重村ニ向テ心安ク思

ハレ候へ我々カクテ有ン限リハ本望ヲ遂サセ候ハントソ

宜ヒケル懸テ己カ館ノ近キ處ニ繩張シテ要害ヲ構置ケ

リ

○節所

播州佐用軍記云羽秀吉編信長卿秀吉へ使者ヲ以申ケル

ハ某瘡病治セハ姫路へ罷出ヘキニテ候去レハ當國ニテ先

西播磨ノ者ヲ攻給ハンカ然ハ佐用大平城ハ第一要害ノ山

城ニテ候其外廢城何レモ節所皆山城也殊ニ毛利ニ深ク因

候得ハ備前ノ宇喜多先ニシテ押合フヘシ

甲陽軍鑑云此度長篠にて勝頼公の人數甲州衆うへの原に

加藤丹後を殘し置其餘は一圓にたちて是八千なり上野衆

四千信濃より六千合て一萬八千の内齋が巢に千又長篠城

奥平押に千をきて殘一萬六千をもて七萬あまりの人數

の節所を三ツまで構柵の木を三重にふりて待かまへてゐ

る所へ面もならずかゝるは敵四人こなた一人のつもりな

れとも節所と柵の木とを考れば是又敵に十萬の加勢なり

相去卅五里中間置驛云々

吾妻鏡云治承四年十一月四日壬子佐竹冠者於金砂築城壁固要害兼以備防戰之儀敢不搖心動干戈發矢石彼城郭者構高山頂也五日癸丑寅刻實平宗遠進使者於武衛申云佐竹所構之塞非人力之敗其內所籠之兵者又莫不一以當千能可被廻實慮者

又云文治五年八月十日丁酉去夜小山七郎朝光并宇都宮左衛門尉朝綱郎從紀權守波賀次郎大友已下七人以安藤次爲山案内者攀登于大木戸上國衛後陣之山發時聲飛箭此間城中大騒動稱搦手襲來由國平已下邊將無益于構塞失力于廻謀忽以逃亡

○城取

甲陽軍鑑云今川義元公の時山本勘介三河國牛窪より今川殿へ奉公の望に參るといへとも彼山本勘介散々夫男にて其上一眼指も不叶足はちんは也然れとも大剛の者なれば義元公へ召をかる、様にと廣原勘介か宿なる故おとなの朝比奈兵衛尉をもつて申上るは彼山本勘介大剛の者なり殊更城とり陣取一切の軍法をよく鍛錬いたす京流の兵法も上手也軍配をも存知仕りたる者也申せ共義元公かかへましまさず

又云諏訪郡式佐久小縣敵味方の境に味方の城なんととらせらるゝに城取をよくいたせは千の人数にて持城を三百にて持は城の取様種はり大事の奥儀有故なり

翁物語云當世ノハヤリ物ニテ皆軍法軍理ヲ心掛ル者多シ殊更小身ノ小侍共城取ノ稽古ヲ專ラトスル片腹痛キ事共ナリ城ト云フ物ニ非ヌ一代二代ノ内ニモ稀成ル事也軍法ヲ心掛ル事ハ武士ノ役ナレハ大小身共ニ尤委敷聞度モノ也城取ハサノミ不レ入事可成城取ニテ隙ヲ費サンヨリ余ノ事ヲ稽古セヨカシト云フ愚按ルニ是ハ軍法誹謗ノ様ナレトモ誠ノ城取ト云事ハ一國持タル大將モ一代ニ一度國中ノ城取ヲ定テハ二代三代目ニ及ヒテハ又改テ築ク事无シ作法ヲ覺ル事ハ士ノ役也毎度ハ有間敷事也小身ナル士ノ上ニモ又利ニ成事可有也ト翁ニ問之翁答曰疎成間事哉城取ハ軍法軍法ハ城取也城ヲ能ク取不覺ハ人数ヲ遣フ事不レ可成先城取ヲ本トシテ其城ヨリ人数ヲ繰出ス事ヲ分別シテ其上備ヲ立合戦ヲ企ル時人数ヲ遣フ事皆城ノ虎口ヨリ人数ヲ繰出ス道理トヒトシ是ハ大身ノ徳也小身ノ士ハ又付城取出ヲ大將ヨリ付給ハ、何ヲフマヘニシテ作事センヤ或ハ一分ノ爲ニハ吾居屋敷城取也何事モナク一代暮スヘキト思フハ誤リ可成或ハ思ヒモ寄ラヌ仕損

ヒ又ハ一門知音ニ掛リテ身體ヲ被亡事有リ其時屋敷ニ引受一働シテ死事士ノ役ナレハ其程其程ニ隨テ門ノ明ケ様屋作りノ分別有ルヘキ事也或ハ又其一家ノ家老ト成リ士大將ト成テハ猶以テ支關廣間ノ前庭ノ番様ニ分別有ルヘキ事也

○繩張

大友與慶記云<sup>筑後退</sup>永祿六年辛亥に宗麟公此島を名城の形に御らんしつけられすなはち軍配者をめし吉日良辰をえらんでなははりありそれ城郭は凡帝釋の座を表て須彌の十二方門十二万八千三百六十四門を形とるものなり此丹生のしまは東西に長き地故に赤龍の地なりそれによつて巳午の方に門戸の繩張あり巳より七ツ目にむきて師神をまつり五つ目に鏡を据巳より九つ目は城主壽命の方なるゆゑにこれに向て萬歳のまつりこと有地形のかつこうにより方角をあらためまつりかへにしに御門をたてらるる竹三本にさ、をつけ門の左右に立て七五三のしめを引そのつぎに鍼はしめありみなみに人足七人ひんかしに五人にしに三人たつこれ七五三なりその、ち御普請はしまりぬまつりことは金剛寶戒寺におほせつけらるゝたん上のきしき次第そのほかはこゝに略す

甲陽軍鑑云勘介承て申上る我等城を取候て繩はりは委く相傳へ申候關東には太田道親か、りを専用とは批判いたし候へ共過てひさしき事にて候へは今は是とてもまかと存知たる者無之

甲陽軍鑑末書云天文廿二年八月川中島ノ内清野屋敷ヲ召上ラレ山本道鬼齋繩ハリニテ海津ノ城ト名付ラレ本城ニ小山田備中ニノ曲輪ニ市川梅印原與左衛門ヲ指シ置カルル也

清正記云二月朔日小西攝津守一手の衆出船加藤主計頭は肥前なこや御城のなははり等見廻り能にさたし高麗國へまゐるへきとの義たるによつて二日遅く出船

○繩打

築城記云平城は始てこしらへ候時先繩うちをする也

# 武家名目抄稿第九十八册

稿檢校保己一編

## 居處部 廿二

○居城

甲陽軍鑑云武州岩つきの住人太田源五郎後に太田美濃と云ある年武州松山の城を取持ち居城は岩つき也  
 松隣夜話云天正四年二月謙信公越後春日山ヲ御立二万五千ニテ飛彈國江間常陸介居城へ取詰玉フ先陣ハ飛彈衆白屋盛物ト云侍ナリ

新田由良家傳記云秀吉公由良長尾老母へ送狀云由良長尾兄弟事内々天下之請ニ御意ニ由に而先年小田原へ擱置居城へ取懸可ニ相渡ニ旨雖ニ申懸候ニ母爲ニ覺悟ニ城を相抱京都へ御届申上候

播州征伐記云取寄一木城郭一里二里之間拵ニ付城二三箇所ニ納御馬ニ給矣扱秀吉拵下曰平山ニ峯ト爲ニ居城ニ慶長見聞記云宰相返事ニハ明朝ハ一番鳥鳴候ト出馬仕へシト也朽木誠ソト翌朝一番鳥ニ木本ヲ出人數ヲ押シ掛ル所ニ宰相ハ濃州ハハ不行鹽津へ出其ヨリタレミ峠ヲ越

城に差置れ候

甲亂記云武田相模守最後條サテ小室へ以使者被ニ仰届ケルハ當國之儀自ニ勝頼ニ給置候證文歴然ニ候間先其地へ可ニ相移之由被ニ仰遣候處ニ下會根返答申ケルハ於ニ御下知ニ者無ニ是非ニ候尤御移候へ本城ヲ相渡申我等ハ二三曲輪へ可ニ罷出ニ之由無ニ相違ニ返事也

羽尾記云上原能登守ト名乘武田信玄源晴信同勝頼二代ニ仕テクンカウヲハケマシ年七十二餘生國上州ニ歸ルソノコロ吾妻郡岩櫃城ニ上杉量勝ヨリ齋藤攝津守ト云者城代ニサシヲキケリ攝津守ハ能登守カ武勇妙タルヲ知リ能登守ヲ招テ客人トシテ振舞本城之裏ニ居處ヲシツライヲキケリ

織田家譜云永祿七年八月信長乃分ニ諸將ニ國ニ稻葉城ニ本城ニ後號ニ  
 義殘後覺云備中高松城秀吉公ハ直ニ押付給へハ柴田ハ玄蕃散散ニ打負利生捕由ヲ聞給ヒテ家運ノ盡ルニ因テ見ル穴へ落ルトハ是ソカシ下知ヲ聞サル玄蕃カシツル事ヨトテ氣懸シテ本城へ歸陣セントシ給へトモ敵押付テ見へケレハ輒ク遁ルヘキトモ見エ給ハス  
 初井日記云八上水ノ秀治公御先祖代々ノ多喜ノ郡八上山ノ

テ海津へ出其ヨリ船ニテ居城大津へ着謀叛ノ色ヲ立ラル  
 ○宿城  
 頼印僧正繪詞云同十日修法結願シテ御卷數ヲ進セラル、時鷲城ノ矢倉カイタテヲハツシテ木戸ヲ開テ兩將ニワタス則御方勢入カハル者也其外祇園新城岩壺宿城等悉城ヲ披テ御方出入ス

梁田文書云足利義今般佐竹義重向ニ于當表ニ動候處中務大輔入性節々言上感悅之至候當城兩三度勅宿城雖ニ取懸候堅固之防戰故無ニ指儀今卯刻令ニ退散ニ候云々  
 觀山子軍歌云平城ノ町ヲ宿城ト云山城ノ町ヲ根小屋ト云  
 ○本城

中國治亂記云同十月十一日晴久卿中へ打テ出ラル元就モ三千騎ニテ切テカ、ル間尼子方引上ルヲ追カケ青山向城二ノ丸マテ込入既ニ本城危ク見エシカハ尼子ノ方ノ老臣三澤三郎左衛門一陣ス、ミアタリヲ拂テ切テ出  
 甲陽軍鑑云板垣信智略を以て信州海尻の侍とも晴信公御馬を將て則海尻の城を晴信公へ進上申す海尻の本城に小山田備中二の曲輪に日向大和守三の曲輪に長坂左衛門是は長閑事なり本城の儀は板垣信智飯富兵部甘利備前守小山田備中四人圍取にして小山田備中圍に取あたり此本

御本城ニ御座候テ御家ノ繁昌中々目ヲ驚スルハカリニテ候  
 按、本城とは二三の曲輪に對へて本丸をさしてもいひ又出城端城にむかへて根城をさしてもいふなり

○根城  
 初井日記云丹後ニテハ宮ノ城無類ノ要害候ユエコレハ立籠リテ根城トシ但馬ニテハ山口ノ城ヲ根城トシテ面々カ諸手ノ城トモヲハ枝ニシテ持堅メテ候ナリ

太閤西國發向記云始ニ俱利伽羅峠ニ左右鳥越竹橋小原松根此外取出城三十六也根城木舟森山益山留山等十餘ヶ所以上國中東西之固拵ニ五十八ヶ所防之  
 增補家忠日記云永祿七年五月小原吉田城邊佐脇八幡ニ要害ヲ構へ三浦左馬助ヲシテ是ヲ守ラシメ吉田牛窪兩城ヲ以テ根城トス

矢島十二頭記云天正十八年五郎殿仁賀保へ押寄十死一生の軍可ニ仕旨家中へも申合八月三日兵庫頭殿居城根城へ押寄被ニ成折ふし風雨仕候へは水之手を切取らんと被ニ成候へとも用心嚴敷水之手切取候事不ニ成城は目下にみゆると云共根城へ取付山クキ長して一騎討之切所にて寄かたく兎や角やする内に物見のもの來て五郎殿へ申上るは

云々

義光物語云義光此由を聞召惜き若者哉寒河江を根城に  
なし最上川を前に當て防戦ふものならは無左右せめら  
れまし云々

水野勝成記云三州岡崎へ三人ながら罷越御奉公申上候一  
接はとろの御堂を根城にいたし悉く罷在よし承候

○繁城

蜂須賀家文書云都より跡三ヶ所つなき城之儀備前宰相殿  
人数都へ一所に引寄申候に付候て後三ヶ所之儀毛利壹岐  
守一手衆之内引る羽柴兵庫頭二ヶ所伊藤民部一ヶ所相抱  
申候事

松原自休手録云西尾ニハ荒川マシマスカ背義諦家康へ  
内通シ酒井雅樂荒川へ引入西尾ノ城へ押詰急ニ攻ケレハ  
牧野新次郎依へ兼渡ノ城行ニ牛久保ニ西尾へハ雅樂助入替  
從レ是東城義締モ繁ノ城ハナシ駿河ノ援兵ハナシ此次ニ  
攻落セト從ニ岡崎ニ引卒して出ル城兵多ケレハ力攻ニ難  
成遠攻ニセント下知ス

○押根城

播州佐用軍記云秀吉細路極月二十日ヨリ上月ノ城内城外  
ノ掃除等仰付ラレ搦手ヨリ城外所々ノ柵鹿垣ナントヲ捕

へ相移宮崎ニハ日下與ノ依ノ無城也去々年ノ九月ヨリ  
至三ノ今番持ノ間城破損見苦敷體也

○番手持

甲陽軍鑑云遠州は家康とあらしひの國なれば暇あるとて  
も是は他所へ働申事ならざるは小山さから高神天も番手  
持なり殊以遠州濱松家康居城ゆる遠州の内御持の所少も  
油断なりかたし

○番手城

初井日記云遠江守秀向與初井矢織城ノコトカチテ要害堅固  
ナラス番手ノ城ニ大勢ヲ入置ヘキ工夫ニテ俄カニ用イ候  
處ニ今旗頭衆諸方ノ手當ニセマリテコノ虎口ノ後ツメナ  
ク候へハ三方ヨリ手立ヲコシラヘ候テ燒捨ニシテ候

○詰城

太平記云小貳與菊小貳カ一族等俄ニ心替シテ攻ノ城ニ引舉  
ク中黒ノ旗ヲ揚テ云々  
又云探題ハ兼テヨリ用意シタル事ナレハ大勢ヲ城  
ノ木戸ヨリ外へ出シテ戦ハシムルニ菊池小勢ナリトイヘ  
トモ皆命ヲ塵芥ニ比シ義ヲ金石ニ類シテ責戦ケレハ防ク  
兵若干被テ打テ攻ノ城へ引籠ル  
又云義助朝臣イサヤ今夜備後ノ鞆へ推寄テ其城ヲ追落シテ

繕此城ヲ以テ中國押ノ根城トシテ山中鹿之助ヲ大將トシ  
テ北國勢ニ上方セイ國人ヲ相交リ軍兵五百餘弓鐵炮ノ足  
輕三百餘人玉藥兵糧差添在番ニノコサレ云々

○繁根城

初井日記云播州野天正三年亥ノ三月水上御館宗貞公攝州  
表へ御進發總勢八千餘人ナリ先ツハ青ノニ城ヲ乘返サン  
繁キノ根城ノ御用イノ由也

○持城

謙信家記云輝虎公太田三樂ト云侍大將ニ向テコトノ由ヲ  
委問給テ友定人質ヲヨヒ出シテ成敗セラレ三樂ニ向テ被  
レ申ケルハ此邊ニ氏康ノ持城ハナキカト尋給フ

○番城

見聞雜錄云伊豆相模之内にて與國寺城ハ先祖早雲伊勢新  
九郎時代に今川より此城を人數を借りて一分にて攻取開  
國之城なり依レ之代々番城にして此頃番頭は北條方にて  
も老功之侍大將伊豆次郎入道三島盛物入道を大將として  
物頭八人兵糧玉藥矢種まで丈夫にて神原深澤之繁城とし  
て中城に釣石投木夥敷蓄へ置大力之若者共を撰勝て籠る

○番持

當代記云天正二年二月廿八日與平九八郎信昌參河國長篠

中國ノ勢著カハ西國ヲ責隨ヘント其夜ノ夜半許ニ備後ノ  
鞆へ押寄スル城中時節無勢也ケレハ三千餘人有ケル者共  
且ク戰テ皆討死シケレハ官方ノ士卒是ニ機ヲ擧テ大可島  
ヲ攻城ニ拵ヘ鞆ノ浦ニ充滿シテ武島ヤ小豆島ノ御方ヲ待  
處ニ備後備中安藝周防四箇國ノ將軍ノ勢三千餘騎ニテ押  
寄タリ

又云

島山父子憑切タル三俣ノ城ヲ落サレテ叶ハシ  
トヤ思ヒケン攻ノ城ニモタマラス引テ深山ノ奥へ逃籠リ  
ケレハ菊池今ハ是マテソトテ肥後國へ引返ス

東亂記云至剛ノ三浦介散々打破ラル一二ノ木戸モ  
責破ラレツメノ城ニ籠リケリ

信長記云

一支モ支ヘス二三ノ丸ヲモ採破ラレ詰ノ  
城ニ成ケレハ堀ニヒタ、ト手ヲ掛乘入ント見エシ處ニ  
越中ヨリ僧一人笠ヲ上降參テ請テ申ケルハ云々

大友與慶記云三河内ノ佐伯勢ハ伊豫守加下知につきてまつ  
かたより鐵砲をかけしはあひしらひてくちよ  
りとつとか、り一二の木戸を打やふり難ひやうともに二  
千餘の勢みたれいれは大將宮内や、しはした、かひつひ  
にはつめの城に曳とり七八百人鎧をそろへこゑをあけ突  
てかゝる

按、詰城とは二三の丸に對へて本丸をさしていひ又端城に對へて根城をさしても云なり

○外城

宗長手記云大永二年五月北地の旅行越前國のしる人につきてかへる山をしらねともうつの山をこえ小夜の中山にいたりて掛川泰能亭に逗留この頃普請最中外城のめぐり六七百間堀をほり土居をつきあけ凡本城とおなしこの地岩土といふものにて只鐵をつきあけたりともいふへし  
三好記云天文十六年二月廿五日三宅ノ城へ押寄せ卷テ攻ケレハ城中ハ小勢ニテ同三月十五日ニ外城ヲ攻落シ本城計ニ成ケレハ城ノ本人出羽守モ加勢ノ人々モ不叶シテ是モ城中ヨリ笠ヲ出シ色々噉テ同廿二日ニ城ヲ明テ渡シケル

松原自休手録云島津中務カ居城襲ニ佐土原敵防戰互ニ盡紛骨ニ於此敵數百人討取ル同島津領分穆佐倉岡高岡綾合四ヶ所ノ外城駈合築瀨ノ渡リニシテ反ニ合戰ニ討ニ百餘人  
按、外城とは本丸にむかへて外曲輪をさしてもいひ又根城にむかへて端城をさしてもいふなり

○端城

太閤播州征伐記云播州通之城節所ニ付雙心易成ニ通路

以ノ外違例ニ因テ端城ニマカリ有此城ニハ候ハス

松原自休手録云扱押寄刈屋從ノ城出ニ十八町ニ防戰互見知越ノ軍晴カマシ大久保五郎左衛門同十郎右衛門石川新九郎杉浦八十郎進ニ先登ニ杉浦討死合戰午角也其後寺邊ノ城へ押寄せ取大方端城ハ降參ス

○足城

大友記云戸次道雪老中へ申道録親貫家中ノ者共鬱憤色立候故双方純熟ノ儀被ニ仰聞ノ由ニ候條サタメテ今程ノ儀ハ相互ニ異儀ヲナケウチ御扱ニ任スルノ旨堪忍アルヘキコトニ存油斷候ノ處ニ親貫顯ニ不義ニ浦部表在々所々揚ニ火手ニ足城ヲマヘ楯籠ノヨシニ候云々

○出城

柴田退治記云其コロ勝豐病氣不平起臥不叶且夕有床此故自身不能出張ニ與力者大金藤八山路將監遣ニ越前境目片岡天神山拵ニ出城ニ對ニ修理亮勝家ニ無ニ究ニ色立之淵底ニ

清正記云山表之様子爲可ニ聞届ニ飛脚付置良尤悅思召候先書ニ如被ノ仰候去月廿七日到ニ二枚橋ニ被ニ御着座ニ翌日山中垂山體被及ニ御覽ニ廿九日山中城中納言被ノ仰ニ付良時ニ被ニ責崩ニ城主松田兵衛太夫ヲ始千餘被ニ討捕候

爾來三木方得レカ於播州立ニ色荒木端城花熊成ニ通路ニ太閤紀州發向記云揃ニ鐵砲數ニ敵近々引付敵續放打所或衝ニ鐵楯ニ或傾ニ整鑿鐵袖ニ取ニ死人ニ爲ニ小楯ニ無ニ明闇ニ攻上列ニ一揆之首ニ殘之端城見レ之一度明退

大友與廢記云新田御吉日良辰をえらんで城取あひはしまりぬ法印しは田にのたまはく(中略)宗麟公の御ちやうには堺目の端城はてきのしろとなりて攻軍もあるものなりその心得あるへきとおほせをかうむりて候てきの城になりては利をうしのふ秘術等もありそのたんは此方にまかせられ候へとのたまふ

清正記云將又韭山之義端城五ツ乘ニ取之候日々夜々仕寄無ニ油斷無ニ仰付ニ候間落去不可有程候

甲陽軍鑑末書云味方十五萬二十萬ノ時敵一國二國ニテハ十カ九ハ籠城ニアラスンハ敵對成マシ是ヲ卒爾ニ取卷ヘカラス引出シ合戰仕ル智略計策肝要也若敵ニ羽城取出アラハ大軍ノ方勝利疑ナシ

義殘後覺云宇留山ノ城江暫ク弓鐵砲ヲ止テ漢南ヨリ申越ス様ハ先手遊擊將軍日本へ渡リ和睦セシニ如何ナル仔細ニ因テ重テ軍勢ヲ渡シケル(中略)ト申越ニケリ返答曰仰ノ如主計頭罷出テ和睦ノ儀ヲ談スヘキニテ候ヘトモ此間

依レ之箱根足柄其外所々出城數十ヶ所退散候條付入小田原に押寄五町十町取卷候

大友與廢記云田原親賢謀叛條天正七年己卯十二月下旬に田原親弘の養子右馬頭親貫は國東の郡の城主なり病氣のよし言上すこれによつて宗麟公御暇を出され在所において養生すへきとの御意にまかせ同國浦部の居城に引籠り明春年頭の登城もなく療治のためとて日をかさね在城の間にくらかけと云出城をこしらへ其丸にうつり兵糧玉藥をよういのきこえあり

義光物語云幾度の合戦にも勘十郎真先かけて無二無三に切て入味方の一陣二陣蒐破らさる事なし然に有時中野と云出城まで勘十郎働出候由申來ければ云々

○取出城

紀州發向記云十餘萬騎之人數立雙岸和田表山手千石掘浦手澤并積善寺木島島中窪田此外數ヶ所取出之城有レ之

初井日記云栗田口合戰條働キ勞レノ人々ハ取出城トモヘ入ラレ候又云數ヶ所ノ岩城トモノ候ユヘ常ニハ八上氷上兩城館ノ衆ニ旗頭衆ヲ加番トシテ替々ニ番候

○取手

太平記云主上自合修金輪法給録千種殿ハ本陣峯ノ堂ニ歸テ小島備後三

郎高德ヲ呼寄テ敗軍ノ士カ疲テ再難ニ戰都近キ陣ハ惡カリヌト覺レハ少シ境ヲ阻陣ヲ取重テ近國ノ勢ヲ集テ又京都ヲ責ハヤト思フハ如何ニ計フソト宣ヘハ此御陣後ハ深山ニテ前ハ大河也敵若寄來ラハ好ム所ノ取手ナルヘシ穴賢此御陣ヲ引ント思食ス事不可爾候

信長記云義元合戦當國智多郡弱兵共ハ豫參ノ降人ニ成タリシ者共モ多カリケレハ信長卿ヨリモ鳴海近邊數箇所取出ノ要害ヲ拵サセ玉フ

新撰信長記云信長卿越前へ御出張之由聞エシカハ朝倉左衛門督取出ヲ拵敵ヲ可レ防トテ敦賀金崎ノ城ニハ朝倉中務大輔ヲ被ニ籠置ニ手筒山ニハ疋田右近津岐甚四郎九岐左助氣比之社家ヲ籠置玉フ

太閤記云秀吉於敵國成かくて伊勢國に令ニ出張ニ取出之要害をせさせ給ふへきと永祿九年七月五日大小之長屋十ヶ櫓十塚二千間柵木五萬本來八月廿日以前に仕立候へと作事奉行等に被仰出しに日限より先て出來せし

和井日記云天王山虎杖山落城ノ條其後之次第能勢口ニハ南岡山丸山里川吉川渡々呂木等之岩モ繫キ之釣合アシキトテ燒拂ヒニシテ能勢之城青野ノ城天主ノ城虎杖山ノ城ニ小柴山ノ城ハカリニシテカタメテ候

ケ會利構ニ捕出ニ午極月より未八月迄十ヶ月之間に數度之攻合御座候

會津四家合考云氏郷由來條氏郷岩酌ノ追手へ向ハレケレハ利長ハ搦手ニ廻リ追手搦手一同ニ関ノ聲ヲ合スルト齊ク大筒小筒ヲ同時ニ放懸ル敵モ追手ニ岩ヲ拵ヘ大勢相支テ防ケル奥羽永慶軍記云赤館合戦條高松瀧輪花園等ニ籠城ス此近邊ニ伊達方ノ者大勢數十城ヲ構ヘヌレハ境ヲ危シトヤ思ヒケシ佐竹義久ノ下知トシテ玉野ト云所ニ取出ヲ築キ武勇ニ長セシ者七騎ヲ置タリ是ヲ玉野七騎ト號ス

武林往昔日記云秀頼公攝津國ノ天王寺茶臼山に取出を御定被レ成に付て眞田左衛門佐後藤又兵衛尉兩人に繩張を被ニ仰付けるに又兵衛左衛門に申けるは眞田殿は甲州武田信玄の幕下にて人の國城を責捕給ふ名譽の軍家にて其隠れなし我々しきは小身の家に有て人を責る事希にして籠城する事度々に及び今度の繩張は天下を引請るなれば是城取の限なり則又繩はりは我等に任せ候へ乍去あしき所はなほし給ふと云て繩張は則後藤又兵衛是を定ると聞る

○出張所

矢島十二頭記云四十人之者とも矢島へ浪人仕候米澤景勝

末森記云夜々北ノ屋倉ニテ家老四五人召集評定シテ取出ヲコシラヒ所ナト相談キハマリ候處ニ越中方ヨリ付城ヲスル人アリ利家卿聞給ヒ此儀僞ト思ナカラ加様ノ事聞由斷シテ末代ノ耻辱ニナル事モアルヘキト思召村井又兵衛岡島喜三郎片山内膳不破彦三ヲ召出サレ御相談アリテサラハ加賀越中ノ境目朝日山ヲ取出ノ城ニコシラヘ候ヘキ由ニテ同八月廿二日ニ村井又兵衛ヲ大將トシテ高島九藏原田又右衛門兩人ヲ差添其外鐵砲大將四人都合千五百餘ノ人數ニテ二三日普請シテ柵ヲ付廻シ候時分同八月廿八日朝日山口請取ニ越中勢佐々平左衛門尉前野小兵衛大將トシテ彼是都合其勢五千餘騎ヲ二手ニ分押來是モ朝日山ヲ越中ヨリ取出ニコシラヘ可レ被レ申トノ事也

房總治亂記云武田相計リケルハ萬喜城ヲ圍ムトモ此究竟ノ要害ナレハ輒ク陥ルヘカラス然ラハ當城ノ岩鶴ヶ城龜ヶ城ヨリ援兵ヲ出サンカ然ル時ハ却テ味方難儀ナルヘシ

安土日記云天正六年九月十五日大坂表御取出御番衆ノ目付トシテ御小性衆御馬廻御弓衆廿日番ニ城々へ被相加シ小島景憲家譜云天正十一年信州御治候ニ柴田七九郎を警固に被ニ仰付候(中略)甲州方衆致ニ番手替御味方ハ勝間殿出張之城番人出羽之酒田九萬石之所へ城代信太修理とのより矢島四十人之者ともへ御内意申參候

○出張

箕輪軍記云永祿二年五月信貞草津へ入湯せし留守を伺ひ國峯の城を責とりて信貞を國へ不入圖書之助を以國峯の城主とす無據信貞妻子を引卒し甲州に參信玄に此由申上願ける信玄被レ聞召一尤に思召御挨拶には元來上野國我麾下にせん事我十三歳より一日片時忘れず常々念願し折ふしなれば是こそ幸なれと悦ひ給ひ夫より信州犀川と申所に出張を築き尾張守を被ニ入置

○向城

太平記云如六郎左衛門條時能カ勇力氏政カ機分小勢ナリトテ聞キナハ何様天下ノ大事ニ可レ成トテ足利尾張守高經高上野介師重兩大將トシテ北陸道七箇國ノ勢七千餘騎ヲ卒シテ鷹巢ノ城四邊ヲ千百重ニ被レ圍三十餘箇所ノ向ヒ城ヲソ取タリケル

永享記云結城籠城條同九日高橋ノ城へ押寄堀際へ橋ヲ突双ヘ大勢ヲ一所ニ集メ向城ノ如クニ備ヘタレハ城ニ籠ル敵ノ軍勢機ヲ屈シ勢ヲ吞レテ不レ叶トヤ思ヒケン云々

東亂記云義同討死條至剛ノ三浦介散々打破ラレ一二ノ木戸モ

資破ラレツメノ城ニ籠リケリ(中略)遙ニ有テ鎌倉へ出陣シケルヲ早雲聞アヘス押寄テ責給へハ散々ニ懸負三浦へ引ケリ小田原勢追懸々々責ケレハ三浦陸奥守父子新井ノ城ニ楯籠ル早雲三浦へ押寄向城トリテ三年マテ食攻ニ責タマフ

中國治亂記云義長ヨリ富田ノ高森ト云山ニ武田刑部少輔大將トシテ大勢籠置ケル元就ハ狼山ト云處ニ向城ヲトリ進藤豊後守ト云兵ヲ置テ歸陣アリケル

新撰信長記云佐和山ノ城ニ押寄幾重トモナクトリ圍ミシカトモ嶮難ノ地ナレハ一旦ニハ攻ヘカラストテ鹿垣ヲ結廻シ百々力屋布ヲ向城ニ拵ヘ丹羽五郎左衛門尉ヲ被ニ入置

久米田軍記云爰ニ中島堀ト云所ニ故細川右京兆氏綱ノ舍弟細川右馬頭松永ト一味同心シテ堀ト云城ヲトリ立籠リケルヲ篠原衆ヨリ向城ヲ取テ責ケレハ不レ叶難儀ニ見エシ

奥羽永慶軍記云城録去程ニ山形義光宣ヒケルハ先祖ヨリ最上三郎ハ山形ノ幕下ナリシニ今迄蛙登ヲ小野寺カ領地トセシコソ奇怪ナレ(中略)大軍ヲ以打圍氣ヲ屈サセハ必降參スヘシ其時命ヲ助テ我郎等ニナサハヤト思ヒ給ヘ

所有ニ口傳ニ場惡ハ敵攻ヨル敵城アラハ付城ヲ用押敵城ナクハ陣城ヲ構北國上洛ノ人數ヲ分籠テ其後智略計策兩様出家町人地下人云々

太閤播州征伐記云十月七日又被寄付城南八幡山西平田北長屋東大塚城邊五六町築地高一丈餘二重塀入ノ石摸雁昇楯高結重ニ築ノ細川面伏ニ蝸籠ニ打ニ梁杭ニ擡ノ楯橋上居ノ番巴卷水底用ニ心人ノ通ニ裡大名小名爲ニ立ニ宿作之陣屋ニ通ニ小路辻々一切門不レ依ニ晝夜ニ撰ニ人通ニ成ニ暗夜ニ町々篝火灯明唯如ニ白晝秀吉近習之人々分ニ六時三十人番屋々ニ晝ニ付名字ニ付城之主人爲ニ居ニ判形ニ廻若油斷之輩不レ依ニ上下ニ成敗重者懸ニ磔輕者誅殺人々掉舌恐

松平記云三河國西郡の城に鶴殿長助籠り候岡崎衆松井左近しきりにせめ後は付城をいたし兵糧をつめ申候間あつかひに致し城を渡し鶴殿被レ除候處を松井左近鶴殿子共二人生捕いたし岡崎へ進上申候

増補家忠日記云慶長十九年十月廿二日松平伊豆守信吉先日ヨリ岸和田ノ城ヲ警衛ス(中略)京極丹後守高知同若狹守忠高カ陣今里ハ大坂ノ城ニ進シコレニ依テ附城ヲ築テ伊豆守信吉本城ヲマモリ新庄越前守直定二ノ九ヲ警衛スヘキノ旨台命ヲ蒙リ翌年正月ニ至テ信吉此所ヲ守ル

ハ山形豊前守山邊氏江志村ヲ始七百餘騎ヲ引卒シ蛙登ノ城へ押寄向城ヲ取テ矢羅井ヲ結要害ヲ稠クシ糧ヲ運ヒ城中ノ者ニ飽滿セヌルヤウニシタリケル

按、楯籠りたる敵城を責んか爲相むかへて構たる城を向城といふ又付城といふも同じ事也

○付城

信長記云州上月城條三木城へ取懸ケルカ名城ナルニヨリ一旦ニ攻下ルニ事難カルヘシトテ四方ニ附城ヲ丈夫に拵ヘ秀吉卿ニ御渡有テ八月十六日ニハ信忠卿惣人數引卒シテ打納給フ

織田家譜云使ニ佐久間右衛門尉信盛及子甚九郎守天王寺城ニ命ニ進藤山城守松永彈正忠等諸將ニ守ニ附城十箇所

甲陽軍鑑云天文廿三年甲寅の春駿河義元相州の氏康取あひの時義元より信玄公を頼給ふ子細は尾州の侍大將織田彈正忠死して其子息今の信長也義元公の旗下にならず結句義元公の持の國三河の内きらの城へ取かけ付城をして是を攻る義元公は御馬出し給へ共跡をきつかひ遠州ひきまに逗留ましし先衆を以て彈正忠か子息の調居たる取手を巻既に攻殺す所に織田降參して云々

甲陽軍鑑末書云十萬ノ人數合戦ノ様子定場ヨクハ三段三

觀山子軍歌云付城トハ敵城近ク攻ヨセテ小城ヲ築ヲ云取出トハ敵責來ルヲ防ン爲ニ城ノ邊ニ小城ヲ構ルヲ云

○明城

里見九代記云是より三浦に新井の城をこしらへて番替りに家中のものを置れけり高野臺の合戦には此城の者とも不レ殘下總へ引てあき城にて取組ければ小田原衆高野臺の合戦にうち勝てそのときたひく此城へも北條方より番手を置けり

○捨城

細井日記云明退條爰ニ細井越中守教業ハ矢織ヲ捨城ニ致候節大働キニ手疵アマタ候テ勢ハリ深ク候

○裸城

江濃記云此由父道三開テ大ニ驚キ馳カヘリ貝ヲ吹テ人數ヲ集メ四方ノ町ノ末ヨリ火ヲカケ放火シテ稻葉山ノ城ヲハタカ城ニナシ川ヲ打越シ山方ト云山中ニ引籠リ父子ノ合戦初マリケル

信長記云美濃國城中者トモ周章キ旨フレ廻シ於ニ小牧山ニ勢汰シテ三川ヘハ騷テコハ何者ソ敵カ味方カトアヤシム程ナルニ片端ヨリ火ヲ懸即時ニ裸城ニソシ玉ヒケル安土日記云稻葉瀧川蜂屋維住筒井武藤氏家安藤飯沼荒木



是等ハ神吉ノ城アラタト取寄外構即時ニ攻破リハタカ  
城ニナシ本城ノ堀へ飛入々々塀ヲ突崩シ數刻被<sub>レ</sub>攻破云  
云

武家名目抄稿第九十九册

稿檢校保己一編

居處部廿三

○九

應仁略記云<sub>多武學</sub>世保大膳大夫事是又長野上意に隨て三  
ヶ年前より覺悟の事也一色角と聞より早く世保が陣所<sub>三</sub>  
へ<sub>ノ</sub>押寄たり十六日未明四方八方同時に関をそ擧たりけ  
る世保の内軍奉行志田見并家の子山田彈正<sub>五十人強</sub>四村の  
出雲以下丸々の手垂共出合散々に防戦ふ事火花を散す風  
情なり早朝より酉刻まで寄手入替々々責付けれとも城衆  
隨分の者共打出て追拂ふ間丸々は寄手迷惑の體也  
按、城郭の體たる一様ならずといへともおほよそにい  
は、皆同なるに出す故に丸といひ又曲輪ともいふなり

○本丸

中國治亂記云番衆ヲユルカセニ置ケレハ城中ノ兵不<sub>レ</sub>殘  
出テ走リ或ハ降參亦各カ在所へ落ケレハ兵忽ニ滅シ永祿  
十一年本丸計ニ成リ尼子義久頻リニ降參シテ出雲ヲ指上  
ケ何方ニテモ懸命ノ地ヲ可<sub>レ</sub>給ト懇望アリ

太閤記云<sub>名譽屋</sub>御本丸と二丸の間北之門河原長右衛門尉  
同大手之門御牧勤兵衛右之わきに矢倉有觀音寺同取付に  
も二階之矢藏有

義輪軍記云<sub>安中松井田</sub>城の大將長野右京進業盛廓の外を  
責破られ本丸に引籠猶も殿しく防けり

清正記云其はかの者とも鐵砲をうたせのり入つゝゐて清  
正のりこまるればははや二の丸はのりとりぬ清正下知して  
いはく此勢をぬかすへからす直に本丸をのりとするへしと  
ゑいゝ聲をあげられければ云々

増補家忠日記云天正十二年三月廿八日大神君御陣ヲ小牧  
山ニ移シ給フ榊原小平太康政兼テ小牧山ヲ以テ御本丸タ  
テテ事ヲ請フ

按、本丸は即詰の丸にて前卷にのせたる本城詰城とい  
ふものなり

○詰丸

播州征伐記云敵之士卒取籠詰丸今無<sub>レ</sub>頼所一唯相ニ待落去  
之時尅<sub>一</sub>由歎息

○二丸

安土日記云天正三年五月十八日推<sub>三</sub>詰志多羅之郷一極樂寺  
山ニ御陣取(中略)長篠は南西ハ河ニテ平地ノ處也近々ト

圓通寺山ニ陣取長篠ヲ見下シテ金堀ヲ入既二ノ丸へホリ  
入候  
織田家譜云天正五年十月松永黨森氏海老名氏守ニ河内片  
岡城(中略)信忠曰是松永所<sub>レ</sub>以可<sub>レ</sub>亡也乃與<sub>三</sub>信盛<sub>二</sub>謀僞  
爲<sub>三</sub>雜賀使者<sub>二</sub>納<sub>一</sub>其兵數百人於城中<sub>一</sub>々々不<sub>レ</sub>覺<sub>レ</sub>之以爲雜  
賀兵開<sub>レ</sub>門而納之比<sub>レ</sub>至<sub>三</sub>二丸<sub>二</sub>信忠率<sub>三</sub>大軍<sub>一</sub>急攻<sub>レ</sub>之  
野田福島合戦記云北國勢手合軍ニ打勝テキヲイサラハ城  
ヲモ責落スヘシト宇佐山ノ城ニ推寄既ニ二ノ丸マテ攻上  
リケル  
義輪軍記云<sub>安中松井田</sub>城の城主安中越前守忠政も矢炮と  
はし或は控出し命を惜ます防しか寄手多く討れ敵は大勢  
なれば死人の上を飛こえ<sub>二</sub>二の丸迄控出し押破る<sub>一</sub>され  
とも忠政は所々鐵砲打出し矢を射かけけり  
増補家忠日記云天正九年三月廿二日去年十月ヨリ此春ニ  
至テ遠<sub>三</sub>三兩國<sub>二</sub>ノ多勢高天神ノ城ヲ圍ム(中略)水野惣兵衛  
尉忠重其子藤十郎勝成父子射金曲輪ヨリ二之丸ニ進テ攻  
入ル  
當代記云慶長十七年正月四日平岩主計頭去朔日晚ニ於<sub>三</sub>  
名護屋二丸<sub>二</sub>死去今日大御所聞給云々

○三丸

信長記云芥川等城先懸御勢池田城へ押寄町屋ヲ打破ントセシ處ニ敵勢打テ出爰ヲ先途ト防戰敵味方入亂散々ニ切合撞合ケルカ終ニ三九迄押詰猶息ヲモクレス攻ケレハ旗ヲ卷甲ヲ脱テ降參ヲコソ

豐臣家譜云武州岩付城者北條十郎氏房所守也氏房使伊達與兵衛守本丸一妹尾下總守片岡源太左衛門守三九二而氏房在小田原城云々

玉露叢云慶長十七年三月廿五日ニ駿府三ノ丸ニ於テ御能仰付ラル秀吉公上覽云々

當代記云慶長十八年二月二日大坂火事出來三ノ丸長屋米石多以失火風横ヘ火ヲ吹切テ自餘ノ丸ヘ不レ移

小島景憲家譜云去年大佛之鐘之銘之難題はことし又可レ被申候大坂之惣堀既に三ノ丸迄うめ手も足も無様に仕押懸可レ申武略ハ殿之御身上に危覺たり此勤兵衛成敗必不レ可有云々

○甲丸

○乙丸

惟任退治記云忽彼地成ニ一之湖新築ニ出堤ニ上相ニ拵數箇所付城ニ作ニ大船ニ組筏攻ニ込敵城乙丸引ニ拂合壁屋宅一甲丸成ニ一箇

柴田退治記云秀吉從一實一點ニ相ニ擯諸卒ニ攻ニ入城中ニ於ニ乙丸ニ夜中之合戰伏ノ屍者被レ疵若如混ノ沙流血漂ノ楯

○中丸

關八州古戰錄云上杉謙信武州輝虎大物見ニ出テ高揚ノ地ニ立留リ心閑ニ城中ヲ伺ハレケルニ本城ト仲丸ノ間大沼有シニ移リ橋ヲ架シ往來ヲナセシ中ニ白キ衣裳ヲ着タル婦人仲丸ヲ出テ本丸ニ赴ク體ヲ陽ニ映シテ彼沼水ニ移リケルヲ輝虎熟々ト觀察シテ倍ハ仲丸堅固ヲ受タル處故女童部ノ類足弱ヲ入置戰兵本城外郭ニ楯籠レリト考ヘ云々

新撰信長記云賤嶽之城ニハ東野左馬助千田采女正西山且左衛門西野太郎左衛門尉四人被レ籠置ニ雲雀山之要害ニハ淺見大學介八木與一左衛門尉ヲ籠置ル燒尾之丸ニハ淺見對馬守ヲ置キ給フ小谷中ノ丸ニハ淺見玄蕃亮三田村左衛門介大野木土佐守ナト籠置

豐臣家譜云景勝利家來ニ于小田原ニ而執レ謁秀吉不ニ大賞ノ之中略景勝利家聞レ之卒兵攻ニ八王寺城ニ々者北條陸奥守氏輝居城也氏輝使ニ橫地監物守本城中山勘解由狩野一庵守ニ中丸

見聞雜錄云淺井長政は六日夜佐和山迄來七日は摺針峠迄迎に出給ふ遠くより長政は下馬給ふ信長は馬上にてやれ

やれ備州手輕くも是迄は出られし先へ佐保山へ行れよ信長跡より可レ行として式代有長政御先へ被レ參佐和山城下迄磯野丹波守安養寺三郎左衛門遠藤嘉右衛門淺井家之物頭五人御迎に罷出一々被レ掛御言ニ大手先迄は赤尾美作河毛三河淺井七郎罷出候中之丸升形迄淺見對馬中島日向罷出本丸引橋門迄淺井備前守被レ出迎

○東丸

安土日記云天正六年七月十五日夜ニ入神吉ノ城へ瀧川左近維任五郎左衛門兩手ヨリ東ノ丸へ乘入十六日ニ中ノ丸へ賁入神吉民部少輔討捕天守ニ火ヲ掛出ル而切テ燒殺西ノ丸荒木攻口神吉藤太夫楯籠候

○西丸

松隣夜話云城主入道謙信ハ西ノ丸穴門ノ内一段底キ地ニ陣ヲ打

松原自休手錄云廿四日輝元從ニ大坂西丸ニ至ニ木津ノ下屋敷

○外丸

細井日記云信長備丹羽家名代使者御對面候前々仰ヲ受候領國トモノ義御教書ヲ下シ賜候ヤウニ願ヒ奉リ候尤モ龜山城ノ義ハ國人トモ殊ノ外ニ無念ヲ存コメテアル處ニ候ハハ早速カヘシ入

ラレ下サレ候ハハ國人トモ一向ニ勇ミノ出申ヘク候第一ハ攝州發向ノ爲ニモ候ハハ早々仰付ラレ候様ニ願ヒ來ル處ニ候此城ノ義舊冬既ニ外ノ丸マテ乘取今五日ノ内ニハ乘返シ申ヘキ武略ニ及フト云ヘトモ云々

○出丸

松隣夜話云謙信池ノ西端ニ馬ヲ扣ヘ辨當ヲ取寄セ茶ヲ喫セラル所ヲ金澤ト云者出丸ヨリ鐵炮十挺計リ連子三十間程ニテ二線マテタメツケニ打ケレトモ射向ノ袖籠ノ鼻ナトヲ撃テ一毛ノ隔ニテ御身ニハ無レ恙

松原自休手錄云大津ノ攻手從ニ去七日一稠ク圍レ之九月十四日從ニ長等山ニ打ニ大筒ニ從ニ海陸ニ攻寄破ニ出丸ニ欲ニ入ニ大手ノ門ニ由井助左衛門等閉レ門堅ク防レ之

又云山中ノ城主松田兵衛大夫爲ニ加勢ニ北條左衛門大夫間宮豐前朝倉能登籠ニ彼城ニ翌廿九日命ニ秀次ニ以ニ仕寄ニ可ニ攻寄ニ東西分目ノ合戰不レ可有ニ卒爾働云々雖レ然中村式部少輔等以ニ武勇ニ追ニ入出丸之勢ニ以ニ其競ニ乘ニ取本丸ニ城主松田加勢ノ間宮不レ屈勇武戰死ス

細井日記云細井失禮去ホトニ敵方ハ十五日ヨリ晝夜ニ揉付テ息モキラスニ強攻シテ候ホトニ出丸ヲハ明智カ揉取テ候ヲ追拂フテ候

太閤記云中之城秀吉卿三島之御陣屋へ御立寄もなされず  
秀次卿の備之上なる山へ攀登り御馬を立られ中村式部少  
輔木下美作守をめし被仰けるは此邊より見へ渡りたる  
出丸までは十町も有へきの條今少陣をよせ仕寄のねこや  
に用の可然旨仰しかは式部少輔奉り御誕之趣御尤に候  
と申上

増補家忠日記云慶長五年九月十三日三成是ヲ聞テ事延引

ニ及ハ、東兵ト戰時其障ト可成速ニ是ヲ退治スヘシト  
議シテ(中略)大津ノ城ヲ圍テ是ヲ攻撃タシム城兵堅ク守  
テ拒キ戰フ寄手ノ軍勢山ニ登テ火炮ヲ城ニ放入ル湖水ニ  
ハ近江一國ノ舟ヲ揃テ船筏ヲ組テ攻ヨスル陸地ニハ槓楯  
ヲ並テ多勢夥數攻撃ノ間遂ニ城ノ出丸ヲ攻破ラレテ既ニ  
寄手ノ門ニ攻入

武藏書話云真田左衛門佐信賀は冬陣には出丸に於て加賀  
越前佐和山の軍兵と戦ひ名譽を顯し夏陣には五月六日譽  
田口へ張出し伊達正宗とせり合けり

○大手出丸

毛利家記云秀元卿被召タル御禮ヲ井上平三郎ト云シ小  
性ニキセ助心ハ秀元ノ御馬ノ傍ヲ不離(中略)慶井ノタ  
ウへ上ラセ給へハ佐和山ノ御東國勢取圍大手ノ出丸へハ

狀を一見し蟻蟻か斧といふ事を知て曳かへたる分別尤也  
と感悦して自筆返牒を遺す其狀曰芳札令披見候紙面之  
趣一々承届同心候間早く城中を片付貴殿は搦手之丸御移  
尤候云々

○升形丸

太閤記云利家末孫之よの明日をまたは通路なりかたかるへ  
し諸卒早く升方の丸へ退去すへきよし信昌下知す云々

○郭

續日本紀云寶龜五年七月壬戌陸奥國言海道蝦夷忽發ニ徒  
衆櫻橋塞道既絶ニ往來ニ侵ニ桃生城ニ敗ニ其西郭ニ鎮守之  
兵勢不能支國司量事與軍討之

字鏡集云墨岩同屋同壘同堀同カリ、タム、カサナレ城職同ミヤ  
アツチ、カキ、ホリキ、  
シロ、サカヒ、キツク、  
又云堀キ、壘ホリキ、堀同堀ホリ

按、郭をクルワと讀は近代のことなり書記などには何  
と訓したるや詮索すへし

○曲輪

さ、こおちのさうし云はしりいていのちをかるこめくる  
わにはせあかりにしひかしをみてあれはうんかのつはも  
のとものかさしとせめのほる

乘込タリト見エシ城ノ麓ヲ通ラセ給フ時節天守ニ内ヨリ  
火ヲ懸タル體ニミエタリシ云々

大友興廢記云城攻薩州勢城中より切て出先陣掃部介勢  
を二三町追立る後陣の一定をしかけ相戦ひ終に城中へ進  
上げ兩手の人數つけこみて亂入て戦ふ城中の兵とも爰を  
最後と防ぎければ大手の出丸まで曳しりそきそこにてふ  
みこたゆ

○大手出

立入宗繼記云御息中將殿は有岡表へ御陣をすゑられれき  
れきの者とも男女子とも四百六十計家を二間つくり二間  
の家へ進こみ裏表よりやきくさをこみ火懸やきころさる  
る其刻左騎表に久左衛門女房をはしめ九十七本はたもの  
をあげられ候ことくくうつくしきいしやうをさせられ  
めもあてられぬ事無申計候又京都へは荒木津のかみか  
女房城の大手のたしにをき申女房にて候故名をはたし殿  
と申候

○搦手丸

大友興廢記云城攻薩州勢城中より切て出先陣掃部介勢  
を二三町追立る後陣の一定をしかけ相戦ひ終に城中へ進  
上げ兩手の人數つけこみて亂入て戦ふ城中の兵とも爰を  
最後と防ぎければ大手の出丸まで曳しりそきそこにてふ  
みこたゆ

播州佐用軍記云上月城ヲ寄手川ヲ涉リ竹把仕寄爰來兩曲輪  
先へ寄テ竹把仕寄ヲ棟立ルヲ見テ所々ノ櫓門櫓渡塙ヲ指  
固橋ヲ中間板取返待カケタリ

土氣城變廢記云平山土佐守先祖藤代佐渡守先祖竹内出雲  
守先祖關八ヶ國ヲ御心懸ク武者修行に御出被成候其時  
ニ三人之衆ハ右ニ記ス此三人之先祖御供此出雲守ハ中書  
殿妹御ニ成曲輪之内ニ住宅有之

小島景憲家譜云伏見追手治部少輔曲輪武者溜り陣ハ堅ル  
人三千可有候佐和山惣人數不來間も其三千ハ餘所之三  
万に向ひ夜は夜打晝は物見を出し云々

○二曲輪

越後軍記云去程ニ北條家ヨリノ養子上杉三郎景虎後政虎  
ト改ム越州春日山ノ城ノ二ノ郭ニ居リ又謙信ノ甥上杉喜  
平次景勝ヲモ猶子トシテ同三ノ丸ニアリ云々

小島景憲家譜云信州川中島海津城二ノ曲輪ニ山城を信玄  
より鎌信押へに高坂彈正に添弓矢ニ爲差引ニ被置

甲陽軍鑑云高坂彈正手前四百五拾騎信州かいつに被ニ差  
置二のくるわに小幡彌左衛門山城時のことく也  
甲陽軍鑑末書云天文九年正月十六日ニ板垣智略ヲ以信州  
海尻ノ城晴信公御手ニ入木城ニ小山田備中二ノクル輪ニ

日向大和三ノクル輪ニ長坂左衛門指置ル云々

松隣夜話云就中太田勢ハ西ノ川ノ手ヨリ騒キ山ヲ一息モ不<sub>レ</sub>繼攻上リ外カハ破リ二ノ曲輪ヲ門際マテ切入ケ<sub>レ</sub>トモ長濃無<sub>レ</sub>際防戦ヲ以テ本丸ヘハ未<sub>レ</sub>入

○三曲輪

甲陽軍鑑云村上殿方のよき侍を真田かたちへつれてゆき二のくるわまで引籠跡先の門をうち本城と三のくるわよりさしはさみ五百人の村上衆を一人も残らず成敗仕りしかも味方に手負死人なく忠節を申上る

又云板垣信形智略をもつて信州海尻の侍ども晴信公御馬を將て則海尻の城を晴信公へ進上申す海尻の本城には山田備中二のくるわに日向大和守三のくるわに長坂左衛門は長閑事なり

松隣夜話云山根ノ城落テ引返シ給フ途中ヨリ先達テ侍二人被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>前橋城中ニ於テ各役所ヲ割リ別ケ陣札令<sub>レ</sub>打給<sub>一</sub>太田三樂北城丹後ハ三ノ曲輪東城地ノ内ハ直江山城北ノ出丸ニハ川田豊前柿崎和泉各陣札ニ隨ヒテ幕ヲ引

○内曲輪

柴田退治記云臘月之初至長濱<sub>一</sub>出<sub>一</sub>張彼地秀吉久相居之要害也依<sub>レ</sub>之知<sub>一</sub>案内<sub>一</sub>思<sub>一</sub>惟敵之病處<sub>一</sub>構<sub>一</sub>付城<sub>一</sub>成<sub>一</sub>可<sub>一</sub>被<sub>一</sub>

破<sub>一</sub>内輪<sub>一</sub>行<sub>一</sub>

○外曲輪

官地論云凡高尾城有様後削<sub>一</sub>嶮岨山<sub>一</sub>白根連<sub>一</sub>白雪<sub>一</sub>不知<sub>一</sub>夏鹿鹿通路斷畢前深田渺茫末連<sub>一</sub>湖水<sub>一</sub>人馬無<sub>レ</sub>所<sub>一</sub>置<sub>一</sub>足弓手石岸高聳無<sub>レ</sub>往復之路<sub>一</sub>妻手流水遠漲絶<sub>一</sub>去來之船<sub>一</sub>加之外郭穿<sub>一</sub>堀築<sub>一</sub>々々地<sub>一</sub>迫<sub>一</sub>々々<sub>一</sub>矢倉<sub>一</sub>所<sub>一</sub>々<sub>一</sub>垣<sub>一</sub>楯<sub>一</sub>亂<sub>一</sub>株<sub>一</sub>逆門木筒木矢石重々構

甲亂記云<sub>一</sub>飯田大鳴<sub>一</sub>先城下ノ宿中ヲ敵ニ燒<sub>レ</sub>ヌ先ニトテ自放火ス其日ノ夜半計ニ矢倉之番衆申ケルハ敵ハ夜詰ニ寄候哉覽城ノ廻鐵炮ノ火無<sub>一</sub>際限<sub>一</sub>見<sub>一</sub>候<sub>一</sub>ト申ケレハ各格ヘ上見ニ寔ニ何程ト云ヘキ數モシレヌ鐵炮也是ヲ聞外曲輪ニ小屋ヲ懸タル地下人共悉我先ニト逃出云々

粗井日記云龜山ノ城ノコト不慮ニ不義ノ者トモ貴殿ヘ返リ忠致シ落シ入申事當家弓矢ノ越度ニ存シ國人トモ無念ヲハサミ早速ノリ返シ申ヘキニテ今ヌテニ出丸外曲輪マテ乘取リ不義ノ者西川勝船井桑田並河等ノ殘黨ヲ討取リ候

松原自休手録云廣瀬衣ノ城外輪打破入ニ岡崎<sub>一</sub>割<sub>一</sub>與<sub>一</sub>譜代ノ家人<sub>一</sub>清康ニハ不<sub>一</sub>劣人<sub>一</sub>ヨトテ各悅<sub>一</sub>之<sub>一</sub>此後駿府ヘ被<sub>一</sub>參ケレハ義元感賞ス

衛門駿河先方の中にも信玄公御取立被<sub>レ</sub>成候へは一入精を出し花澤こしくるわのちかくにある家のうへにあかり居申候

小島景憲家譜云十七日之午尅妙心寺長老其弟子は冬城に籠り候佐藤主飛脚にて兩通此内禪爾と有は長老之狀也付<sub>一</sub>隱岐殿<sub>一</sub>咄<sub>一</sub>兼<sub>一</sub>より妙心寺へ告る伏見にて景憲内之者は町屋に置景憲は伏見腰曲輪之内酒井三右衛門處にひそかに居候處云々

○帶曲輪

玉露叢云元和元年五月七日申ノ刻御中ヨリ大野修理カ郎從ハ木村權右衛門ヲ使<sub>一</sub>トシテ差越<sub>一</sub>ス其口上ノ趣ヲ本多上野介後藤庄三郎ヲ以テ訴ヘ申テ云ク大坂籠城ノ諸浪人トモ殘ラス討死仕<sub>一</sub>候<sub>一</sub>依<sub>一</sub>テ今日姫君城中ヲ御出有<sub>一</sub>岡山ヘ御座ノ由也然者秀頼并ニ母堂其外女中數輩且亦速水甲斐守父子拙者父子ハ山里ノ帶曲輪ノ<sub>一</sub>二間<sub>一</sub>ニ倉<sub>一</sub>ニ取籠<sub>一</sub>リ罷在候間秀頼并ニ母儀ヲ御助命ニ預ラハ修理ヲ始メ各切腹致スヘキ旨申越候段則テ上野介申上ル

○節曲輪

甲陽軍鑑云信玄公御家中城取極意五ツは辻の馬出し二ニしとみのくるわしとみの土居云々

奥羽永慶軍記云<sub>一</sub>合戰<sub>一</sub>川<sub>一</sub>此事イカニシテ聞エケン今泉ニテ知合セ昨日田村ニ告シカハ月齋ヲ始<sub>一</sub>トシテ大將清顯五百餘騎ニテ後攻セント旗押立探ニ探テ出馬ス是ヲハシラテ二階堂ノ先手須田五百餘人今泉外曲輪ニ取付鐵炮ヲ打懸蘇波ヲ調ヘ攻ニケリ

慶長見聞記云伏見ノ城主同廿九日ヨリ晦日ノ間度々切テ出働キ比類ナキ中ニモ鍋島手ヘ烏井彦右衛門先掛ニテ突テ出追崩シ候然トモ敵方大勢ニテ新手ヲ出シ替攻申候間外曲輪ヲ破ラレ本丸松丸ヲ持堅メ橋ヲ引テ防申候

○外張曲輪

續武家閑談云慶長十八年大坂にて各評議しけるは當城本丸二三の丸は要害天下<sub>一</sub>と申なから外張の曲輪不可<sub>一</sub>然修復の事駿府ヘ被<sub>一</sub>仰付<sub>一</sub>其序を以て御普請なされ可<sub>一</sub>然と申合す皆人申けるは今年死去せし織田上野介信包入道老犬齋小出播磨守後生ならば如<sub>一</sub>此無益の評議有間敷にとそくやみ畢ぬ云々

○横曲輪

甲陽軍鑑云すみ馬たしの事付よこくるわの事

○腰曲輪

甲陽軍鑑云駿州花澤の城へ信玄公取つめ給ふ岡部次郎右

○出曲輪

北條五代記云小田原籠城愚老相州三浦住人小田原に籠城

す東方芦子川濱手の角矢倉を持口とす是より一町計惣か

まへの外に福門寺と名付一町四方程すこし高き地形あり

是は昔寺の跡なるによつてかく名付也是に又堀を堀土手

芝手をつけ堀をかけ城の内より橋を一ツ渡し是を出曲輪

と名付山角上野守嫡男四郎左衛門尉次男左近大夫父子三

人の持口の内にあり然に秀吉公小田原へおし寄るの時節

此出曲輪有て益なしと堀を破りすてくる輪と號し橋をは

かけおき登は城中より出て土井に鐵炮をかけ置はなつ云

○水曲輪

伊達日記云政宗公米澤へ御移候其時分迄大里落落不ニ申

付一片倉小十郎我等長井ノ人數迄大里へ被遣候各相談仕

手賣ニ可申由申合方々ヨリ取付責候へトモ水クルフ計

取其外ハ一ヶ所モ不破候

○的場曲輪

増補家忠日記云天正八年三月十六日此日大神君濱松ヲ御

出馬此日高天神ノ城兵天王カ馬場ニ出張ス大須賀康高中

座十月二日ニ池田筑後守楯籠當城一大軍ニテ推詰外

構御放火爰ニテ堀川平左衛門討死也

柴田退治記云於是勝豐入置人數同ニ木山一有調略之風

說依之木村軍人佐入替大金藤八木下半右衛門山路將監

外構出之

播州征伐記云攻上谷大膳亮付城一數寇防戰散火花一既

乘入外構終討果大膳

與羽永慶軍記云豊島二郎重村秋田勢三千人豊島ニソ押來ル城

中ニハ僅百餘人殘留リケレトモ外構ヘニ人一人モナシ本

丸ニ計有テ敵來ハ討死センカタメナリ

○黒構

築城記云城の内も見えず又土居も高く家も見えざるを黒

構と云也城の口より家もみえ又土居もサクを振内の見ゆ

るを透カマへと云也

○屋敷構

新田老談記云由良國重公御死去ノ刻御子達御一族へ御遺

言數ヶ條ノ外ニ被仰聞ケルハ先祖義重公ヨリ居城ハ徳

川也平地ニシテ堀一重屋敷構計也乍去三徳有テ城廓ノ

妙アリ

村ノ岩ヨリ兵ヲ發シ相戰(中略)忠勝カ軍勢競ヒ掛テ急ニ

○町曲輪

伊達日記云南條下總守町榎輪ヨリ四五町出候處ヲ先手ノ

人數一戰ヲ仕内へ追込付入ニ仕二三ノ榎輪町構マテ放火

仕候へトモ下總守本丸へ引コモリ堅固ニ持候云々

○惣構

岡本記云惣かまへといふ事はたとは、こし水なとにては

いちばなとを申也惣くるわの事也

新撰信長記云城中ノ者トモ爰ヲセント、防キ戰フトイヘ

トモ寄手ハ猛勢ナリ味方ハ無勢ナレハ惣構ヲハ押破ラレ

本丸計ニ成ニケリ

蜂須賀家文書云秀吉小早川左衛門佐へ贈書狀云廿三日不

レ繼息取ニ懸惣構ニ乘破則城廻十間十五間に陣取せ候事

大關西國發向記云然越中以國境ニ爲惣構引山々材

切倒大木ニ成構

水野勝成記云はくろうかふちのまへの堤にしよりを付申

候則明る朝はくろうのふちの惣かまへやふり押しこみ申候

○外構

安土日記云芥川ノ城へ信長被成供奉公方様被移御

甲陽軍鑑云信玄公二月中旬迄田中に御逗留有江尻御普請

駿河先方衆仕る清水にも屋布構馬場美濃守繩はり也信玄

公馬場に被仰付關東梶原海賊あかりて清水の屋敷構を

攻取籠居たる時我方より攻ほすに味方さのみむつかしく

なきやうに工夫仕候へと馬場美濃守に被仰付候美濃守

委細畏たると申候て其ことくいたす山本勘介流城取の極

位也

甲陽軍鑑末書云江尻ノ城モ馬場繩張仕城代山縣ヲ指置ル

ル也清水ニモ馬場繩張ニテ屋敷構被仰付也

又云信勝其年十六歳ナレ共賢マシ、テ仰ラル、ニハ此

新府中ヲ取立給事甲州一國ノ内ニヨキ城ノナキ事信玄公

御無分別ニテ堀一重ノ屋敷構ニ御座候、テ御ソシリ被

成此城ヲ取立半作ト有テ爰ヲ捨給ヒ古府中へ御歸アル事

弓矢取テノ惡名也

大和記云大和信長公御手ニ入候マテハ在々所々ニ屋敷カ

マヘヲ仕リ殊ノ外地迫合仕候右ノ分ハ大和ニテ能身上ノ

者計ニ候

松原自休手録云筒針ノ取出ヲハ小栗ノ一族堅之是ハ矢

矯川ノ西六栗ノ御中ニ夏目次郎左衛門屋敷構城持ケルヲ

不出タメ也其後高須主殿ニ命シテ下知打取急ニ押寄

破三要害夏目不及三戰一取籠倉屋一如籠中鳥主殿執之助一命一追放ス

○町構

伊達日記云佐沼近所ノ者共ノアツマリ町構西館相抱候一揆ノ城兵大崎葛西中ニ多候間御人數搦候モ如何思召サレ惣構ヲ御覽候而仕寄ヲ所々ニ仰付ラレ(中略)沼ト川トノ間ハ茂庭石見役所ニ候其東ハ片倉小十郎役所ニテ候三日仕寄ヲ仕ラレ候處四日ノ明方西曲輪ヲ持兼引コモリ候付而町構モ破本丸ニ計ニ罷成云々

奥羽永慶軍記云高倉合戦田高倉表ニ押寄マツ町構ニ取付鯨波ヲ作鐵炮ヲ打懸急ニ攻落ントノ採タリケル高倉外曲輪ノ者トモ兼テ用心稠シカリシカハ敵ノ寄ルト見ルヨリ早城内へ女童ヲ以注進シ男ノ類ハ弓鐵炮長柄等ヲ手々ニ提テ敵ヲ防ク

○横矢構

紀州發向記云二十一日未尅御勳座也見合御旗先諸口一度寄ニ人數一揆之要害一敵付ニ安道筋一成ニ横矢構一々之前築ニ土堤一切挾間大筒小筒込樂大兵小兵解矢手把一爲ニ待懸

○多門造

武家名目抄稿第百册

塙檢校保己一編

居處部廿四

○大手

平家物語云大衆足かる共四五百人先たて、白川の在家に火をかけ焼上は在京人六波羅の武士ともあはや事いてきたりとして馳むかはんすらん其時岩坂櫻本の邊にひかけひかけしはし支へて防鬨はんまに大手は松坂より伊豆守を大將軍として若大衆惡僧共は六波羅にをしよせ風うへに火かけ焼上一もみもうてせめんになとかは太政入道焼おひて討さるへきとそ僉議したりける

吾妻鏡云治承四年八月廿六日丙午今日卯尅此事風聞于三浦之間一族悉以引籠于當所衣城各張陣東木戸口次郎義澄十郎義連西木戸和田太郎義盛金田大夫頼次中陣長江太郎義景太多和三郎義久等也

たかたち草紙云御所のてい追手はす、木兄弟かねふさたた三騎にてかためぬからめ手はわしの尾かたをかくまの太郎源八兵衛ひろつな備前の平四郎以上五騎にてひかへ

板坂卜齋慶長記云大津の城に被成御座一南のかたにたもん作り五十間計もあるへきか下は水ほり石かけ一へん被成御覽候に鐵炮のたまの通り候跡一ツあり此たもん作り斗にても五三日は城をもつへき事なりいにしへの名城はいつれも當時に合てはいかにもそさうなり石かけなどもなし城主よければよくもなき城も名城になるいかにようかいよくても主しかとなければとひとりことに御意御請申ものなし

増補筒井家記云永祿十年六月下旬ヨリ松永久秀奈良多門城私曰此城ノ四方ニ長屋ヲ作連シト云リ築テ在任ス城今長屋ヲ作リ多門作ト云此時ヨリ始ル築テ在任ス

○多門

安土日記云三月廿八日辰刻御藏開候訖彼名香長六尺之長持ニ納在之則多門へ致持參御成之間於舞臺掛御目

たり辨慶はうき武者にておふ手のやくらにはしりあかつていくさのけちをそしたりける

太平記云山崎兩六波羅大ニ驚テ先内裏へ參テ見奉ルニ主上ハ御座無テ只局町女房達此彼ニサシツトヒテ泣聲ノミソシタリケルサテハ山門へ落サセ給タル事子細ナシ勢ツカヌ前ニ山門ヲ攻ヨトテ四十八箇所ノ簿ニ畿内五箇國ノ勢ヲ差添テ五千餘騎追手ノ寄手トシテ赤山ノ麓下松ノ邊へ指向ラル搦手へハ佐々木三郎判官時信下姓美濃尾張丹波但馬ノ勢ヲサシソヘテ七千餘騎大津松本ヲ經テ唐崎ノ松ノ邊マテ寄懸タリ

又云大館左馬寮篠原伊賀守一人ハ大手ノ一二ノ木戸無殘押開テ只一人ソ立タリケル

新撰長祿寛正記云政長勢神南山へ押寄スル大手ハ遊佐次郎左衛門筒井順與南ハ神保宗次郎兄弟古市器瓦西ヲ態ト明ラル、是ハ此ノ口ヨリ敵ヲ落ハ落サントノ謀也

會津陣物語云一番ニ大將濱田治部手鎧提テ追來ル中目大學山川帶刀木村隼人オシツ、イテ追來門ヲ立サセス付入ニセヨト二ノ九大手門へ懸入ケリ

松原自休手録云大津ノ攻手從去七日一稠ク圍之九月十四日從長等山打大筒從海陸攻寄破出丸欲入大

手ノ門ニ由井助左衛門等閉門堅ク防之

奥羽永慶軍記云江口城條山形ノ先手氏江尾張守カ者トモ三

千餘人討レケリサレトモ氏江氣ヲ屈セヌアトヘハ引スイ

ヨ、進テ攻タリケリ勸十郎是ヲ見テ今ハタマリカチ

氏江カンナヘノ未崩サルハ味方ノ不覺ニテコソアレサラ

ハ我オシヤラン進川原毛ナル馬ノ七寸ニアマルニ打ノリ

例ノ大長刀ヲヒツサケ我ニ劣ラヌ兵三十騎大手ノ城戸ヲ

押ヒラキ乗ツレテ切テ出ル

續撰清正記云主計頭はすくに志岐乃みなとへ舟をつけ鐵

炮を打かけ迎に出たる侍共討たほし心よけにおし上り追

手門の向たるはけ山にちんをとる小西陣所へ參し城せめ

の評議をなす

築城記云追手ノ口ハ土橋可レ然也自然板はしなどは火を

付ル事アル也切て出てよき方を土はしにする也

増補家忠日記云享祿三年清康君軍ヲ引テ三州宇利ノ城ヲ

攻撃玉フ松平内膳正信定松平右京亮親次ヲ以テ大手ノ首

將トシテ清康君ハ城ヨリ後ノ山ニ陣シ玉フ城主熊谷武功

ノ軍士タルニ依テ其攻ヲ不レ待シテ速ニ大手ノ城門ヲ開

テ進テ出勇ヲ奮テ拒キ戰フ

又云慶長五年八月廿三日川瀬左馬助瑞龍寺ノ岩ヲ弃テ岐

越ヲ搦手ニ廻リ時ノ聲ヲ揚ケハ同時ニ落シ合ント鳴ヲ靜

メテ待アカス

賀越園諍記云江沼郡三越前勢一千餘騎時ヲ作り劔ヲソロヘ

テ攻上ル城中ニモ爰ヲセント、攻戰ケレトモ物トモセス

手負ヲノリ越息ヲモツカセス責入ケル間城ノ大將叶マシ

トヤ思ヒケン搦手ノ木戸ヲ開テ高塚振橋ヲ指テソ引ニケ

ル

築城記云カラメ手ノ口かけ橋もくるしからす但やう體に

よるへし

又云追手ヘ共敵ツク時は搦手より切て出るやうに可レ

拵也

按、城郭の前面を大手といひ後面を搦手といふ大手を

追手と書るは太平記よりま、見えたり追手ハオヒテと

かオツテとか讀へきをオフテと讀は穩當にもあらざる

上に大手とは假名もたかひたれと搦手の字に對て追手

と書るにやあらん扱大手搦手と云ふ義はいまだ詳なら

す強ていは、城郭の前面は制も嚴かに構も大なるから

に大手といふ猶第宅の正門を大門といふの類なり手は

浦手海山の手なといふ手にて方の轉語なり又葦手歌と斜

ひに書たるをいふ葦の葉の錦手磁器の錦の形を學てなひきたる形に似たれば也

阜ノ城本丸ニ敗シ入テ黃門秀信上所ニ加ル大手七曲口ニ

シテ木造左衛門佐津田藤兵衛其子藤三郎百々越前守等踏

留リ坂中ニ於テ奮戰フ

○搦手

吾妻鏡云文治五年八月十日丁酉去夜小山七郎朝光并宇都

宮左衛門尉朝經郎從紀權守波賀次郎大友已下七人以安

藤次爲山案内者一面々負甲疋馬蜜々出御館自伊達

那藤田宿向會津之方越于土湯之嵩鳥取越等攀登于

大木戸上國衛後陣之山發時聲飛箭此間城中大騷動

稱搦手襲來由國平已下邊將無益于構塞失力于廻

謀忽以逃亡

又云嘉禎元年九月十日長尾三郎兵衛尉光景建曆三年義盛

反逆之時雖爲十三歳小童向于北御門搦手一勵防戰

矢多被射立于腹卷云々

たかたち草紙云よしたけひろつな一とうにす、しく申さ

れたるもの也たれもかやうに申たき御返事にて候そやと

思ふにかたきあかつきよすへしおふ手からめ手と二手に

わけぬ事あらしみかたはたとひ無勢なりともりやうらん

にむらかつていくさは花をちらすへし

大平記云山門ノ大衆ハ二万余人大略徒立ナリケレハ如意

形なり方と義は異なれとカタのテとなるは一例なりカ

の力以上の語の韻まに籠りて者搦手といふ義は搦は据りとい

はんかことく曲輪の据りの方なる故搦手といへるにや

谷川士清か日本紀通證に神武紀の男軍女軍を男手の軍

女手の軍にて後世これを大手搦手といふといひたる奇

説といふへし

○虎口

長祿記云義就於嶽寬弘寺ノ軍勢皆々嶽山ノ際へ取倚野陣也

同廿七日城衆打出伊勢ノ國衆ノ陣へ寄せ太刀打長野勢數

多被討河内ノ衆ニハ大方新兵衛尉同彦左衛門尉花田宗

左衛門尉サ、ヲノ虎口ニテ討死

應仁私記云敵味方押分而牛角構要害（中略）去間隘ニ

分限一所々拘陣口攻口詰口出張口籠口口木

初井日記云信長秀治宗天正七年己卯三月八日國司屋形秀

治公攝津國へ御遣發ニテ候將軍ト和談調ヒ荒木村重退治

ノ催促ノ候又將軍父子へ御對面アル處ニ候先ハ國中御仕

置等虎口押へノ次第諸方ノ手合セ等丈夫ニ御評議ノ候東

口二田口ハ定押へノ外ニ加番モ増テ候又ハ入カヘラレタ

井出雲守を被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候成繁公は高矢倉に被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>御  
差圖被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候云々

又云<sub>藤生紀伊</sub>守<sub>守</sub>上<sub>上</sub>條<sub>條</sub>御城之取出御要害以下の虎口堀塀何れもよく  
御勘被<sub>レ</sub>成可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候云々

松原自休手録云古田兵部モ從<sub>二</sub>東國<sub>一</sub>歸テ入<sub>二</sub>松坂ノ城<sub>一</sub>雖  
然敵未<sub>レ</sub>寄來<sub>一</sub>依<sub>レ</sub>之割<sub>二</sub>微勢<sub>一</sub>侍十餘輩交<sub>二</sub>輕卒<sub>一</sub>津城南ノ  
口ヲ持ツ(中略)井上清右衛門ハ紛<sub>二</sub>居城中<sub>一</sub>翌日提<sub>レ</sub>首出<sub>レ</sub>  
從<sub>レ</sub>城稱<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>矢石<sub>一</sub>依<sub>レ</sub>之敵退<sub>二</sub>虎口<sub>一</sub>

按、城郭陣營の尤要會なる處を猛虎の齒牙にたとへて  
虎口といふなり

○城戸

奥州後三年記云武ひらかさねてよし光にいふやう御身わ  
たり給ふ事有へからすはしかるへき御つかひ一人を給て  
おもふ事よく<sub>レ</sub>申ひらかんといふよし光らふとうとも  
の中に誰かゆかんとするとえらふみな季方こそまからめと  
さたむるによりて季方をやるあか色のかりあをに無もん  
のはかまを着て太刀はかりをはきたり城戸はしめてひら  
きてわつかに人ひとりをいれ城中のつはものかきのこと  
くにたち並

源平盛衰記云<sub>城</sub>城<sub>城</sub>源<sub>源</sub>平<sub>平</sub>家<sub>家</sub>カ<sub>カ</sub>談<sub>談</sub>岐<sub>岐</sub>國<sub>國</sub>屋<sub>屋</sub>島<sub>島</sub>ヲ<sub>ヲ</sub>ハ<sub>ハ</sub>漕<sub>漕</sub>出<sub>出</sub>テ<sub>テ</sub>、<sub>、</sub>攝<sub>攝</sub>津<sub>津</sub>

國ト播磨トノ境ヒ難波瀨一ノ谷ニッ籠リケル去正月ヨリ  
此<sub>レ</sub>能所ナリトテ城廓構ヘタリ東ハ生田ノ森ヲ木戸口ト  
シ西ハ一谷ヲ城戸口トス

吾妻鏡云壽永三年二月七日丙寅武藏國住人熊谷次郎直實  
平山武者所季重等卯刻偷廻<sub>二</sub>于一谷之前路<sub>一</sub>自<sub>二</sub>海道<sub>一</sub>競<sub>二</sub>  
襲于館際<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>源氏先陣<sub>一</sub>之由高聲名謁問飛彈三郎右衛門  
尉景綱越中次郎兵衛尉盛次上總五郎兵衛尉忠光惡七兵衛  
尉景清等引<sub>二</sub>廿三騎<sub>一</sub>開<sub>二</sub>木戸<sub>一</sub>相<sub>二</sub>戰<sub>一</sub>

又云文治五年八月九日丙申入<sub>レ</sub>夜明旦越<sub>二</sub>阿津賀志山<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>  
遂<sub>二</sub>合戰<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>之爰<sub>二</sub>三浦平六義村葛西三郎清重工藤  
小次郎行光同三郎祐光狩野五郎親光藤澤次郎清近河村千  
鶴丸<sub>三</sub>以上七騎潛馳<sub>二</sub>過島山次郎之陣<sub>一</sub>越<sub>二</sub>此山<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>  
先登<sub>一</sub>(中略)七騎終夜越<sub>二</sub>峯嶺<sub>一</sub>遂<sub>レ</sub>馳<sub>二</sub>着木戸口<sub>一</sub>各名謁之  
處泰衛郎從<sub>二</sub>部下<sub>一</sub>伴藤八已下強兵攻戰此間工藤小次郎行光先  
登狩野工藤五郎損<sub>レ</sub>命伴藤八者六郡第一強力者也行光相  
戰兩人並<sub>レ</sub>奪<sub>レ</sub>合誓<sub>レ</sub>爭<sub>二</sub>死生<sub>一</sub>遂<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>行光<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>誅<sub>二</sub>行光取<sub>レ</sub>  
彼頭<sub>一</sub>付<sub>二</sub>差<sub>一</sub>木戸<sub>一</sub>登<sub>二</sub>之處勇士二騎離<sub>レ</sub>馬取<sub>レ</sub>合<sub>二</sub>行光見<sub>レ</sub>之廻<sub>レ</sub>  
轡問<sub>二</sub>其名字<sub>一</sub>藤澤次郎清近欲<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>敵<sub>二</sub>之由稱<sub>レ</sub>之云々

梅松論云細川の人々あみたか峯にて目もかけず川原を下  
りに南へむかひしほとに淀竹田に充滿したる敵とも竹田

官地論云從<sub>二</sub>城中<sub>一</sub>武者一騎出來(中略)舍人男楯計挾<sub>レ</sub>脇  
開<sub>二</sub>木戸<sub>一</sub>堀板橋靜ニ歩出敵陣近掛寄籠踏張通立上大音聲  
名乘是本郷修理進春親云々

錢輪軍記云信玄は一番に二千餘の軍兵を引具して城の四  
方を圍み持<sub>レ</sub>楯打立大手からめて揉合息を繼せず責にけ  
る城中より強卒共門を開き鎗を構一度に噓と揆出す形勢  
は寔に秋風のちりを飛すかごとく也甲軍早引退味方の城  
門を閉て英氣を助け暫く息をつく次第恰如<sub>レ</sub>神

賀越閭諱記云<sub>江沼郡三</sub>吉澄腹を立是程ニ名乗トイヘトモ矢  
ノ一ヲモ射出サヌハ臆病ノ至リカ敵ヲアナルルカイテ其  
儀ナラハ手柄ノ程ヲ見セントテ馬ヨリ飛テ下リテ木戸堀  
ヲ切落サントシケル間海山津ノ大助十騎計木戸ヲ開テ切  
テ出

小島景憲家譜云三ヶ條之返答景憲第一に淀に木戸を被<sub>レ</sub>  
成番手御尤に候第二に宇治川石山之前猿飛などの道筋能  
御穿鑿御尤に候

築城記云山城ノ事木戸は柱間七尺柱はいかほともふとく  
て可<sub>レ</sub>然哉寸法は不可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候也

木戸は凡如<sub>レ</sub>此

一カイ有木ヲ十六角はかりにけつり候くわんの木として

繩手の小處を堀切竹を打切て鹿垣を結構をあげ城戸を立  
て相待處に大勢掛りける處に御方の中より二町斗先立て  
武者三騎諍て懸しか槽近く成て黒馬に乗たる者真先に馬  
をさつとすゑて抜きたる太刀をさやにさし大手をひろけ  
て槽の下の城戸のかうしをおろさせしと取付て馬に乗な  
から胃のしころをかたふけし處に敵はかうしをおろさん  
と取付てあらそふ

ますか、み云<sub>の</sub>村<sub>村</sub>雨<sub>雨</sub>すてに東武士とも雲かすみのいきほひ  
をたなひきのほるよしきこゆればかさきにもいみしうお  
ほしさわくもとよりいとけはしきやまのふかきつゝらを  
りをえもいはす木戸さかも木いしゆみなといふ事ともし  
た、めらる

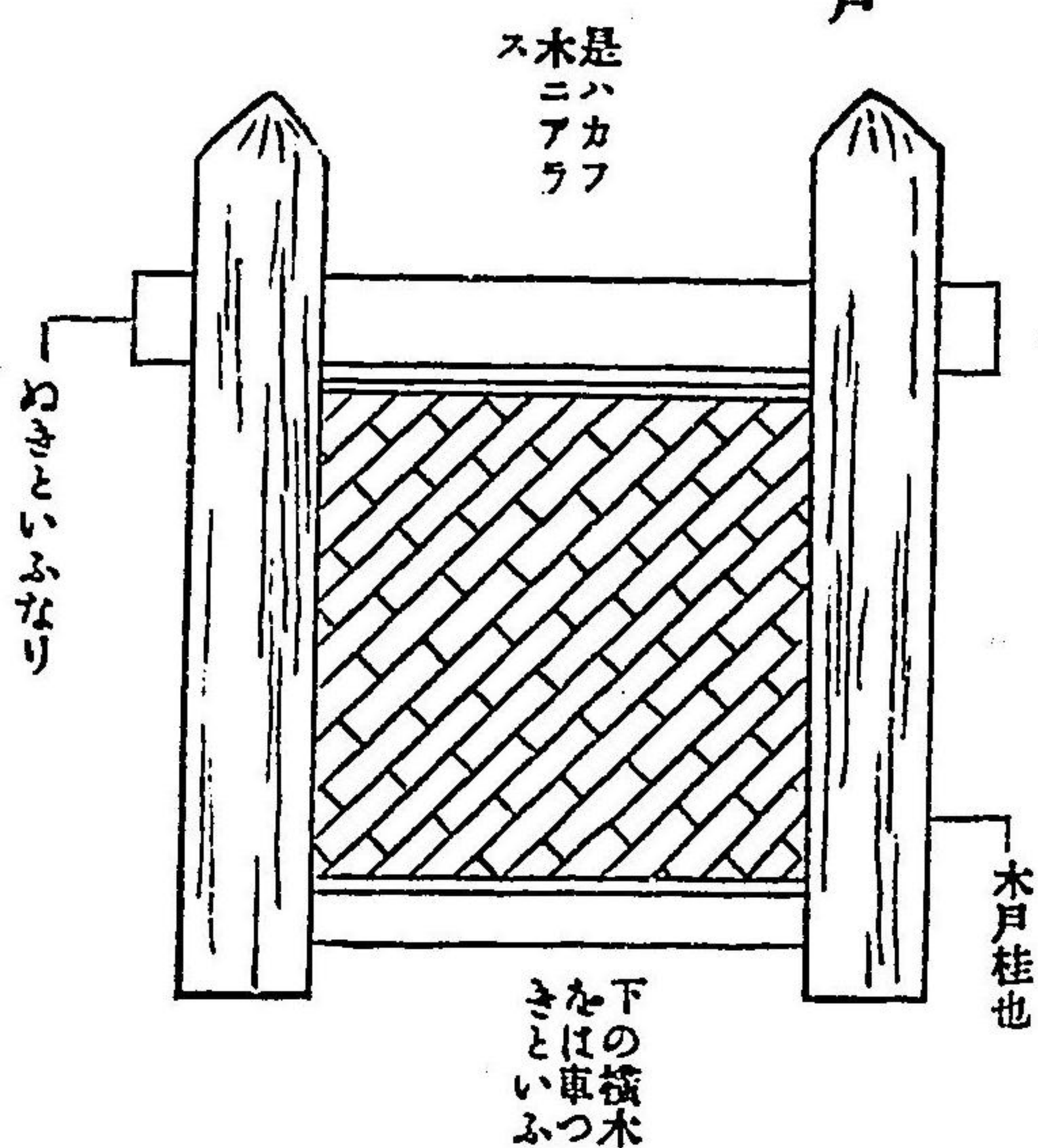
太平記云<sub>阿新</sub>本<sub>本</sub>間<sub>間</sub>三<sub>三</sub>郎<sub>郎</sub>カ<sub>カ</sub>一<sub>一</sub>ノ<sub>ノ</sub>太<sub>太</sub>刀<sub>刀</sub>ニ<sub>ニ</sub>何<sub>何</sub>ヲ<sub>ヲ</sub>通<sub>通</sub>サ<sub>サ</sub>レ<sub>レ</sub>テ<sub>テ</sub>ア<sub>ア</sub>ツ<sub>ツ</sub>ト  
云聲ニ番衆トモ驚騒テ火ヲ燃ノ是ヲ見ニ血ノ付タルチイ  
サキ足跡アリサテハ阿新殿ノシワサ也堀ノ水深ケレハ木  
戸ヨリ外へハヨモ出シサカシ出テ打殺セ片手ニ松明ヲト  
ホシ木ノ下草ノ陰マテ殘處無クサカシケル

又云<sub>京軍</sub>氏<sub>氏</sub>範<sub>範</sub>小<sub>小</sub>牧<sub>牧</sub>五<sub>五</sub>郎<sub>郎</sub>左<sub>左</sub>衛<sub>衛</sub>門<sub>門</sub>ヲ<sub>ヲ</sub>カ<sub>カ</sub>ヒ<sub>ヒ</sub>關<sub>關</sub>テ<sub>テ</sub>城<sub>城</sub>戸<sub>戸</sub>ノ<sub>ノ</sub>内<sub>内</sub>へ<sub>へ</sub>投<sub>投</sub>入<sub>入</sub>  
五尺七寸ノ太刀ノ鐔本取延テ只一騎返合

文正記云大路小路城門々々櫓々控<sub>二</sub>於役人<sub>一</sub>居<sub>二</sub>於警固<sub>一</sub>



○城戸



内よりさす様に木を渡す也シヨリ内へ明る也片ヒラキは左へ開也  
又云平城木戸の柱の口の廣さ九尺はかり長は土の上一尺はかり一方に一本兩方に二本也柱は面を廣四角に作りて可立地へはいかほとも深く入てよき也ク、リ木戸は右の方に有へし

按、城門城戸皆キトと讀りにしへ城をキといひし也又木戸とも書は延喜を延木參議を三木など書の例にて字訓を假名に用たるなり然るを近世木戸の字に泥て門

の籠略なるものをいふこと、なれり

○大城戸

吾妻鏡云文治五年八月八日乙未秀綱等雖相防之、大軍農重攻責之間及已冠、賊徒退散秀綱馳歸于大木戸、告合戰敗北之由於大將軍國衛  
新撰長祿寬正記云急トスレト山中ニマヨヒ夏夜無程明方ニ漸々弘川ノ陣へ馳付テミレハ三重ニ大木戸ヲ打高矢倉ヲ上タリ

○一城戸

太平記云船上合隱岐判官ハ猶加様ノ事ヲモ不ノ知擲手ノ勢ハ定テ今ハ責近キヌラント心得テ一ノ木戸口ニ支テ荒手ヲ入替々々時移ルマテツ責タリケル

又云笠置城中鳴ヲ靜メテ人アリトモ見エサリケルハ敵ハヤ落タリト心得テ四方ノ寄手七萬五千餘騎堀カケトモ不レ謂葛カツラニ取付テ岩ノ上ヲ傳テ一ノ木戸口ノ邊ニ王堂ノ前マテ寄タリケル

○二城戸

大友與廢記云星河の城佐伯のあしかる鐵砲ををろへ遠せめにして時刻をうつすとところに城中より七八百人一の木戸をひらき谷をこえいはねをつたひ出て鎧を合も有り

と云もの切て出毛利衆を悉く押拂ふ

○三城戸

太平記云金崎城イサヤサラハトテモ死ナンヌル命ヲ若ヤト寄手ノ大將ノアタリへ紛レ寄テヨカンスル敵ト俱ニ差違ヘテ死ナントテ五十餘人ノ兵共三ノ木戸ヲ同時ニ打出責口一方ノ寄手三千餘人ヲ追卷リ其敵ニ相交テ高越後守カ陣ヘソ近付ケル

嘉吉物語云京勢の中よりも石見勢七百餘騎おめさきけんてか、りけるかすてに一二の木戸をうちやふり三の木戸まで面もふらす切ていりけり

矢島十二頭記云天正九年巳四月に仁賀保百姓とも右之通

手引仕候ゆる仁賀保へ攻入三の木戸迄責入候處に赤宇津道益殿子吉殿後陣被成候ゆる御陣御引取被成候

○詰城戸

岡本記云城の一のきと二のきと三のきと、申は一のきと、は一さし口の事也三のきとはつめのきと、常人の申きとの事也

○一門

清正記云武州岩付は北條十郎城に候八州にて要害堅固之由之聞召及可然所より先可責千一之旨仰道則木村常陸

長門本平家物語云重衡南都十二月廿八日重衡の朝臣南都へ

發向す三千よきを二手にわけて奈良坂般若寺へむかふ大衆かちたちうち物にてふせきた、かひけれ共三千よきの軍兵馬上にてさんくにかけたりければ二の城戸口ほとなくやふれにけり

太平記云將軍御進發大渡頼玄彌方ヲ得テ櫓ノ下ヘカツキ入

堀立タル柱ヲエイヤ、ト引ニ橋ノ上ニカイタル櫓ナレハ橋共ニユルキ渡テスハヤユリ倒シヌト見エタリケル櫓ノ上ナル射手共四五十人叶ハシトヤ思ヒケン飛下飛下倒レフタメキテ二ノ木戸ノ内へ逃入ケレハ寄手數十萬騎同音ニ籠ヲ蔽テ笑ケル

萬松院殿穴太記云六月廿四日の朝霧のたえまより三百餘騎大はたさしつれ弓とりをは前にす、め一枚たてをつきしと見て三宅の城に押寄矢一二いちかふ程こそあれ頓て打物の鞘をはつし大手の木戸逆茂木を引やふり二の木戸迄寄せつけたる

江濃記云尼子合元就方より郡山太山口七口の道にてせり合有寄手は不案内者にて毎度毛利衆勝軍なり毛利元就是にさほひ自三千餘騎にて尼子か本陣青山へ逆打して二の木戸まで責入けるを尼子方にて諏訪刑部大夫か子息三澤

介淺野彈正少弼山崎岡本家康内本多鳥井平岩已下二萬餘岩付へ押寄即時に外橋共乗破千餘討捕之本城一之門へ相着候

○三門

安土日記云天正十年正月朔日慧見寺毘沙門堂御舞臺見物申表之御門ヨリ三之御門之内御天主之下御白洲マテ御伺公候

○詰門

毛利家記云秀元卿長束殿へ仰ケルハ加様ニ大勢ノ者徒ニ可居コト不可然不日ニ津ノ城ヲ攻給ントテ九月廿四日ニ津ノ城へ押懸給フト即時南ノ方追子ノ橋ノツメノ門ヲ押破リ込入ケレハ二ノ丸へ込入門ヲ立シヲ追續キ二ノ丸ノ塀ヲ乗越云々

○二階門

甲陽軍鑑云内藤真田は小田原筋の手あてに被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>信玄公御旗本ははい島森の内に備を立らる、瀧山の城三のくるわをせめちらす陸奥守二のくるわ二階門へあかりさいはいをとつて爰を最後と防かる、

甲陽軍鑑末書云信玄公御旗本ハハイ島森ノ内ニ備ヲ立ラル、瀧山ノ三ノクル輪ヲ攻テラシ陸奥守二ノクル輪ニ階

氏郷記云<sub>小田原</sub>町野輪之丞夜ハ忍ヒテ案内ヲ見ケルカ其夜モ忍ヒテ埋門マテ行シニ敵ノ大勢ヒシ、ト用意シテ早氏郷ノ陣へ切テ懸ラント人数ヲ押出シケレハ云々

關八州古戦録云<sub>太田氏房</sub>二齋生氏郷ノ伊賀ノ者町田輪之丞トテ忍ヒノ骨張ナリシカ其夜ノ子刺計ニ氏房ノ持口ノ埋門へ付テ城中ヲ伺ヒケレハ云々

○廊下門

甲陽軍鑑云勝頼公甲府を御立あり東上州へ打出大湖山上せんなんと御順見なさる、なり則御順見の次同城をは御攻なさるまじきとして各侍大将持小旗はかりもせした諸勢すはたにて御供仕る處にせん城より足輕を出し上州安中衆とせり合を始候云々勝頼公仰られ候へ共諸勢盡堀きはへつき殊に土屋總藏家中衆一の門につきて安氣しやうをおろしたる處を土屋衆脇大市と申若者しやうを安氣廊下門おしこむ

甲陽軍鑑末書云土屋衆一宮左太夫ト云者鍵一丁ニテ城内ノ鍵六本ト廊下門ニテツキ合フ後ハ左太夫叶マシ引ヘキト云又市申ハ爰ヲ去以來出家ニ成ヘクハ存セス又市ニ於テハ去マシキト申ニヨリ一宮モ立サラス然ル處ニ一條殿衆ニ淺美清太夫堀無手右衛門中根七右衛門三人走來テ脇

門へアカリ再拜取テ爰ヲ最後ト防ケル

太閤記云<sub>因幡國島取</sub>附城之御普請は七月朔日より鐵初ありしか十日頃にははや塀櫓二階門堀まで出来にけり

續武家閑談云秀吉御下知を以て三月十九日巳の刻過より先鋒の諸將箱根のこなたより仕寄道具を三島の陣所より取寄ける(中略)門脇押破り三丸へ押込故城兵二の丸へと引取る則附入にせんと勘兵衛す、む二丸へは水堀有て十間斗のらんかん橋ありそれを敵味方入交り押込ゆへ二階門丈夫に構へけれとも立させずして乗込畢ぬ

見聞雜錄云北條陸奥守は三の廓を責破られ二の廓二階門へ上り采配取て聲を枯し爰を最後と防こと兵糧遺ふ間も無<sub>レ</sub>之體也

○黒門

増補家忠日記云慶長十九年十月十九日藤堂高虎進テ天王寺口城ノ黒門ニ向ヒ陣ス城兵大野主馬助木村長門守是ヲ守ル

○黒鐵門

水野勝成記云拙者ものせり合候てくろかねの門まで押込申候城のり候事は相ならずくろかねの門につきい候

○埋門

又市同前ニ一宮左太夫鍵堀ニ刀ニテコタヌル云々

○上鑰門

甲陽軍鑑云花澤城門脇へ五人つきたる衆は四郎勝頼公長坂長閑名和無理介諏訪越中初鹿傳右衛門也城のあけ鑰子を無理介あけられよと初鹿傳右衛門申候へは矢鐵砲しけくしてあけらる、所にてなしと無理介挨拶也そこにて傳右衛門立あかり鑰子を押上る諏訪越中つ、いてわかもちたるかま鑰をもつてつきあけて歸(中略)越中傳右衛門今の鑰鑰をとつて歸る

水野勝成記云伊藤忠左衛門<sub>平泉</sub>手にあい不<sub>レ</sub>申候それよりおいくつし城までおいつ町におしやふりあけちやうの門二かまへ御座候

○透門

甲陽軍鑑云城取の事(中略)一門ちふくの事すき門の事

○籠門

箋輪軍記云抑此城をみのわと申事榛名山の尾崎堀切築たる城の南表は箋に似たる込みのわと名付たり名城なれば堅固にして飛鳥もかけりかたし況や籠城の面々上杉譜代の舊臣にて名惜候一騎當千の侍也甲軍多勢若干鐵砲にて打殺され近きは矢にかけ籠門へ近付者共は弩を放し追拂

塙乗る者は鎧にて撲落しけり

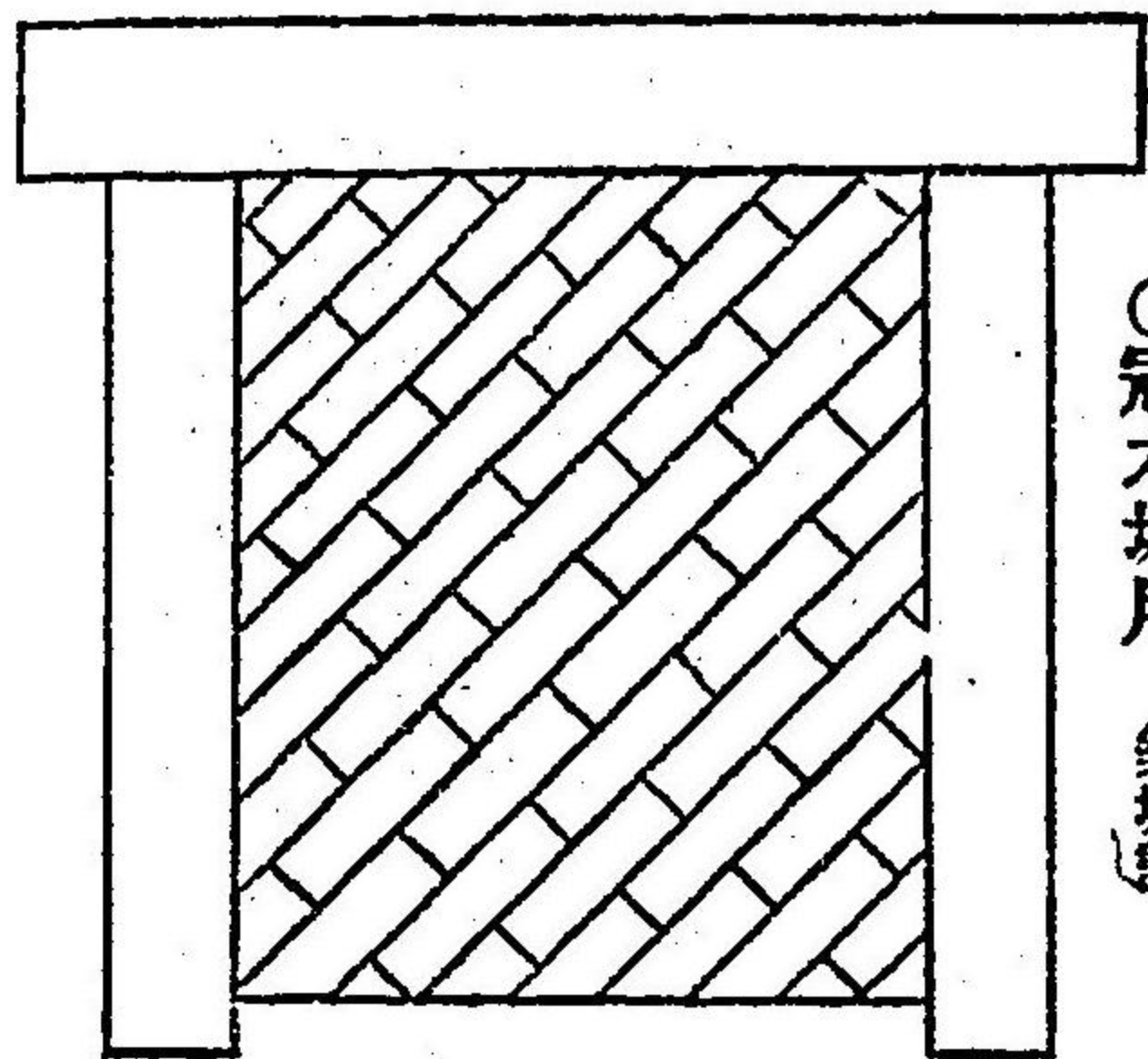
○柵門

武蔭叢話云十月八日に城代小西華人切腹して宇土の城落去其砌小西家來大方残らず清正抱へ候杉本次郎助を呼先月廿一日の夜討の時柵門にて其方と鎧を合たるといふ者有り覺えはなきかと尋らる杉本承り引口の時遅は候得共一人付來り外張の篋戸口迄來り候故拙者立こたへ鎧を合十文字にて彼の者の左りの腕をかけ申候手こたへ仕候扱木戸を打夜明見候へは十文字の鎌に血付是あり候其ものはとつはいの甲に烏毛の黒熊の引廻付候て直鎧を持候と云則田中兵助也

○冠木城戸

○揚城戸

平塞録云諸手段々陣替シテ陣場定リケレハ肥後ノ勢入替テ大先手トナル肥後一手ノ請取口ハ兩口ト名ク其場ニ内虎落ヲ設ケ條



○冠木城戸 築城記

也戸木ノキヲカ

垣ニ舉城戸アリ云々

○揚篋戸

太閤記云利家未孫之いか、はしたりけん三之丸外構の揚篋戸をおろさす引しかは敵得たりかしこしと引付て來りしを野崎孫介同與左衛門兄弟面もふらす引返し鎧を合

會津陣物語云然ル處へ長谷黨城ヨリ悉甲八百餘上篋戸ヲ開キ城外へ打テ出カノ湖ヲ涉テ懸リ來ル直江カ軍兵トモヒタ、ト鎧ヲ臥テ相懸リニ進ム

○釘戸

結城戰場物語云箱根山と申は前に水海をかまへ兩方の山崎々としえはんしやく岩をかさね屏風をたてたることくなるに矢倉かいたてかきならへ釘戸さかもき夥敷石弓はりかけてよせておそしと待かけたり

○櫓戸張

由良家傳記云籠城の内或時新田へ北條家働はりつけ木を押立城を渡し不申候は、國繁顯長をはりつけにあけ可申旨申候(中略)妙印様あれ追散せと御下知被成候へはくぬ木戸張を開き内より二三百斗にてとつと突て出申候へは北條兼政軍仕候

○大戸張

○小戸張

常陸國密藏院文書云氏康當地へ被取懸候附而急度御禮畏入存候仍去二日已被寄來候間宿之外へ出二人數候之處太源爲三先勢一打寄之間懸野伏候處氏康備前迄引過候軒氏康父子取手鎧被寄來候間致口宿之内へ引入大戸張小戸張新曲輪自三戸張切て出新宿迄拂出候敵手負死人數多候條用害廻々不得陣取口中戸所五里斗引除陣取候間翌日一行可令興行一之由存候處夜中退散無念此事候何様御尋之御禮自拙者可奉啓候恐々謹言三月七日佐竹殿御報中務入道晴助押

○門隱

太閤記云山中之嶺渡邊三之丸門かくしに相添上篋戸有しを付入にせまし欲し見しか共手前無人ても有又は向ふと左之塚より多く鐵砲を打かけしかはしはしたためらひ候き

○升形

太閤記云名護屋城二之丸南之門三間ニ龍野侍從同升形七間四方石垣同人

甲陽軍鑑云ますかた本圖はこはちの事但大將の數奇次第五八をもつてす門前をも升形と云ふ口傳有

又云山本勘介先ますかたの談儀を委く申上ますかたに付侍四十騎のさたを開召

○武者溜

小島景憲家譜云伏見追手治部少輔曲輪武者溜り陣取堅ル人三千可有候佐和山惣人數不來間も其三千八百餘所之三方に向ひ夜は夜打晝は物見を出し云々

續撰清正記云其頃八幡之國と云やこうを下し熊本の鹽屋町三町めの武者溜りにて勸進能をいたし其能の跡に歌舞伎をして家來の諸侍は銀子一枚宛出し棧敷を打て見物し地下町人は八木を持來て鼠戸の口より入て芝居にて是を見る此國歌舞伎の始なり

○勢溜

大友與廢記云薩州白井城中之諸勢一勢は大手の勢たまり又一せいは清水口にひかへたり薩州勢備は上もんせんのかたはらの高みにおきて次第々々に引取云々

○馬溜

築城記云平城ハ城ノウシロニ勢タマリ有様ニ可拵也

甲陽軍鑑云一馬たまりの事一門扉ひちかねの事一門ちぶくの事

○馬出

甲陽軍鑑云勸介申上る馬たしと申物は城取の眼にて候子細は城をまかれて城内より備を出すにあふなげもなく候又攻手に成申て取よせにく、候

甲陽軍鑑末書云花澤落城ヲ聞藤澤徳ノ一色明テ退是ハ堅固ノ地也トテ馬場美濃守ニ被ニ仰付ニ馬出ヲトラセ田中ノ城ト名付テ暫番手持也

○角馬出

○丸馬出

見聞雜録云花澤落城に付藤枝之城も小原肥前與力之者其番手差置候處悉明ケ退信立公御馬を被ニ爲寄城取之様子今川了俊之繩張にて中々堅固之地也乍去當城之馬出古風にて角馬出也不宜と在て馬場美濃守を召被ニ仰は其方此馬出しを差圖仕取直し候へ尤丸馬出しの儀心得たるかと御意也馬場美濃守申上は山本勘介委相傳申候に付丸馬出し并三間之垣之極意迄乍ノ憚相心得申候此城には殊更壯之馬出をも御付被ニ遊可ノ然と申上る

大友興慶記云<sup>新編御取立の條</sup>吉日良辰をえらんで城取あひはしまりの法印しは田にのたまはくものよりのほりよこくなはかさしの土手なかし土手角馬いたしとかはの大藏屏岡横矢の分別しかるへさやうにみはからは候へ云々

甲陽軍鑑云すみ馬たしの事付よこくるわの事一すみかけの城内せはし一まる馬たしの事一まる馬たしに三間のかき口傳大極意なり

○築地馬出

○辻馬出

甲陽軍鑑云勸助承て申上る云々當時とりたてたる城兵堀ましき處に堀をほりて築ましき處に土居をつき柵の木の場合に屏をかけ都の土居かさしの土居屏櫓階廊下橋の人馬の不淨かくしなかしついちの馬たし五方六方八方正面なんと、申事も存たる者無之

○見付

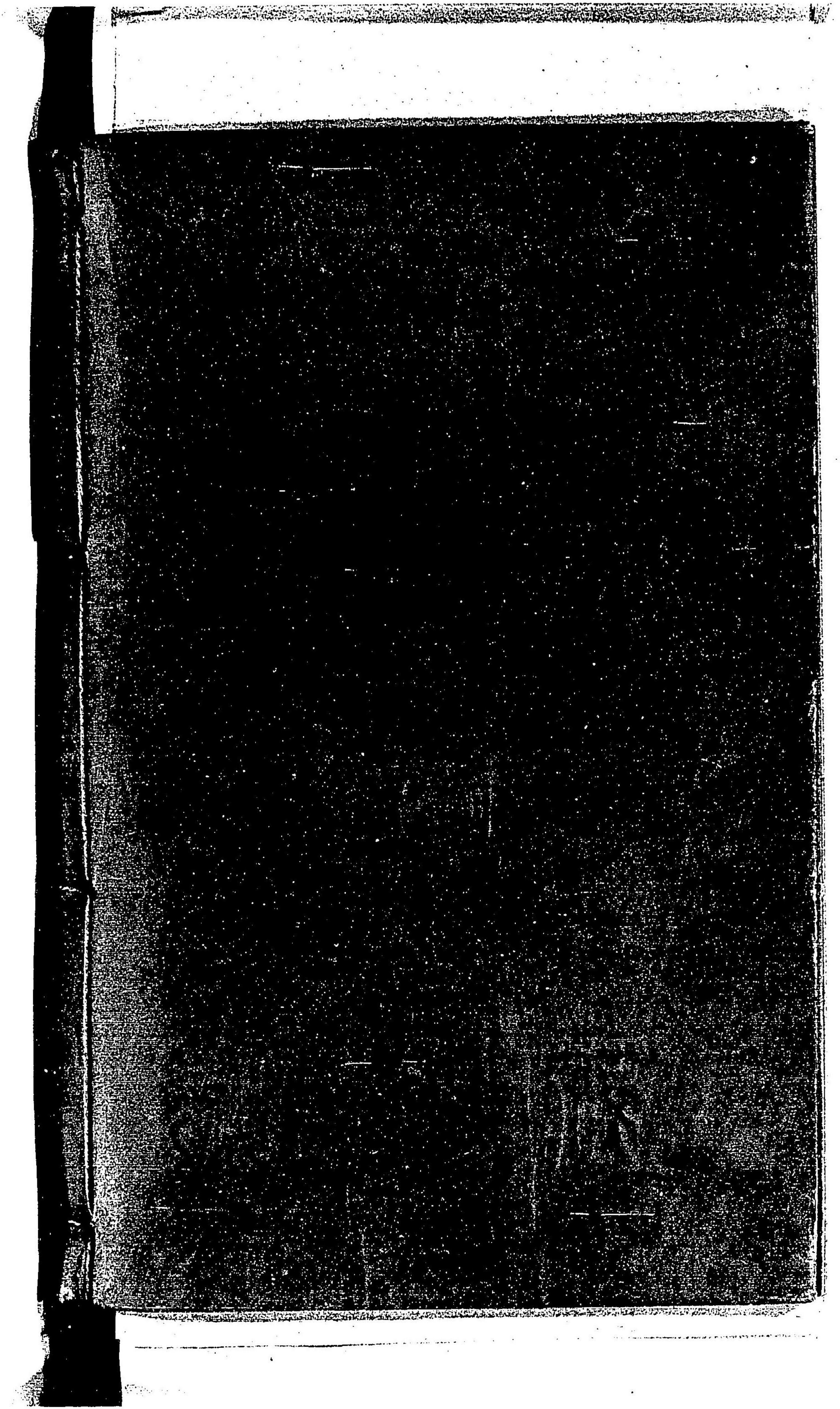
又云信立公御家中城取極意五ツは辻の馬出し云々  
續武家閑談内藤家傳云元龜元年十月中旬信立遠州へ發向し乾の天野宮内右衛門案内にて飯田の城を明渡すの間見付の臺へ信立旗を立ちらる東照宮の御勢三千餘騎一言坂にて合戦す

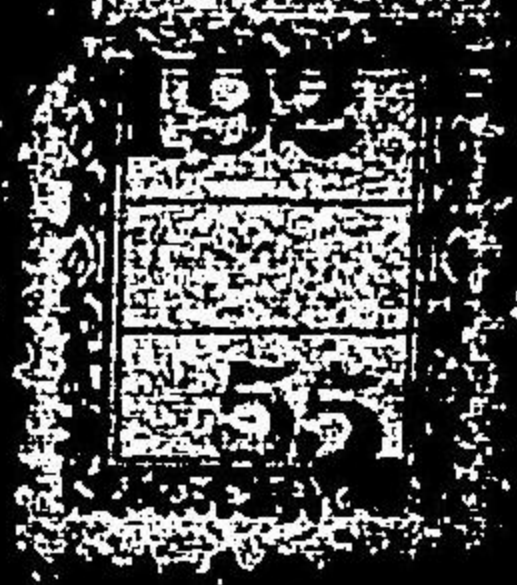
192  
55

192  
55

*Handwritten notes in cursive script, possibly including the words "Curtain" and "Curtain".*

*Handwritten notes in cursive script, possibly including the words "Curtain" and "Curtain".*





武家名目抄  
十五